

七隈の杜

七隈の杜

NANAKUMANOMORI

Active
福岡大学

2019 / 第15号

2019/第15号

Vol. 15

FUKUOKA UNIVERSITY



福岡大学

福岡大学

2019年、福岡大学は創立85周年

建学の精神

思想堅実・穩健中正・質実剛健・積極進取



教育研究の理念

「人材教育」と「人間教育」の共存
「学部教育」と「総合教育」の共存
「地域性」と「国際性」の共存

「変化」

2019年、「平成」という時代から新たな時代への一歩を踏み出します。

明治、大正、昭和、平成。それぞれの時代の節目は、社会にとっても人々にとっても、大きな転換期となりました。

平成の30年間、社会はどのように変わり、発展・進化してきたのでしょうか。私たち自身はどう成長してきたのでしょうか。

今号では「変化」をキーワードとして、歴史、言葉、法律、経済、科学、医療、スポーツ等のさまざまな分野からの寄稿文を掲載しています。

本誌を通して、新しい時代に向けて期待感を抱き、明るい未来を思い描くきっかけになれば幸いです。

平成の時代は各地で多くの自然災害が発生し、尊い命や幸せな日常が幾つも失われました。

その事実を次の時代に伝えていくことも、今の時代を生きる私たちの使命であり、社会として決して忘れてはならないことだと思います。

七隈の杜 第15号／2019年

目次

建学の精神	
七隈の杜 第15号テーマ「変化」	
目次	

キャンパスギャラリー

伊藤研之「崖の上の樹」について	
福岡大学人文学部文化学科教授 植野 健造	4

学長室から

「変化」の中で試される大学	福岡大学長 山口 政俊	6
---------------	-------------	---

特集「変化」

変化する歴史学と記憶	福岡大学人文学部歴史学科教授 森 丈夫	10
平成と日本語	福岡大学人文学部日本語日本文学科教授 江口 正	15
身近になった「著作権」問題	福岡大学法学部准教授 谷川 和幸	27
趣味嗜好の多様化という変化とビジネスの関係を考える	福岡大学商学部准教授 篠原 巨司馬	33
生命科学における科学技術の進歩と生物に対する考え方 - 遺伝情報を書き換える、作る時代が来る？ -	福岡大学理学部化学科准教授 福田 将虎	41
再生医療の変容について	福岡大学医学部教授 小玉 正太	47
福岡大学筑紫病院の歴史と共に歩んだ私の看護師人生、変わらぬ看護観	福岡大学筑紫病院看護部副看護部長 福本 洋美	51
スポーツのコーチングが変わる	福岡大学スポーツ科学部教授 米沢 利広	57
福岡大学研究ブランディング事業「福奏プロジェクト」の紹介		63

大学院学際シンポジウム

A.I.ではなく I.A.時代に向けて～基礎研究分野への影響	理学研究科 教授 田中 勝	65
人工脳を作るための細胞レシピ ～構成論的に神経ネットワークを作る試み～	薬学研究科 准教授 桂林 秀太郎	67
人工知能の応用と今後の展望	工学研究科 教授 鶴田 直之	68
犯罪行動の痕跡から犯人像を推定する ～犯罪心理学におけるデータマイニング的アプローチ	人文科学研究科 准教授 大上 渉	70

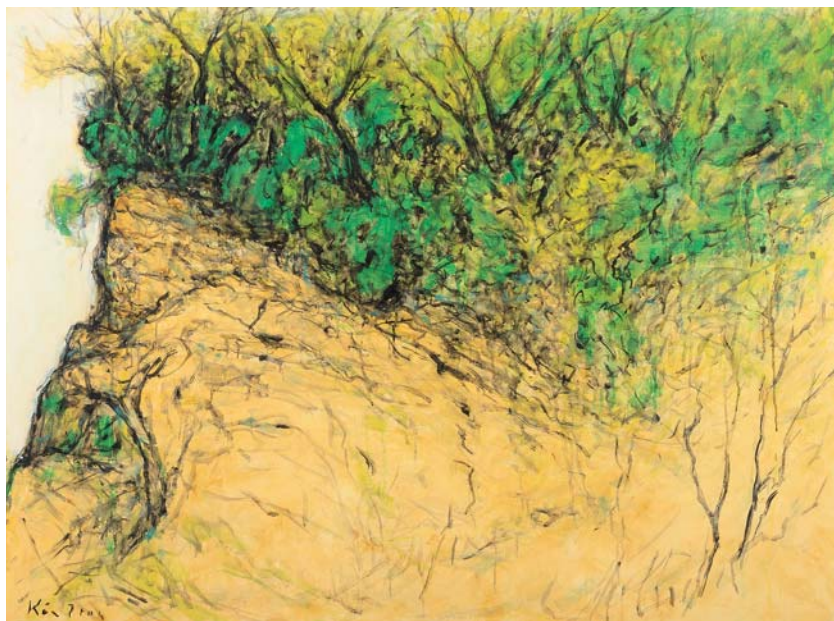
随筆

治療と仕事の両立を実現するために	福岡産業保健総合支援センター 労働衛生専門職（両立支援担当） 三谷 梨紗	74
環境問題とともに振り返る	福岡大学同窓会有信会理事 辻 勝也	82
福岡大学指定寮 創立50周年を迎えて	福岡大学指定寮 寮主会長 隅田寮 隅田 勇治	89
東日本復興夏期セミナーを通じての成長	福岡大学法学部経営法学科2年次生 小森 友暉	93
自分の思いを行動に～イギリスで出汁文化を広めることに挑戦～	福岡大学人文学部英語学科4年次生 荒井 智子	100
日本での生活を通して成長した自分	福岡大学法学部法律学科2年次生 レ デイン チョン	106
「考え」のその先へ	福岡大学附属大濠高等学校3年生 矢嶋 優奈	111
世界への憧れと現実、夢と希望	福岡大学附属若葉高等学校1年生 梶原 葵	114
福岡大学インフォメーション		119
第14回（平成30年度）全国高校生川柳コンクール入選作品		121
福岡大学校歌		123
情報発信		124

キャンパスギャラリー

伊藤研之「崖の上の樹」について

福岡大学人文学部文化学科教授 植野 健造



伊藤研之「崖の上の樹」

1969年

油彩・カンヴァス、額装、97.5×130.5cm 60号F

左下に署名：Ken Itoh

裏面木枠貼紙：1969. 5. フォルム画廊個展／崖の上の樹 60F／Ken. Itoh

福岡大学所蔵

一見したところ、何が描かれているのか少し困惑する作品である。画面の上下、左右が定かでないようにも見える。サインとおぼしき「Ken Itoh」の向きを頼りに、画面の上下を確定することができる。すると、黄土色の土肌を見せる崖の上に生える樹木や草が描かれていることが理解されてくる。崖の地形の輪郭や木々の樹幹を黒のデッサン風の線で重ねて描き、木々の葉や草が黄色と緑色で塗り分けられながら彩色されている。木々の描写が画面上部まで充填され、左方の空間は一色で均一に塗られて抽象的な空間となっている。

油彩画であるが、水彩画のような透明感のある美しい色が速度あるリズムカルな筆致で配置され、全体にスケッチ風のみずみずしい魅力的な作品となっている。

伊藤研之（いとう・けんし）は1907年、福岡市に生まれた。福岡県立中学修猷館を経て、1933年に早稲田大学文学部仏文科を卒業。在学中の1930年に一九三〇年協会展、翌1931年に第18回二科展に「風景」が初入選し、洋画家を志して二科展に出品を続けた。1940年に第28回二科展出品作「湖」で特待賞を受賞、同年に中国・上海に渡り、第二次世界大戦後の1946年に帰郷、以後福岡市に居住した。1947年から再建二科展に出品、1948年の第33回展に出品した「海辺」「子供の夢」「野」で二科賞を受賞、1952年に会員に推挙され、福岡における二科会の中心作家となった。福岡県文化会館壁画（1964年）、飯塚市文化会館壁画（1966年）、福岡県職員会館黒田荘壁画（1967年）などの壁画も制作している。

福岡の文化推進にも広く尽力し、1967年に結成された福岡文化連盟の初代理事長を務め、1970年の第29回西日本文化賞、1976年の第1回福岡市文化賞を受賞した。1978年、福岡市で没する。

画風は、昭和20年代の叙情性の強いものから昭和30年代の海老原喜之助に触発されてサーカスや馬をテーマとしたもの、次いで建物や動物を組み合わせたシュルレアリスムの風景へと展開するが、一貫して詩情漂う心象風景を追求した。

本作品は、1969年の個展出品作。没後3年目の1981年に、福岡市美術館で開催された遺作展にも出品された。その後、2012年に解体された旧福岡大学図書館の会議室に長らく展示されていた。

（参考）古川智次「図書館の絵と彫刻」、『福岡大学図書館報』第30号（1981年10月）他。

執筆者紹介

植野 健造（うえの けんぞう）

1960年生まれ。福岡大学人文学部文化学科教授。石橋財団石橋美術館（現・久留米市美術館）に25年間学芸員として勤めた後、2011年より現職。研究テーマは日本近代美術史、博物館学。



「変化」の中で試される大学

福岡大学長 山口 政俊

執筆者紹介

山口 政俊（やまぐち まさとし）

1948年生まれ。1983年4月福岡大学薬学部助教授となり、1990年教授。薬学博士。専門は薬品分析学。薬学研究科長や薬学部長等を歴任し、2015年12月から福岡大学長、学校法人福岡大学専務理事。スローガン「アクティブ福岡大学」を掲げる。



少子・超高齢社会がますます進行する現在、2007年に誕生した子供はその半数が100歳以上に達するらしい。最近、将来目標の目標年として2040年が想定されることが多い。こと大学に関係する数字としては、第一次ベビーブームの世代が大学進学を迎えた1966年には249万人いた18歳人口が、2018年は118万人に減少し、2040年にはさらに88万人になると予測されている。全体として、右肩下がりの傾向が続く。この傾向は単に人口の問題だけではなく、さまざまな領域に波及し、日本社会全体の構造転換という大きな「変化」につながっていかざるを得ない。

その一方で、人間は未来に対する希望や期待なしに生きていくことはできないらしく、明るい将来予想も設定されている。特に2040年の将来像として挙げられているのは、「Society5.0」の到来である。これは、狩猟社会として誕生した人間社会「Society1.0」が、農耕社会「Society2.0」へと変貌し、長い時間の後に、18世紀から次第に産業革命という工業化によって「Society3.0」へと移行し、さらには、20世紀末に始まった情報化の波によって、情報社会である「Society4.0」が出現した。そしてその次の段階が「Society5.0」とされる。Society5.0とは、サイバー空間と現実空間を高度に融合させた世界という想定である。特にそのSociety5.0を支えるのが、IoTとAIという2つの柱である。

IoT (Internet of Things) という用語は、1999年にイギリス人技術者のケビン・アシュトン氏が初めて使った概念として、その後世界中に広がった。さまざまな「モノ (Things)」がインターネットに接続され、情報交換することによって相互に制御する仕組みを表現する概念である。スマートフォンを一台持っていれば、インターネット経由で外から自宅の機器を制御し、帰宅すれば、空調が入り、食事の準備ができていたといった快適な生活が語られる。また、産業分野でも、温度や湿度をコントロールし、「新鮮さ」や在庫状況といった商品管理もインターネットを使って可能となる。

他方、AI (Artificial Intelligence) は「人工知能」とも訳され、コンピュータをハードとすれば、ソフトとしては「言語の理解や推論、問題解決などの知的行動を人間に代わってコンピュータに行わせる技術」が想定され、自動車の自動運転など、これまで人間でしかできなかった部分が機械によって代行できるようになってきた。将棋やチェスなどで世界一の名人がロボットに投了するのは、極めてこの時代を象徴するシーンであった。今後、言語理解が進んだロボットが介護の分野で活躍することもできるようになるだろう。人手不足の解消法としての期待は高まる。今まで人間が関与しなかった領域にもロボットが進出することも予想され、科学技術の発展とそれによる経済成長といった明るい未来も語られる。大学全体としても、このSociety5.0に対応することがこれから強く求められるであろう。平成の次の時代は、こうした夢のような世界となるかもしれない。

ただ、科学技術の発展によって明るい未来が語られたのは今回が初めてではない。過去にも同じようなことがあった。1950年代は原子力時代が華々しく宣伝された。鉄腕アトムはそうした時代を反映したものとして登場した。原子力の灯に対する期待は並々ならぬものであった。だが、便利さは常に落とし穴を伴う。科学の時代の夢物語の後に続いたのは公害であったし、チェルノブイリ原発事故、3.11の福島原発事故であった。当初は原子力時代の副産物として必然的に発生する放射能に関する認識が乏しく、その恐ろしさは過小評価された。最初から全てを認識することは難しくても、その陰の部分に対する創造力は不可欠であろう。その意味で、大学としては、夢物語について立ち止まって考えてみることは絶対に必要なことである。

すでにSociety3.0 (工業化) の時代に機械がもたらす弊害について、それを描き出した映画作品として特筆すべきは、チャップリンの『モダンタイムズ』(1936

年)であろう。この作品は未来派的な手法で構成されているが、資本主義社会や機械文明を題材にしたもので、労働者の個人の尊厳が失われ、機械の一部分のようになっていく世の中を笑いで表現している。自動給食マシンの実験台にされるシーンや、チャップリンが歯車に巻き込まれるシーンなどが有名である。そこで描き出されるものは機械に支配される人間疎外の状況であり、人間は科学技術だけでは幸せになれない、という確信に満ちたメッセージであった。

映画『独裁者』(1940年)でもチャップリンの機械に対する警告は続く。トーキー(映像と音声同期した映画のこと)嫌いで有名なチャップリンがせきを切ったように、この作品の最後で展開する有名な演説の中では次のように言われる。「スピードは意思を通じさせず、機械は貧富の差を作り、知識を得た人類は懐疑的になった…彼等は人間ではない!心も頭も機械に等しい!諸君は機械ではない!人間だ!心に愛を抱いてる。愛を知らぬ者だけが憎み合うのだ!独裁を排し、自由のために戦え!」

Society5.0についても、すでに警告が発せられている。著名な物理学者であるスティーヴン・ホーキング博士は、「人工知能の発明は人類史上最大の出来事だった。だが同時に、『最後の』出来事になってしまう可能性もある」と危惧を表明している。例えば、2015年にアルゼンチン・ブエノスアイレスで開催された人工知能国際合同会議で、ホーキング博士は書簡を発表し、特に軍事部門でのAIの使用について警告を発し、AI搭載型兵器となった無人爆撃機や銃火器を持った人間型ロボット等によって、戦争の様態が変わり、人類的危機に陥ることもあり得ると大きな危機感を表明した。

また、AIの普及に伴い労働人口の49%がロボットによって代替され、「AI大量失業時代」の到来を予測する人もいる。こうした陰の部分に対して、ビル・ゲイツは、「よくコントロールできれば、ロボットは人間に幸福をもたらせる。しかし数年後、ロボットの知能が十分に発展すれば、必ず人間の心配事になる」と警戒している。

Society5.0は仮想空間と実体空間が融合したものというが、危険性も指摘できよう。実体空間から乖離したインターネット世界では、文化がなくなり、平然と他人を傷つける発言をまくしたてることができるし、フェイク(嘘)、ヘイト・スピーチが簡単に流布し、世論を左右するということにもなりかねない。そこでは確たる情報や事実を見抜く力も必要とされようし、「見定める力」が必要となる。

Society5.0では、科学技術そのものの変化だけではなく、むしろ人間関係や社会構造にも大きな変化が予測される。特に少子高齢化の問題が絡むようになると、福岡大学も掲げるダイバーシティ(多様化)が一層試される時代となる。女性が働きやすい環境はますます求められるし、人生100年時代に応じた高齢者の生きがいも考えなければなるまい。特にSociety5.0が、「サイバー空間と現実空間を高度に融合させた世界」として想定されていると、国境を越えた人間の行き来はますます盛んとなり、いずれ日本でも「移民」問題が^{そじょう}組上^{そじょう}上がってくるようになるだろう。現在国会でも議論されようとしている移民の受け入れが加速化すると、ヨーロッパが抱える問題を将来的には日本も抱え込むことが予想される。普通に隣に外国人がいる環境の中で、その人たちとどう向き合っていくのか。ダイバーシティはますます現実的な響きを持つようになって考えられる。「異」なる存在を受け入れる力量が試される。その意味で、変化に必要なのは「許容力」だと言えないこともない。

Society5.0が大学に求めるものは多い。これから訪れる新たな社会を真に明るい未来とするためには、提起されている多くの課題を一つ一つ着実に分析し、対処していく底力を培うことが大学には期待されている。

歴史

変化する歴史学と記憶

福岡大学人文学部歴史学科教授 森 丈夫

執筆者紹介

森 丈夫 (もり たけお)

1969年生まれ。福岡大学人文学部歴史学科教授。専門は初期アメリカ史。

現在、九州歴史科学研究会事務局長。



変化する学問としての歴史学

私が勉強する歴史学は、しばしば世間では「過去の事実を明らかにする」学問だと考えられています。必ずしも間違っているわけではありませんが、あくまでそれは歴史学の営みの一部です。歴史学の営みとは、史料を検証し、正しさという点で妥当性が高いと判断できた幾つもの事実をより合わせ、ある時代の社会の姿を描くこと、そしてそれを、現在を終着点とする、より大きな時代の流れに位置付けていくことです。このように歴史学は、変化を知るという学問の「目的」の点で、「変化」と大きな関わりがあることが分かります。ただし、本稿で強調したいのは、もう一つ「手段」という点においても、歴史学は「変化」と深い関わりがあることです。実を言えば、歴史学は、政治・社会情勢や他の分野の影響を受けやすく、対象を考える理論や方法・視点が、時代とともに大きく変わる学問なのです。特に1970年代から90年代にかけての変化は非常に大きく、その時代に現れた一連の歴史学の方法は「現代歴史学」とも呼ばれました。

現代の歴史学の見方が以前とどのように異なるか、私の研究するアメリカ史から一つの事例を挙げてみましょう。1960年の著作の冒頭で、著名なアメリカ史学者の今津晃は、アメリカ独立戦争に従軍した、ある軍士官が「アメリカ植民地の

自治を守るために戦争に参加した」と証言したことに触れています。しかし、今津はすぐさま彼の証言を否定します—「革命の原因はそれほど単純ではない」と。当時は、革命のような大きな変化を起こすのは経済や政治の働きであり、人々の思いや動機は歴史を考える上でさしたる価値を持たないという考えが歴史学者に広く共有されていたからでした。一方、1999年の著書で、アメリカの歴史学者A・ヤングは、アメリカ独立戦争勃発後、靴職人から軍に志願した元兵士が約半世紀後に語った回顧を重視しています。ヤングが目にしたのは、彼が軍艦に乗った際、そこにいないはずの地元の名士が「横にいた」という、事実としては間違っている、ささいな証言でした。ヤングは、この証言は、以前は名士の顔も見られなかった貧しい庶民が、革命に参加する中で、名士であっても人として対等な存在であると考えようになったことを示す証拠、すなわち人間社会に関する人々の認識が転換したことを示す重要な証拠だと考えたのです。

記憶の歴史学

このように1970年代以後の歴史学は、過去の社会の動きを考える上で、平凡な庶民も含めた人々の考えや行動も重視するようになりました。こうした経緯を経て、1990年代以後、社会学や文化人類学の影響も受けながら、新しく世界各地で盛んに研究されるようになった歴史学のテーマが、「記憶」です。ここでいう「記憶」とは、国民や地域社会、エスニックグループなどの集団が固有の体験として継承してきた過去の出来事を指します。日本において「太平洋戦争の記憶」が持つ存在の大きさを考えれば分かるように、集団的な過去の体験の記憶は、その集団の持つアイデンティティや倫理観において大きな役割を果たしています。「記憶」を扱う歴史学者は、このような前提の上に、アメリカ独立革命のような過去の事件や史実がどのように人々に記憶されてきたのか、また記憶は具体的にいかなる役割を果たしているのかという課題に取り組み始めました。

こうした研究の隆盛には、1990年代には、世界中においてさまざまな面で「記憶」が問われるようになったことが大きく寄与していました。ヨーロッパでは、EU統合、冷戦の終結、移民の流入などによって、それまで同じ記憶を共有することで支えられていた「国民」というアイデンティティが疑問視されるようになっていました。アジアでも、かつての戦争被害国の人々が日本などの加害国に戦争責任を求め、従来あまり疑問視されていなかった「戦争の記憶」の在り方が問わ

れました。アメリカでは、公民権運動やベトナム戦争を経た後、マジョリティである白人中心に描かれてきた歴史への異議申し立てがなされました。1990年代には黒人の歴史を記念した国立博物館の設立運動や、原爆投下を戦勝国以外の立場から描こうとするスミソニアン航空博物館の展示計画が幅広い論争を起こしていました。こうして世界的にも多くの人が自分たちを支える記憶が揺らいでいることを感じており、「記憶」を学問的に考える必要性を歴史学者に感じさせていたのです。

「記憶の歴史学」の大きな特徴は、従来の歴史学が研究対象としてきた文字に書かれた記録だけでなく、記念日や祝祭、さらに記念碑、史蹟、博物館など、集団の記憶に関わる文化——「記憶の場」と呼ばれます——を、新しく研究の対象として扱うようになったことでした。例えばフランス史では、フランス革命の記念日や記念碑の由来が研究されました。現在でもフランスでは、7月14日のパリ祭をはじめ、フランス革命の多くの事件の日付がフランスを作った輝かしい日として記念日に指定されています。これらは革命から約100年後の19世紀末、当時成立した政権が、穏当に革命を進めた事件を国民が共有する記憶として神聖視するために、周到に選んだものだということが明らかになりました（対照的にテロルなどの血なまぐさい事件は、例外として歴史の片隅に追いやられます）。このように「記憶の場」を対象とすることで、歴史学の幅は大きく広がることになりました。歴史家は対象を広げただけでなく、現在の世界と過去の結びつき、あるいは断絶について新しい理解を提示できるようになったのです。次に、その点を私がアメリカで行った調査から少し具体的にお話ししたいと思います。

アメリカのローカルな記憶の場

私は2012年夏から1年間、アメリカ合衆国のマサチューセッツ州ボストンに在外研究のために滞在しました。その際に驚いたのは記念碑、中でも戦争にまつわる記念碑の多さでした。大都市ボストンには、多くの場所にボストン市民が深く関わった独立戦争をはじめとする戦争の記念碑が建てられており、市の中心部にあるマサチューセッツ州の州庁舎には、展覧会と見間違ふほど、州の市民が参加した戦争の記念碑が溢れています。また私が住んでいたアーリントンという、人口4万人程度の平凡な郊外の自治体（タウン）ですら、戦争記念碑は私が確認しただけで21にも上ります。タウンの中心部には「モニュメント・スクエア」と呼

ばれる区画が作られ、そこに大きな南北戦争記念碑とアメリカの全戦争に参加したタウン市民の名をかたどった「全戦争記念碑」が置かれています。かつての陸軍大将で、国務長官を務めたコリン・パウエルは「なぜ戦争記念碑が重要か」（2004年）というエッセイで、毎年戦争の記念日に儀式に加わり、記念碑を見て「先に亡くなった者を敬う」ことが大切だと述べています。このように戦争記念碑の多さは、戦争と戦争で戦った兵士が「自由の国」アメリカを維持・発展させてきたという考えがアメリカ社会で広く共有されている表れだと考えられます。

とはいえ、実際にアーリントンの戦争記念碑の調査をしてみると、市民が実際に戦争の記憶をどのように受け止めたのかは、複雑なものがあることが分かります。アーリントンは1775年に独立戦争の最初の戦闘が行われた場所の一つで、現在でも、そのことがタウンの誇りの一つとされています。しかしながら、この記憶は60年以上たった1840年ごろまでは、ほとんど市民の誰も知らないものでした。1864年に戦闘の存在を知った地元の牧師A・スミスは、「榮譽」を市民に知らせようと著書を書きますが、その後も、なかなか記憶は定着しません。例えば、現在でもタウンの中心部に数カ所、戦闘の場所に関する石板の記念碑があります（図）。これらの記念碑は、1875年にアメリカ各地で催された独立戦争100周年記念行事の一環としてタウンが設置したものでした。その設置の理由は、戦闘がアーリントンで起こったことに関して「全コミュニティが無関心」であるため、市民に周知するためでした。1894年にマサチューセッツ州がマサチューセッツでの独立戦争開始日の4月19日を「愛国の日」と定めてから、アーリントンでも独立戦争を記念する行事が定期的に行われるようになり、市民の間に「戦争の記憶」が定着したことが伺えます。しかし、以後も、独立戦争の記憶の認知度は、大きく向上したとは言えませんでした。例えば、1962年のタウンの委員会調査では、1875年に12設置された上記の記念碑のうち7つが喪失しており、その一つには「地元のふとどきものによる落書き」も行われたといいます。

残念ながら、なぜアーリントンの市民に「戦争の記憶」の認知が定着しなかつ



図：1875年に設置された記念碑。戦闘の現場を示している。著者撮影。

たのかについては、今のところ直接分かる手掛かりはあまりありません。ただ、急速に都市化と産業化が進み、移民も含めた新しい住民が多く流入した都市域のアーリントンでは、戦争という過去の時点に生きた市民の行為を、つながりの薄い現在の市民が実感を持って受け取るのは難しいのではないかと想像されます。ともあれ、ついに1962年にタウンは、独立戦争に加わったとする記憶を広げる長年の努力を諦め、代わって、古い住居や産業史跡の保存に力を入れ、戦争ではなく「平和と発展」の町というイメージを新たな地域の記憶として選ぶようになりました。このように、現在の人々が共有する記憶は、長年に渡る記憶の発信者と受け手の交渉の積み重ねの上に、選択されたものだと考えられるのです。

記憶の歴史学の実践

現在、私は1年次生の授業「歴史学入門演習」において、受講生と戦争の記憶を考える試みを行っています。戦争の記憶というテーマは、誰にとっても身近であり、受講生が学習を通じて、今の自分と歴史との関わりを実感することができると考えられるからです。今年度の授業では、2017年9月から2018年8月まで『朝日新聞』に掲載された日本の近代の戦争に関わる展示会の記事を全て調べ、どのような傾向があるかを考えました。授業で行った討論からは、ほとんどの展示が戦争の記憶を若い世代に継承しようとする民間団体の試みであること、他方で、空襲以外の展示は少ないなど、記憶される戦争は限定されていることなどが分かりました。また北九州の戦争関連の遺跡や記念碑を見学し、「記憶」の持続と断絶を実感しました。もしかすると歴史学の変化において大きなことは、このように人々が歴史を「自分のもの」として、調べ、考える時代に入ったことなのかもしれません。



北九州市若松区の軍艦防波堤にて

ことば

平成と日本語

福岡大学人文学部日本語日本文学科教授 江口 正

執筆者紹介

江口 正（えぐち ただし）

1964年生まれ。福岡大学人文学部日本語日本文学科教授。専門は言語学、現在の研究テーマは九州諸方言の文法。人文学部の「日本語教員課程」を担当する。現在、日本語学会常任委員。



1. 「平成」の始まり

手元にある自分の大学院修士の学位記を見ると、日付が平成2年3月27日となっている。つまり私は平成元年度に修士課程を修了し、平成とともに研究生生活を始めたことになる。

この30年、日本語を研究してきた改めて振り返ると、「日本語をめぐる諸状況」の激変ぶりには驚くことばかりである。もちろん言語は時間とともに変化するものであり、日本語もこの30年で変化してきた。しかし日本語というシステムの変化より、日本語に関わる技術的・社会的な諸側面の変化のほうが断然大きい。ここではそういったレベルの「変化」に注目したい。

私の修士論文の研究テーマは日本語教育の初級の教科書にあるごく基本的な文法項目についてのもので、日本語学校で授業をしていたときの学習者からの質問が発端だった。論文を書き上げたのは当時かなり高価だったパーソナルコンピュータであり、メモ書きをアレンジしたり章をそっくり入れ替えたりする編集機能のおかげで短期間に書き上げることができた。小論のポイントはこの二つ、「日本語教育」と「日本語を操るテクノロジー」である。

2. 日本語教育と日本語

1983年に中曽根総理大臣（当時）が「留学生10万人計画」を打ち出した。21世紀の初頭までに留学生の受け入れを10万人にするというものである。また外国人の在留資格に「留学生」となる前段階の「就学生」が設けられ、ビザの取得手続きの簡素化・アルバイトの解禁などによって日本語学習者が日本に来やすくなった。それに対応して日本語学校の数も増え、日本語教師の需要も増した。日本語学校が福岡で増え始めたのがちょうど平成になるちょっと前くらいからだったように記憶する。日本国内での日本語教育が本格的になったのが平成の時代である。

日本語学習者は日本国内よりも海外に多い。特に学校教育の「(第二) 外国語」として日本語が置かれている国では多くなる。それは日本語学校での学習者数にも反映して、平成の始めから長いこと中国・韓国からの学習者が圧倒的に多かったのは、それらの国の中等教育で日本語が外国語科目だったからである。東アジアで日本語を学ぶ人が多い理由は、日本の経済力も大きかったが、何と言っても漢字文化圏であるため、漢語語彙がかなり共通していることにあった(漢字は「文字」として捉えるよりも語彙の骨格として捉えた方がよい)。これは教える側にとっても楽に教えられる要因で、漢字をゼロから教える必要のある非漢字圏と漢字圏とではどうしても進度に差が出てしまう。日本語学校で学べる2年間で上級レベルまで達するのは漢字圏の学習者に多い。

日本語研究の立場から言うと、平成の少し前、1980年代から現代日本語研究が盛んになった。それまで日本語の研究と言えば文献を扱う歴史的研究が主、それに方言の研究が加わるという図式で、現代日本語（共通語）の研究はそれに比べてマイナーな位置付けだった。しかし日本語教育を実際に行う人が増えると、あまりに現代語の基本的な仕組みが分かっておらず、初級レベルの教育でさえ学習者からの質問にうまく答えられないという問題に直面した。特に学習者の作文や発話を見ると「おかしい」ことはすぐに分かるのに、「なぜおかしいか」を説明することは困難なことも多かった。この「おかしいけれどもその理由が分からない」という状態は、研究する側から見ると非常に有益な情報である。それにきちんと理屈をつけられればそのまま研究につながるからである。この「外国人のちょっと変な日本語」が現代日本語についての理解を深め、研究を推進する重要なきっかけになったのである。

外国人の学習者が増えれば、外国人の研究者も増加してくる。そこで外国人研

究者にとって違和感が出てくるのは「国語学」「国文学」といった名称であった。なぜならこれらの名称の中の「国」は日本語の近代化の過程で「国家」を意識して使われるようになった用語であり、この「国」が指すのは「わが国」のこと、それが自動的に日本語を指せるのは日本国内だけだからである。この「国」は外国人研究者にとっては「外国」である。そういったことから「国語学」「国文学」といった名称を避け、「日本語」「日本文学」という名称を使うことが増えたのも平成になってからである。福岡大学人文学部の「日本語日本文学科」は創立30周年を越えたが、そういう意味ではこの学科名は新しいものであった。「国語学会」が「日本語学会」に学会名を改称したのは平成16年のことである。学校教育における「国語」という科目名は国民教育ということが前提になっているが、今後外国籍の子どもが増えてくると、配慮が必要になるか気になるところである。

留学生10万人計画はバブル経済の崩壊やアジア通貨危機の90年代にやや停滞したものの、入国管理局の政策の変化などにより2000年代に入ってから学生数が大きく増えて2003（平成15）年には10万人が達成された。そのうち2008（平成20）年には2020年までの達成を目指す「留学生30万人計画」が発表された。また2009年には在留資格の「留学」と「就学」を、「留学」に一本化した。各大学では学部1年生から入る正規の留学生だけでなく、数カ月から1年くらいの短期留学生を多く受け入れるようになった。さらに経済連携協定（EPA）による看護師・介護福祉士候補者（以下、EPA 候補者）の受け入れが2008年（インドネシア）・2009年（フィリピン）・2014年（ベトナム）から始まった。一方、領土問題などの影響でそれまで圧倒的に多かった中国・韓国からの学習者の割合が減り、その代わりに2012年ごろからベトナム・ネパール・スリランカなどからの学習者が増えてきた。平成の終わりになって「急に外国人が増えた」という印象を持った人が多いと思われるが、これは実数の伸びよりも一目で外国人と分かる学習者の割合が増えたということも要因の一つだろう。

学習者層が変わることによって日本語学校は対応を変えざるを得なくなっている。まず非漢字圏の学習者の割合が増えたため、漢字をゼロから時間をかけて教えていくが必要になる。これがEPA 候補者になるとさらに難しさが増す。なぜなら、看護や介護の専門家になるための資格試験には専門用語が漢字で出題されるからである。例えば「褥瘡」のような普段目にしないような漢字も読めなければならず、しかも現場で働くには「じょくそう」という読み方だけでなく「床

ずれ」のような一般的な名称も知っておかなければならない。こういったことは教える側の日本語教師も正確な知識を持っておく必要があり、負担が大きく増すものである。「わくわく」「うきうき」「いらいら」「はらはら」のような擬態語は日本語学習者にとってはニュアンスが分かりにくいものであるが、患者や利用者と直接コミュニケーションするためには、こういった言葉を正確に理解しなければならない。

日本国内での日本語学習者は、「留学生（旧就学生を含む）」、一定の日本語研修を受ける必要のある「技術研修生」、それに「日系人」も含まれる。こういった人たちは義務教育の年齢を過ぎた人であるが、日系人の家族をはじめ在留資格を持つ外国人の子どもが就学年齢に達すると日本の小・中学校に入ることができるため、小・中学校でも外国人への対応が必要になってきた。また前にも述べたEPA候補者も日本語学習が必要である。こういった多様な学習者像に合わせて日本語教師も仕事の幅が広がってきた。「日本語を教える」といっても、どこで教えるか、学習者が何を目的にそこにいるかによってその中身も大きく異なる。日本語教師は日本語学校でフルタイムで教える場合ももちろん多いが、割合から言うと非常勤講師の割合がかなり高い。また日系人、日本人の配偶者など日本語学校に行く時間のない学習者に対するボランティアも、重要な役割を果たしている。このように多様な学習者に対して多様な教師が対応しているのが日本語教育の現状である。本学人文学部には日本語教員課程が設置されており、こういったさまざまなニーズにも留意しつつ日本語教師の養成を行っている。

日本はさまざまな自然災害が起りやすい環境にあるが、平成の時代ではその災害に外国人も多く巻き込まれた。阪神淡路大震災のときに気付かれたのは、外国人はこういった災害のときに必要な情報を得られず、対処が遅れるということである。理想的にはそこにいる外国人の母語別に情報を得られればいいのだが、非常事態ではそれは難しい。非常時の言語問題がより大きく明確になったのは、東日本大震災だった。震災後、現地に赴いた医療スタッフが困惑したのは現地の方の東北方言が分からないということであった。特に体の痛みや様子を表す擬態語が共通語と大きく異なるため、症状が医療スタッフに伝わらないのである。これ以後、地震や自然災害が起きると日本語研究者が当地の身体名称や擬態語をすぐさま収集整理して情報提供するという態勢が作られつつあるが、こういった言語の問題は外国人も同様、あるいはそれ以上であるということが明らかになったので

ある。

外国人と一口に言ってもその母語はさまざまであるから、非常時にそれらに個別に対処するのは困難である。英語が通じる外国人は一般に思われているほど多くはない。そこで提案されたのは外国人にも分かる「やさしい日本語」で情報発信しようということである。例えば「避難する」を「逃げる」、「危険」を「危ない」に言い換えるだけでその理解度は大幅に上がり、各国語への対応なしに第一報を多くの外国人に発信できるということである。この取り組みは徐々に広がり、福岡市は行政としては早くに対応した。「福岡市 やさしい日本語の作り方」で検索するとそのウェブサイトとパンフレットのPDFファイルが容易に見つかるので、ぜひお読みいただき、その考え方を知っていただきたい。これは行政側からの情報発信だけでなく、個人レベルの情報発信でこそ威力が発揮されるものだからである。

ここで、まだ日本語を勉強し始めたばかりの外国人とのコミュニケーションのコツを一つだけお伝えしておきたい。若い外国人相手にはフランクに「どこ行くの?」といわゆるタメ口で尋ねたくなるかもしれないが、実は「どこへ行きますか?」と丁寧に「です・ます」を使って言う方が断然通じやすいのである。これは日本語の教科書の多くで「です・ます」の形から学習が始まるようになってからである。誰でもできる「やさしい日本語」の第一歩は丁寧な言い方である。(しかし「どちらへいらっしゃいますか」と敬語を使うととたんに分からなくなるのでご注意ください)

3. 日本語とテクノロジー

平成という時代と日本語との関わりでもう一つ大きな「変化」といってよいのは、日本語を扱う技術の向上、端的に言えばコンピューターによる処理の拡大である。ここではコンピューター利用者の観点から記すことにする。

まず昭和の終わりころからワードプロセッサ（ワープロ）専用機が普及し始



めた。これは個人レベルで活字のような文字を印刷できる道具として普及し、原稿のある文書の「清書用」として用いられた。初期は画面も数行しかない、保存しておける文書の文字数も少ない、カナ漢字変換の精度も低く入力に時間がかかる、とずいぶん不便なものだった。しかしこのおかげで我々は「自分の書いた文書を手軽にきれいに印刷できる」ようになったのである。

平成に入ってパーソナルコンピュータ（パソコン）の利用が増えると、ワープロソフトやエディターを用いて文書を「編集」できるようになった。広い画面上で文字入力し、それを切り貼りしたり、文章の構成を入れ替えたりできるようになった。「清書」の前段階の入力と編集が容易になったのである。少しずつカナ漢字変換の精度も上がり、思うように字が入力できるようになってくると、文字入力をパソコンに依存し始めるようになる。仕事でパソコンを常用する人たちはカナ漢字変換や切り貼りの編集能力に頼ってしまっただけで次第に紙の上での文章の作成が難しくなってしまう。

またコンピュータの性能が上がってきて扱える文字の数も増え、一つのファイルに入る文字数もどんどん増えていった。ファイルの記録は最初期のカセットテープに始まり、フロッピーディスク、光磁気ディスク、ハードディスク、CD、DVD、USBメモリ、Blu-rayなどの電子記録媒体が次々に登場して容量がぐんぐん増えていった。

メディアの容量の変化に従って利用者の発想も変わってくる。初期は「入力」することに重点があったが、容量が増えれば「蓄積」も可能になる。また蓄積されたファイルの中から特定の「文字」を取り出すこと、「検索」も容易になる。

この「コンピュータによる文書の蓄積・検索」は言語研究に画期的な変化をもたらした。言語研究（特に古典語を対象としたもの）の基本は特定の表現の意味・用法を明らかにする作業であり、その表現の前後の文脈を詳細に観察し、可能なら資料内に見られる全ての例をチェックして比べる必要がある。従来は紙（書籍）の資料を1ページずつめくって手で該当表現を探し、それをノートに書き抜いて記録するという原始的な方法しかなかった。崩し字で書かれた和本の調査ではさらに文字の解読作業がこれに加わる。これは用例を抜き出すだけで非常に時間がかかる作業だったが、それをきちんと漏れなくできることが文献研究の基礎スキルだった。もしその資料が電子化されており、検索可能な状態になっているのなら、その作業は非常に楽になり、例を抜き出した後の「考察」に時間をたっ

ぷり使えるようになるはずである。そういった理由から、日本語研究者は自らに関わる言語資料をコツコツと個人の力の及ぶ範囲で電子化するようになった。

この電子化されたデータは、記録媒体のやりとりによって少しずつ流通するようになった。ここで重要な役割を果たしたのが「メール」と「パソコン通信」である。1980年代終わり、平成の始めごろから一般化したこういった仕組みによって、記録媒体を直接やりとりしなくても蓄積されたデータが流通できるようになった。

1990年代中盤以降にインターネットが登場し、情報の在り方も大きく変わった。インターネットは情報の共有を容易にし、また個人からの情報発信も可能にしていた。パソコン通信の時代はその掲示板に登録した人だけが読む、いわば「閉じた同人スペース」だったのが、インターネットに書き込めば世界中の人が容易にそれを見ることができるようになる。簡単に言えば、「出版」することなしに自らの文章が公になるようになったわけである。これは表現する側、受容する側、双方の情報の扱いを大きく変えるものだった。

携帯電話やPHSなどの個人端末による文字コミュニケーションが一般化したのも90年代中盤以降である。最初は「ポケットベル（ポケベル）」によるかなり限られた情報だったが、のちに携帯電話でメールのやりとりが可能になった。これは個人間の文字コミュニケーションの新しい形を創造した。手書きの手紙は時間をかけて書き、出してから受け取るまでに時間差があり、受け取ったらじっくり何度も読み返すものだった。しかし携帯電話を使うと手軽にさっと書け、リアルタイムに届き、すぐに返事が書ける。つまり文字コミュニケーションがリアルタイムに行えるようになったのである。

パソコン通信による「掲示板」はネット空間におけるコミュニケーションとして新たな文字コミュニケーションの場を提供したが、目の前にパソコンがなければならず、いつでも読み書きできる状態ではなかったため、まだリアルタイムコミュニケーションとは言い難かった。しかし携帯電話なら常に持ち歩き、ほぼリアルタイムにやり取りできる。こういったこともあって、個人間の文字コミュニケーションが大きく変貌したのは携帯電話によるところが大きい。

携帯端末が携帯電話からスマートフォンに代わるとSNS（ソーシャルネットワークワーキングサービス）の利用が増大した。自由な書き込みを許す「掲示板サービス」がその始まりといえるが、それからTwitter、Facebook、LINE、Instagram

などさまざまなものが生まれ、それぞれの方式にあったコミュニケーションの在り方が模索されている。どれもリアルタイム性に優れており、そこで行われるコミュニケーションは話し言葉とも書き言葉とも違う「打ち言葉」という新しいジャンルの言語使用になってきた。「反応」を急ぐ関係上、非常に短い言葉になったり（「りよ」＝了解 など）相槌の言葉を連発する（「それな」「あーね」）、情報量よりも感情伝達に力点を置くため絵文字やスタンプを多用するなど、独特のコミュニケーション形態になる。これらは「日本語の乱れ」と捉えられることもあるようだが、文字によるリアルタイムコミュニケーションという新しいニーズに合わせた新たな文体の創造ということもできる。文字入力もフリックによる方式が一般化し、パソコンのキーボード入力以上に文字入力を機械に依存するようになった。

日本語研究者としては、こういった新たなコミュニケーションは何としても研究対象に入れたいところだが、実はそのコミュニケーション形態だからこそ難しいところがある。Twitterを除き、SNSの多くは個人間のコミュニケーションであり、他人が覗くことのできない個人情報が多いということである。また、公開された情報も、数日で消されたりして「安定」しない。客観的な研究対象とするには「公開され」「確実に安定した状態」でなければならないが、インターネット上の情報は常に消えたり改変されたりする可能性にさらされているのである。その意味ではTwitterは比較的情報が消えにくく、最初から公開するつもりで投稿であるため言語研究のレベルでは個人情報の問題は起きにくいものと思われる（しかしいつまでこのサービス形態が続くかははっきりしない）。

また、マスコミやインターネット上の情報による“情報の干渉”にも注意しなければならない。目につく多くの「流行語」は自然発生的なものだけでなく、マスコミが意図的に流行らせたものもある。SNS上で本当に自然発生的に生じた表現か、それともマスコミが「流行っている」と言うことによって流行り始めたものなのかは意外に難しい問題である。リアル（現実的）な言語使用と、バーチャル（仮想的）な言語使用は、特にインターネット上では干渉や相互作用が起きやすいものだと考える必要がある。テレビ・ラジオといった媒体の影響力は以前ほどなくなったが、それに代わってインターネット上のニュースサイトや「まとめ」サイトなどが影響力を持ちつつある。情報の「出どころ」の怪しさにとどまらず、その口調や表現法の影響力も無視できないものがある。

言語研究者としては、上記のようなバーチャルな言説にとらわれず、できる限りリアルな言語を研究したい。また、これまで蓄積してきた言語資源をうまく共有して資料をさまざまな形から検討したい。現在はそういうニーズにインターネットを利用した各種サービスが答えてくれるようになってきている。以前は自分の手元に大量の資料を置き、その中から検索するという発想で電子的資料調査が行われてきたが、今は公開されたインターネットのサーバー上にある巨大なデータを外部から検索し、その結果が簡単に入手できるようになってきたのである。こういった「構造化され検索しやすくアレンジされた言語資料」を「コーパス」という。現代日本語の書き言葉に関しては、非常に簡単に検索できるツールが公開されている。「現代日本語書き言葉均衡コーパス」のデータを検索できる「少納言」というツールである。「均衡」というのは書籍・雑誌・白書・ブログ・ネット掲示板などさまざまなジャンルにまたがってデータを収集したということである。「少納言 コーパス」で検索するとスマートフォンからでも使える。

このコーパスを実際に使ってみよう。「少納言」のサイトに入り、一番下の「利用条件を読んで少納言を使う」をクリックする。「OK」を押したら検索可能になる。ここでは検索条件のところに「直近」という語を入れてみよう。結果が198例出るはずである。当該語の直前・直後の文脈をはじめとして執筆者・その生年代・性別・文章のジャンル・タイトルなどの出典情報が個々の例に付随して表示される。これをこのまま見てもよく分からないが、一番右の「出版年」のところを2回クリックして古い順に並べ替えてみよう。すると1995年くらいまでのデータは全て国会会議録や白書類の用例であることが分かる。この語はいわゆる「お役所言葉」で、それが一般化してきたものなのである。このコーパスではこのような語の来歴や使用の幅、使用者の偏りなどが(あ

このサイトでは大学利用判権持人人文文化研究所国語学研究所と京都府立総合研究機構国語学研究所「日本語コーパス」プロジェクトの共同で開発した「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCWJ) Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese) のデータを検索できます。BCWJには、現代の日本語の書き言葉の全体的傾向を把握できるように集められたジャンルが豊富に収録されています。

このサイトでは検索可能な文字列検索(全文検索)だけでなく、形態情報を利用した検索(句構)も提供しています。詳しくは以下のURLをご覧ください。なお、本検索サイトには検索履歴がありません。

<http://shonagon.nijl.ac.jp/>

コーパスの構成にあたっては、金ザンズンについて要件整理を実施しており、その結果、権利の方から利用を拒否されたサンプルは当該検索から除外してあります。

利用条件

本サイトで検索されている以下の「利用条件を読んで少納言を使う」ボタンをクリックして、利用条件に同意したうえで、検索条件指定画面に移動します。

本サイトに検索したい文字列を「検索条件」に入力してください。本コーパスではアルファベット、数字、記号も含めてすべての文字が全角で入力されていますので、半角文字は使わないでください。

検索文字列検索画面ではテキストの「メタデータ(ジャンル)」と「種別」を指定することができます。このほか、ジャンルを指定する場合は、そのジャンルに属する文字列のみを検索することができます。また、検索結果が1000件を超えた場合は、検索結果が1000件の範囲に絞って表示されます。

検索結果は検索結果画面に表示されます。左から順に「検索条件」「種別」「検索文字列」「種別」「種別」「種別」「種別」「種別」「種別」が表示されます。

検索結果画面では検索結果の絞り込みを行うことができます。絞り込みは検索結果画面の上部にある「絞り込み」ボタンをクリックして表示されます。

れば)分かるようにデータを構造化している。またデータの著作権も処理済みで、自由に利用できるものになっている。検索結果をダウンロードする仕組みはないが、表の部分を選択してコピーすればエクセルにペーストできる。

コーパスは前に触れた「公開され」「確実に安定した状態」であるため、安心して研究に用いることができる。日本語教師はもちろん、言葉の使い方(使われ方)に興味がある人にとっては膨大なデータをもとにした「言語事実」が手元のスマートフォンからも確認できる時代になったのである。例えば副詞「なまじ」を検索すれば、後の文脈に「～から」「おかげで」「かえって」などといった表現が出やすいということが一目で分かるが、一人で頭で考えてもなかなか思いつけないものである。

このコーパスを公開している国立国語研究所はこのようなデータ共有を積極的に推進している。例えば全国の方言調査の結果を地図にした「日本言語地図」や「方言文法全国地図」もPDFファイルで公開しているし、文を与えてそれを単語に切る(形態素解析という)プログラム「Web茶まめ」も使える(これは中古和文や中世文語などの時代別の辞書が選べるので古文を入力してみると面白い)。登録制(無料)の「中納言」を利用すれば、古典籍のデータの入った「日本語歴史コーパス」や「日本語話し言葉コーパス」、「名大会話コーパス」などの会話を文字化したコーパスも利用できるようになっている。特に会話は個人情報の問題になることがあるため、このような公開されたコーパスがあるとリアルな会話についてその実態を知ることができる。

別の用途で電子化されたものが言語資料としても有用なことがある。その代表が議会関係の議事録である。先のコーパスの説明にも国会会議録の例が挙がっていたが、各自治体でその議会の議事録を電子化して公開するところが増えている。こういった議会での話し言葉は特殊な場での話し言葉であるが、意外に方言の使用も見られる。例えば「福岡市議会会議録 かんたん検索」と検索して「福岡市議会会議録」の頁を出し、そこから「かんたん検索」に「んしゃ」と入れると、博多方言の敬語「しんしゃあ」に関連する形式の議会での使用を見ることができる。

情報の公開という点では「日本語の乱れ」の議論の資料としてよく引き合いに出される「国語に関する世論調査」もインターネットに公開されている資料であり、「国語に関する世論調査」で検索すればすぐに情報にたどり着ける。興味深

いのは、これらの資料そのものにはどこにも「日本語の乱れ」といった価値付けはなく、淡々と結果を述べているだけということである。毎年、この調査結果が発表されると各新聞が論評するが、どの項目をどう取り上げるかということは各新聞の新聞社としてのスタンスが表れていて興味深い。この調査結果もマスコミによる情報の干渉に一役買っており、調査で「本来とされる意味」(「本来の意味」と記していない点にも注意)以外の選択が多かった項目がその後のテレビのクイズ番組の定番問題となる。

言語に関わるテクノロジーとしては、録音・録画が容易になり、電子媒体で保存しやすくなったことも挙げておきたい。言語研究は「リアル」を求めるものであるが、過去の言語に関してはどうしても文字データに頼らざるを得ず、リアルな話し言葉はデータになりにくかった。録音技術も初期のレコードやテープでは蓄積に場所が取られていたが、現在は電子データを用いるようになり、高音質なデータも相当程度の量を蓄えられるようになった。昭和の時代には数秒しか分析できないのに数百万円もしていた音声分析の機械も、現在はパソコンのフリーソフトとして簡単に入手でき、研究に利用できるようになっている(「Praat」というプログラムがそれである)。

話し言葉の記録は次第に話されなくなってきている方言や消滅危機言語の記録のためには欠かすことのできない資料である。昭和の時代にも気付かれていた「消滅危機言語・方言の保存」という問題は、平成になってより深刻になった。ユネスコ(国連教育科学文化機関)が平成21年2月に発表した“Atlas of the World's Languages in Danger”には日本国内のアイヌ語・八重山語・与那国語・八丈語・奄美語・国頭語・沖縄語・宮古語が危機言語として挙げられている。本学人文学部日本語日本文学科の衣畑准教授は宮古語の専門家として言語の記述と分析を進めている。平成の次の時代こそ、こういった危機言語の保存がどれだけできるか、



問われる時代になることだろう。

4. 平成の終わりに

平成30年12月8日に「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」が成立し、同月14日に公布された。これは在留資格「特定技能1号」「特定技能2号」を創設し、法務省の内局であった入国管理局を格上げして「出入国管理庁」にするというものである。これまで大学教授やエンジニア、経営者など高度に専門的な職業にのみ、就労目的の外国人を受け入れてきた日本としては政策の大転換である。平成の終わり、新たな元号が始まる前に十分な審議もせずこのような重要なことが決まってしまった。これにはさまざまな問題点が指摘されているが、外国人を受け入れる日本語教育は直接的に対応に関わる側であるだけに考えなければならないことも多い。現在、福岡市周辺では日本語教師が不足しており、増え続ける日本語学校は教師不足にあえいでいる。教師側としては非常に多くの授業を担当せざるを得ず、かなり無理をしているという実態があるのに、さらにこういった新しい在留資格に対応できる日本語教師はどこにいるのだろうか。本学卒業生の日本語教師からはあまりの仕事の多さ、給料の割の合わなさに日本語学校をやめたという話も聞こえてきている。その一方で、文化庁は日本語教育人材の養成・研修についてより実践的な教育を行うよう指導を強めており、日本語教師養成のハードルが高くなってきている。そうなる懸念されるのは日本語教師の人数不足によって新しい在留資格者に対する日本語教育が十分に行えなくなるということである。もちろん人材が不足しているからと言って「日本語教師」を「特定技能」に指定するわけにはいかない。大きな懸念を感じながら「平成」を見送るしかないのは非常に残念なことである。

法律

身近になった「著作権」問題

福岡大学法学部准教授 谷川 和幸

執筆者紹介

谷川 和幸 (たにかわ かずゆき)

1984年生まれ。福岡大学法学部准教授。専門は知的財産法。特に情報化社会における著作権制度の在り方について研究している。



かつての著作権法の位置付け

平成の30年間に於いて最も急速に変化したのが情報通信技術（ICT）であることは、皆さんも日々よく実感しておられるところでしょう。平成初期に流行した「ポケベル」には、画面に数桁の数字を表示する機能しかありませんでした。それが現在、スマートフォン（スマホ）では大容量の動画や音楽、漫画といった多様なコンテンツを楽しむことが可能となっています。

情報通信技術、とりわけインターネットが私たちにとって身近になったことで、位置付けが大きく変化した法律があります。それが「著作権法」です。著作権法の内容をごく単純に説明するならば、「コンテンツを流通させる場合には、作者の許可を得なければならない」というものです。流通の方法にはさまざまなものがあります。印刷して本として流通させる、テレビやラジオの電波に乗せて放送する、映画館で上映する、演奏会で演奏するといったさまざまな流通行為が対象になります。作者は許可を出す対価として利用料の支払いを求めることができ、これが収入源となります。

インターネットが普及する以前、これらの流通を担っていたのは主にマスコミと呼ばれる企業でした。出版社、新聞社、テレビ局、レコード会社、それに映画

館、楽団といったプロフェッショナルです。従って著作権法を意識して活動しなければならぬのは、専らこれらプロの人々に限られていました。また、コンテンツを製作することで著作権を保有する立場に立つ人も、小説家や漫画家、写真家、建築家、作詞家、作曲家、映画会社といった、創作活動で生計を立てているプロの人々がやはりその中心でした。つまり著作権法というのは、プロが作ったコンテンツをプロが流通させる、そのような業界のルールという位置付けで理解されていました。

現在の著作権法の位置付け

ところが現在、インターネットが普及したことで、一般の人でも手軽に情報発信ができる世の中になりました。自ら生み出したオリジナルなコンテンツを世間に発表することが簡単にできるようになり、ブログで面白い記事を書く人やpixivにイラストを投稿する人、初音ミクなどのVocaloidを用いて自作の曲を発表する人、YouTuberといったように、さまざまな技術を用いて多様なコンテンツを製作・発表する人がたくさん現れました。このようなコンテンツも著作権法で保護されますので、必ずしも創作で生計を立てているわけではない一般の人でも著作権を保有し、行使をすることが可能となりました。

他方、情報発信というのは、情報の流通にはかなりません。皆さんが漫画の一コマを写真に撮ってSNSにアップするとき、それはコンテンツの無断流通にはならないのです。好きな曲の歌詞をブログに書いて投稿するのも同じくコンテンツの無断流通です。つまり、一般の人がコンテンツを流通させる力を得たことで、かえって、著作権法の規律の対象となってしまったのです。

この30年の間に著作権法に生じた最大の変化、それは「プロの法律」から「一般人の法律」への大転換です。「業界法からお茶の間法への変化」と呼ぶ人もいます¹。いまや、著作権を保有する側としても、また侵害行為を犯してしまう側としても、一般の人々が著作権法と無縁ではいられなくなってしまったのです。

そんな一般の人が著作権紛争に巻き込まれることとなった裁判の例を2つ紹介しましょう。

¹ 野口祐子『デジタル時代の著作権』（ちくま新書、2010年）80頁。

ホテル情報サイト事件（平成14年）²

まず最初は、一般の人が原告（裁判を起こす側）になって、大手出版社を訴えた事件です。SNSが登場する前、多くのウェブサイトには電子掲示板（BBS）が設けられており、サイトにアクセスした人はそこに感想や意見を書き込んで交流していました。今回問題となったのは、世界のホテル情報や観光情報を書き込む電子掲示板です。原告はそこにホテルの口コミ情報を書き込みました。その後、この掲示板の多くの書き込みをまとめた本が大手出版社から出版され、そこには原告の投稿した文章も許可なく転載されていました。

原告は、この無断転載は著作権の侵害であると主張して裁判を起こしました。被告出版社は、原告の文章はホテルに関する平凡な感想文にすぎず、このような書き込みには著作権は発生しないと反論しましたが、裁判所は、電子掲示板の書き込みであっても創作的な文章であれば著作権が発生すると判断し、出版の禁止と、約10万円の賠償金の支払いを命じました。一般の人が何気なく書いた文章にも著作権が認められたわけです。

なお現在は、大手電子掲示板サイトやSNSではこのような紛争を未然に防ぐために、投稿された文章は運営者が自由に使ってもよいという内容の「利用規約」を作成し、あらかじめ投稿者に同意させる方法が採用されています。このような同意を取った上での出版であれば無断転載ではないので著作権の侵害とならないという理屈です。私たちが各種サービスを利用する際には、しっかりと利用規約を読んで、どのような利用をあらかじめ同意していることになるのか確認してから利用することが重要です。

写真無断使用事件（平成27年）³

今度は逆に、一般の人がブログやウェブサイト、SNS等で情報発信をする際に、他人の写真等を無断で使用してしまって訴えられるという、ありがちなトラブルの事件です。このようなトラブルは頻繁に起こっていると思われそうですが、実際に裁判にまで発展するケースはそれほど多くはありません（弁護士に相談して費用のかかる裁判をするよりも、請求されたままに支払った方が安くつくと考える人が多いでしょう）。ここで紹介するのは裁判になった珍しい例で、無断

² 東京高等裁判所平成14年10月29日判決。

³ 東京地方裁判所平成27年4月15日判決。

使用だとして訴えられたのは弁護士事務所のウェブサイトです。

ある弁護士事務所の従業員が事務所紹介のウェブサイトを作成したのですが、その際に、インターネット上で入手した写真6点を無断で使用してしまいました。被告は裁判において、これらの写真はどこかのウェブサイトで「フリー素材」（使用しても著作権の侵害とならない写真）だとして紹介されていたものであり、作者の許可を得ずに自由に使える素材だと誤信したのだと弁解しましたが、裁判所は、権利関係が不明な写真の利用は控えるべきであって、誤信したことは責任を免れる理由にはならないとして、合計約30万円の賠償金の支払いを命じました。「フリー素材」だと誤信したことが弁解とならないということは、これ以前の判例でも示されており⁴、インターネット上の写真を使用するにはそれが本当に「フリー素材」なのかどうか、権利関係をよく調査して使うように注意する必要があります。

非営利でも許されない

ところでこの事件では被告が弁護士事務所という一種の事業者であり、弁護士事務所への集客という営利目的のあるウェブサイトでの無断使用が問題となったわけですが、実はこのことはそれほど重要なポイントではありません。というのは、この種のインターネット上での無断使用に関して、著作権法は、事業者であるか一般人であるかや、営利目的があるかどうかによって、特に異なる扱いをしていないからです。もし仮に、「一般人が非営利で投稿する場合にはインターネット上での無断利用は著作権侵害とならない」というような法律にしまうと、いろいろな人が好きな音楽や映画、漫画などの内容をそのまま非営利のブログで公開してしまい、インターネットが海賊版天国になってしまうでしょう。それを防ぐために、著作権法は、たとえ一般人が非営利で情報発信する場合であっても、



著作権について講義する筆者

ブログやウェブサイト、SNS等への掲載に際してはやはり作者の許可が必要であるというルールになっているのです。

もっとも、一般人の場合は、事業者とは異なり、匿名や仮名で情報発信をすることが多いため、著作権侵害の被害を受けた作者にとっては、どこの誰を相手に交渉や裁判をすればいいのかわからないという問題があります。そこで平成13年に通称「プロバイダ責任制限法」という法律が制定され、利用者の連絡先情報を保有しているSNS等のサービス運営者や、インターネット回線を提供するプロバイダ等に対して利用者の情報を開示するように請求できる制度が導入されました。海賊版サイト「漫画村」のように海外のサービスを利用するなどして巧妙に身元を隠されてしまうとなかなかうまく開示が進まないという欠陥はあるものの、一般人が普段利用しているSNSやブログサービス等に関してはこの制度を用いて情報開示が可能ですので、匿名なら何を書いても問題ないなどと勘違いして過激な書き込みや著作権侵害の投稿をしてしまわないように注意が必要です。

著作権制度の今後

「プロの法律」から「一般人の法律」へと大きく性格を変えた著作権法ですが、そのルールの多くは従来プロの世界を前提にしたものであり、今の時代に適合していないという批判に晒されています。特に問題があるのが、「コンテンツを流通させる場合には、作者の許可を得なければならない」というルールのうち、作者の許可、それも事前の許可が必要であるという部分です。確かに従来のプロの業界では、作者が誰か、どこに連絡すればいいかは比較的容易に判明したことでしょう。しかし電子掲示板の書き込みのように、一般人が日々無数にコンテンツを生み出し続けている現代において、各コンテンツの作者の連絡先を調べることは非常に困難です。また作者の側としても、創作で生計を立てているわけではないので、使用料の支払いなどなくても自由に使ってほしいと欲することも多いかもしれません。ですが著作権法は、使う前に作者を探して許可を取るように、という古いルールを維持しており、これを今後どのように緩和していくかが重要な課題となっています。

それ以外にも、AIが創作したコンテンツの保護をどうするか、VR空間における利用をどの範囲で著作権の対象とするか、二次創作をどう考えるかなど、課題は山積しています。おそらく平成の次の時代にも、技術・社会の変化に伴って

⁴ 東京地方裁判所平成24年12月21日判決。

新たな課題が次々と生じることでしょう。情報流通を権利の対象とする著作権制度にとって、それは避けられない宿命のようなものかもしれません。

【おすすめの入門書】

- ・ 福井健策『著作権とは何か』（集英社新書、2005年）
- ・ 福井健策『著作権の世紀』（集英社新書、2010年）
- ・ 池村聡『はじめての著作権法』（日経文庫、2018年）
- ・ 木村剛大ほか『クリエイターのための権利の本』（ポーンデジタル、2018年）

経営

趣味嗜好の多様化という変化と ビジネスの関係を考える

福岡大学商学部准教授 篠原 巨司馬

執筆者紹介

篠原 巨司馬（しのはら こすま）

1981年生まれ。福岡大学商学部准教授。商学部クリエイティブマネジメントプログラム運営委員会委員。専門は管理会計、マネジメント・コントロール。主に日本企業の事例研究を行っている。



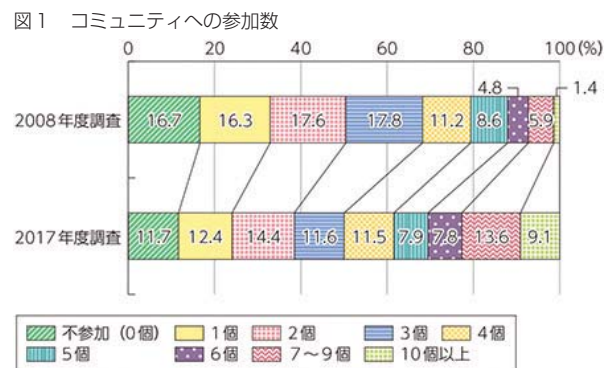
変化が激しい時代には、今までのやり方はすぐ通用しなくなるとわれがちである。例えば、計画は変化への対応の足かせになっているというような議論が、実務的にも学術的にも取り上げられることがある。戦略研究の大家であるミンツバーグ氏は、『戦略計画 創造的破壊の時代』という書籍の中で、戦略を緻密に計画的に策定して実行していくことの副作用について1994年にすでに議論している。また会計の分野においてもヨーロッパの実務家であるホープ氏とフレイザー氏は、『脱予算経営』という書籍の中で予算による計画的な経営の負の側面に対する批判を展開していた。しかしながら、計画もなく行き当たりばったりで万事がうまくいくのは相当な幸運に恵まれない限り難しいことは想像に難くない¹。実際に、神戸大学の研究チームが日本企業を対象に行った調査によると、幾つかの前提条件のもとに立てられた経営計画が企業業績に良い影響を与えていることが示されている²。問題なのは計画そのものではなく、どのように計画を立て、

¹ なお、ミンツバーグ氏も戦略計画自体をやめるべきだとは述べていないし、ホープ氏とフレイザー氏も予算そのものを完全にやめてしまった後の、予算そのものの代替案を伝えているわけではない。

どのように用いるかという運用の問題ではないかという推測ができる。つまり、変化に対応するには既存の知見をどう生かしていくかという応用力が重要なのである。そこで本稿では、現代に起こる変化の一つとして趣味嗜好の多様化に注目し、今までの知見を組織や個人がどう生かしていけるかという点を議論したい。

ますます進む趣味嗜好とコミュニティの多様化

近年、Facebook、Twitter、Instagram といったソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下、SNS）の浸透によって趣味嗜好が多様化し、それに応じたコミュニティができていと言われている³。実際、総務省の平成30年度版情報通信白書によると、日本国民の60%程度以上がSNSを利用しているという。この調査によると利用者のうちのほとんどは他人の発言や書き込みの閲覧のために使っていることから、自身の趣味嗜好に合う情報に触れやすいという状況が想定される。さらに、図1は日本の20代から70代までを対象にオンラインおよびオフラインのコミュニティへの参加数を調査した結果であるが、2008年度から2017年度にかけてコミュニティへの参加数は増加傾向にあることが分かる。2017年度には3個以上のコミュニティに参加する人が全体の60%を超えるまでになっている。さらに特筆すべきは、7個以上のコミュニティに参加する人が20%超もいるということ



出所：平成30年度版情報通信白書 p. 174

² 参考文献リストの福岡嶋「経営計画が企業業績に与える影響」という論文に詳細が載っているので興味のある方は参照されたい。

³ 落合陽一氏の『魔法の世紀』の第3章にもこの話題が出てくるので参考にさせていただきたい。

である。これは人々が趣味嗜好ごとに集まりコミュニティを作っており、個人は一つの趣味嗜好ではなく多様なコミュニティに入っていることを示唆している。

趣味嗜好の多様化によるビジネスへの影響

このような変化はビジネス上どのような影響があるだろうか。結論から言えば、製品を大量に効率的に製造し販売するというモデルが、ますます成り立ちにくくなっていると考えられる。多様化した趣味嗜好に合わせて商品を用意するとなると、単一商品を大量に製造流通するよりも費用が多額になる。例えば製造業であれば、製造ラインに複数製品を流す必要があり、そのために材料在庫を複数種類準備したり、段取りなどの製造準備時間が増える。さらには製品ごとの管理コスト（受発注管理、在庫管理、原価管理など事務手続きなど）も増える。サービス業であっても、画一的なサービスを準備するよりも、それぞれのニーズに合わせてカスタマイズできるようにサービスが設計されていれば、その顧客に合わせた企画、受発注管理、サービスそのものの提供が必要となる。つまり、大量生産による機械やITによる製造活動の効率化の恩恵が受けにくくなり、人の労働時間など容易に削減できない費用の割合が増えていくということである。そうした状況では個々の従業員の行動の影響が非常に大きくなり、彼ら彼女らの働き方いかんによって企業の状況が大きく左右される。そのため昨今では、個人に焦点を当てる「組織開発」という分野が再び注目されている⁴。また、市場分析的な側面からいえば、趣味嗜好の年齢や性別といった分かりやすい消費者の属性が見えにくくなっていることも考えられる。このように、「価値の源泉としての人」が集まった組織である強みをいかに発揮していくかというのが論点になっている。例えば、組織は諸個人の能力向上を助けることや、多様化したニーズを掘り出す情報をいかに集められるかが重要となっている。

（事例）中期計画の策定と共有による個人の時間配分への影響の与え方

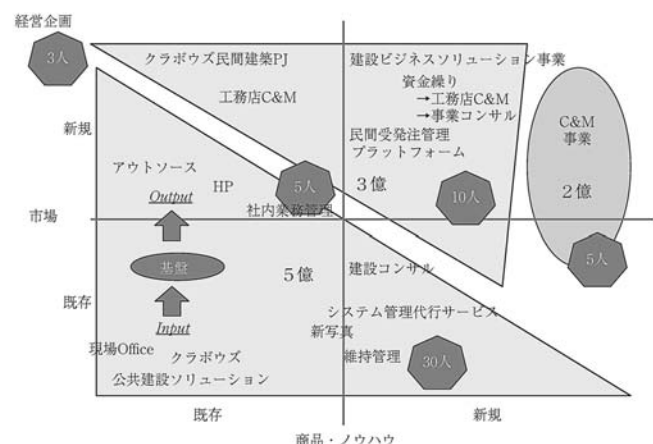
ここでは前述した諸個人の能力向上を助けるという視点から、組織メンバーの変化を促す挑戦をしている事例を紹介したい。具体的には、人件費が費用の多くを占めるITサービス企業において、このような状況に対応するために中期経営

⁴ 立教大学教授中原氏と南山大学教授中村氏による『組織開発の探求 理論に学び、実践に活かす』をご参照いただきたい。

計画の策定と共有を通じて影響を与えようとしている事例を観察したので、ここで紹介する。

調査先企業（仮にGS社とする）は人件費率が高いビジネスモデルであるため、個々人がいかに効率的に職務を遂行し、また将来の変化に向けて能力を獲得していくかという点が重要であった。そのために中期経営計画を立案することで対応しようとしていた。この経営計画では、組織メンバーへの利益分配率と給与額の目標をベースにした5年後の全社目標利益と、そのために必要な新規事業を開拓するという方向性、新規事業を生み出すための時間を確保するための生産性の向上が骨子となっていた。詳細は論文⁵を参照していただきたいが、ここでのポイントは以下で説明するように、組織メンバーへどのように伝え共に考えるかという工夫を多く行っていたことである。計画の立案によってコミュニケーションを生み、従業員に新しい視点を獲得させ、成長を促すというインタラクティブな利用方法が目指されていた。これは目標と実績の差異を診断するために用いるという伝統的な視点の計画設定ではなく、計画をコミュニケーションの材料にして組織メンバーに影響を与えるという新しい視点である。具体的な例として、図2の

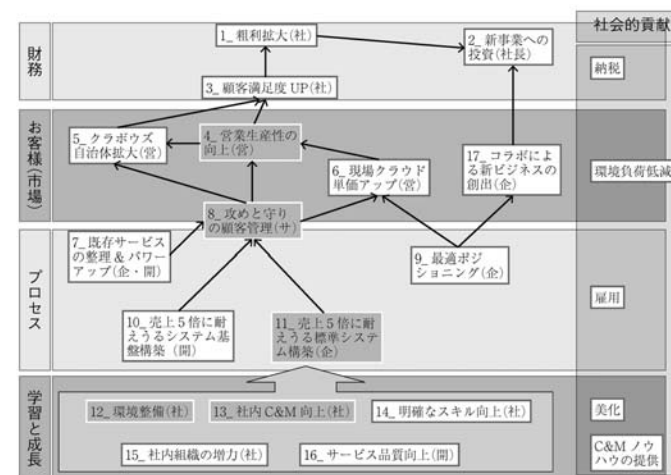
図2 GS社の5年後の目標事業ポートフォリオ



出所：GS社 Drem Meeting 資料より
注：図中の「クラブハウス…」や「C&M」等は製品・サービス名

⁵ 参考文献リストの篠原・足立（2017）を参照。

図3 GS社の戦略マップ



出所：GS社第10期経営計画書より

ような5年後の事業構成を示すポートフォリオと、図3のような目標利益と日々の活動がどういう理屈でつながっているかを示す戦略マップを紹介する。

図2は、将来の事業と現在の事業とを比較してその顧客は既存であるか新規であるか、そしてノウハウは既存の応用であるか全く新しい知見が必要であるかによってマッピングしたものである。図3は直近の財務的な目標と顧客獲得の施策の関係、それに必要な社内の手続き、さらにそれを可能にするために必要な学習と成長を示している。重要なポイントは3つある。1つ目は、不明確な将来の企業の在り方をあえて具体的に示しているという点である。2つ目は、目標利益の根拠として組織メンバーの収入増があるということである。そして3つ目は、これらを組織メンバーが参加する形で策定していたという点である。将来の展望をコミュニケーションを通じて個々人が明確化していくことで、自分たちがどういふ活動をしていけばいいのかを考える材料になる。それが行動を変えていくための基礎となる。さらにその変化がどのように自分に返ってくるのかが、少なくとも金銭的な意味で理解できる。他にも同時に、社内SNSによって将来の事業の種となる情報を集めるような日常的なコミュニケーションも行っている。これによって目の前の仕事を効率化し、新しい知見を獲得するための時間を獲得するこ

とを促進することが可能になると考えられる。以上が、GS社による既存の知見を応用し、変化に対応する工夫である^{6,7}。次節ではやや蛇足になるが、企業組織外、個人レベルで起こっている変化に触れて結びとしたい。

メイカーズムーブメントやCtoCビジネスによる経済取引の分散化

前述の多様化に対応するように、ICT（情報コミュニケーション）技術によって個人や小規模組織による製品サービスの開発や提供が比較的容易になってきたということがある。例えば、3Dプリンタやレーザーカッターなどのデジタル工作機械が小型化、高性能化しており、物作りがしやすくなっている⁸。こうした個人の製作活動が容易にできるようになってきたこともあり、これらを販売するためのCtoC（コンシューマーからコンシューマーへのビジネス）のウェブプラットフォームがさまざま登場してきている。例えば、ネットオークションの「ヤフオク!」を皮切りに、簡単にオンラインショップを開設できるサービス「BASE」やハンドメイドマーケットアプリ「minne」、個人間の売買プラットフォーム「メルカリ」などが次々と登場し、成長している。さらには短期的にリアル店舗を運営することを可能にするため、場所の短期的貸借を仲介する「SHOPCOUNTER」や「SPACEMARKET」などというサービスも登場している。図4は経済産業省の平成29年度の調査によるフリマアプリの市場規模の推定を示している。2016年から2017年にかけてヤフオクやメルカリなどのフリマアプリの市場規模が1.5倍

に成長していることから、個人間の取引が爆発的に増加していることが分かる。

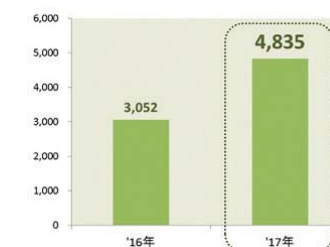
このような状況で個人がどう活躍できるかと考えると、今まで企業に統合されてきた開発ノウハウ、生産設備、販売ノウハウや市場情報にどうアクセスできるかという点が問題となってくる。そして、これまで企業に統合されてきたこのような機能を分散化し、誰でも利用できるサービスが求められる。例えば、先述したSHOPCOUNTERを運営するCOUNTERWORKS社は小規模な商業空間を短期的に貸し出すプラットフォームを運営しているが、その利用サポートまで行うとともに商業空間ごとに販売傾向、集客力、接客情報などの情報を集めユーザーに還元する形で支援しようとしている。単なるプラットフォームではなく、ユーザーのリアル店舗運営を支援するサービスそのものの事業化を目指しているのである。誌面の都合上詳細は省くが、個人単位ではこのようなサービスにアクセスし使えるという能力が今後重要になってくるだろう。この領域は今後の研究課題となっている。

以上、非常に雑駁な議論になってしまったが、今起こっている変化に組織や個人がどう対応できるかという点に関する課題の提示ぐらいはできたかと思う。興味関心のある方は学生、社会人問わず、ぜひ本学商学部で一緒に研究に取り組んでいただければ幸いである。

【参考文献リスト】

- 落合陽一（2015）『魔法の世紀』PLANETS
 経済産業省（2017）「平成29年度我が国におけるデータ駆動型社会に係る基盤整備」
 篠原巨司馬・足立洋（2017）「中期経営計画による戦略共有と戦略形成—中小企業の経営会議のエスノグラフィに基づく研究—」『原価計算研究』41（2）：84-96。
 総務省（2018）『平成30年度版情報通信白書』
 福岡誠宣・米満洋己・新井康平・梶原武久（2013）「経営計画が企業業績に与える影響」『管理会計学』21（2）：3-21。
 Prahalad, C. K. and Venkat Ramaswamy (2004) *The Future of Competition*. HBRP. (有賀裕子

図4 フリマアプリの推定市場規模（単位：億円）



出所：平成29年度我が国におけるデータ駆動型社会に係る基盤整備（経済産業省）

⁶ 福岡大学商学部では、このような企業の最先端としてゲーム業界に焦点を当て新しい教育・研究プログラムを開始した。ゲームメーカーはゲームクリエイターという個人が価値の源泉であるとともに、顧客の趣味嗜好と正面から向き合う娯楽作品をチームで作っているという点で経営学的にも現代の社会課題的にも注目すべき対象だからである。参考：https://www.comm.fukuoka-u.ac.jp/creative_management/

⁷ 一方で多様化自体を捉えるために組織的な取り組みをしている事例も多々ある。例えば、顧客と企業が一緒になって経験価値を生むべきだという価値共創という概念が議論されている。元ミシガン大学教授プラハラド氏と同大学教授ラマスワミ氏による『コ・イノベーション経営』を参照されたい。

⁸ クリス・アンダーセン氏は『メイカーズ』の中でこのような新しい動きをメイカーズムーブメントと呼び、包括的に議論している。また福岡大学工学部の新4号館には、デジタル工作機械などを導入する「ものづくりセンター」が設置されているし、ホームセンターを展開する株式会社グッデイはGOODAY FABやファブラボ太宰府というサービスを提供していたりと、電子工作機械を持っていなくても物作りをしやす環境が整いつつある。

- 訳 (2013) 『コ・イノベーション経営 価値共創の未来に向けて』 東洋経済新報社
- Hope, J. and R. Fraser (2003) *Beyond budgeting: how managers can break free from the annual performance trap*. Boston, MA: Harvard Business School Press. (清水孝監訳. 2003. 『脱予算経営』 生産性出版)
- Mintzberg, H. (1994) *The Rise and Fall of Strategic Planning*. Prentice Hall. (中村元一監訳. 1997. 『「戦略計画」 創造的破壊の時代』 産業能率大学出版部)

科学

生命科学における科学技術の進歩と 生物に対する考え方

— 遺伝情報を書き換える、作る時代が来る？ —

福岡大学理学部化学科准教授 福田 将虎

執筆者紹介

福田 将虎 (ふくだ まさとら)

1977年生まれ。兵庫県西宮市出身。福岡大学理学部化学科准教授。専門は化学・物理寄りの生命科学。「遺伝情報」や「RNA」に興味を持ち、日々、学生と一緒に科学を楽しんでいる。



まえがき

現在私は、生命科学分野を中心とした、教育・研究活動を行っています。今年、平成31年を最後として平成時代は幕を下ろします。この時代の節目に至り、生命科学のこれまでの進展と今後を考えた時、重要なキーワードの一つとして「遺伝情報」があると思います。今や人類は、生物の遺伝情報を自在に書き換える、または人工的に作り出す確実な技術を手に入れつつあります（または既に手に入れています）。つまり、人間を含めた生物の設計図を自由に設計し、書き換える、またはこれまでにない生物（みたいなもの）を創り出すことができるということです。次の時代では、このような技術が当たり前存在する世界の到来が容易に想像できます。その時、これまで考えていた生物の定義は大きく「変化」するでしょう。「生物」に対する考え方は、平成の時代を含めこれまでと同じでいいのか、または、生命科学系の研究分野だけではなく、思想や倫理などを含め新たに考え直さなくてはならないのか、今がまさにそれらを議論すべき重要な時期であると感じています。今回は、生命科学の教科書的な内容を踏まえて、遺伝情報の

書き換えをトピックスとしたお話をしたいと思います。これらを通して、これからの遺伝情報や生物について一緒に考えてみませんか？

遺伝情報を書き換える「ゲノム編集技術」

最近、テレビやネットのニュースなどで、「ゲノム編集」という言葉を聞いたことがあるかもしれません。ごく最近、ゲノム編集技術が世間に注目された重要な出来事がありました。それは、人為的に遺伝子を改変した赤ちゃんが生まれたというものです。このことの是非に関してはいまだ議論されていますが、遺伝子の書き換えに使われた技術はゲノム編集技術でした。実は、このゲノム編集技術は、ここ数年の間で生命科学に携わる者の間では、全ての人が必ず耳にしたことがあるのではと思うくらいインパクトの大きな技術です。これまで遺伝情報の書き換えには、高度な専門的知識と技術が必要でした。しかし近年、CRISPR/Cas9（クリスパー／キャスナイン）という原理を用いた、従来の技術よりもはるかに簡便かつ効果的な新しいゲノム編集技術が開発されました。実際、この技術を用いれば、専門の研究者でなくても、少しトレーニングを積めば高校生や大学生でも簡単に生物の遺伝情報を書き換えることができます（もちろん専門的な設備は必要ですが）。そのため最近では、ゲノム編集技術が基礎研究分野だけではなく、農業や医療を始め、生物に関わるさまざまな応用分野にも急速に広がり始めています。つまり、遺伝情報の書き換えがごく身近な技術になってきたのです。

遺伝子って何？

遺伝子（遺伝情報）は生物の設計図である、という言葉聞いたことがある人は多いと思います。では、遺伝子を書き換えることが、具体的に生物にどのような効果を及ぼすのでしょうか。これを理解するためには、まずは遺伝子が何なのかをもう少し知る必要があります。以下に、生物は遺伝子をどのように使っているのかを説明します。

生物は分子でできている

まずは、私たち人間を始め、地球上の生物がどのような仕組みでできているのかを見てみましょう。人間を例にとり、ごく簡単にエッセンスのみを説明します。まず、人の体は、心臓や胃などの臓器や、目や鼻などさまざまな機能を持つ

た器官を持っています。これらは、細胞が集まって作られています。つまり人間は、細胞の集まりでできていることとなります（成人は約40兆個の細胞でできている）。では、細胞は何でできていて、どのようにして生きて（働いて）いるのでしょうか。細胞は、実にたくさんの「さまざまな機能を持った分子」でできています。そして、これらの機能を持った分子が協調しながら働くことで生きています。すなわち生物は、機能を持った分子の集団でできているということとなります。生物の定義に関してはいまだ定まっていませんが、これまで出された有名な定義をいくつか紹介すると、理論物理学者エルヴィン・シュレディンガーは、「生物には、遺伝子の情報に基づいて子孫を残すこと（自己複製）と、栄養を取って活動すること（代謝）の二つの仕組みがある」と述べています。また、アメリカ航空宇宙局（NASA）は、「生命とは、進化（ダーウィン進化）を受けることが可能な、自己保存的な化学系である」と定義しています。少し話がそれてしまいましたが、実際の生物は、生きるために必要な働き（化学反応や形を作る）をする分子と、それらを合成または複製するための情報を持つ分子があり、これらをよく使って生きています。このように考えると、生物は有機分子で作られた機械のように感じるかもしれません。これを機械論といい、心や精神、意思、靈魂などの概念を用いずに生物を説明するとこのようになります。

生物の中で働く分子と情報を持つ分子

働く分子の代表は、タンパク質です。人の体の中には、さまざまな機能を持ったタンパク質が存在しています。例えば、糖を分解するアミラーゼや外敵が体に侵入した時に作られる抗体などがタンパク質としてよく知られています。タンパク質は、生物が生きていくために必要なほぼ全ての働きを担っています。生物は、酵素と呼ばれる化学反応を触媒（加速）する機能を持ったタンパク質群がさまざまな反応を行うことにより、「生きている」と言えます。つまり、この化学反応のバランスが崩れると、体調を崩したり、病気になったりします。また、化学反応が停止してしまった状態が「死」になります。タンパク質の機能があるからこそ、生物は生きていけるのです。

実際のタンパク質は、アミノ酸が鎖状に連なった分子です。生物が使うアミノ酸は20種類（または21種類）あり、このアミノ酸の並び（アミノ酸配列）によってそのタンパク質の形や働きが決まります。もちろん長さ（連なるアミノ酸の数）

もそれぞれのタンパク質によって異なります。アミラーゼにはアミラーゼのアミノ酸配列があり、抗体には抗体のアミノ酸配列があるということです。アミノ酸の配列がタンパク質の働きを決めるのであれば、その配列の情報は生物にとって非常に重要なものになります。実は、「遺伝子」というのは、このタンパク質のアミノ酸配列を決める情報のことをいいます。そして、その情報はDNAに書かれています。つまり、「DNA」は物質（分子）で、「遺伝子」とはそこに書かれている情報なのです。

遺伝子の使い方 — 分子生物学のセントラルドグマ —

次に、細胞がどのようにして遺伝情報を使っているのか、すなわち、DNAに書かれたアミノ酸配列（遺伝子）からどのようにしてタンパク質を作り出しているのかについてお話しします。全ての生物は、①DNAの情報をRNA（リボ核酸）という分子に写し取り（転写）、②そのRNAの情報を使ってタンパク質を合成（翻訳）する、という共通の方法で遺伝子を使っています。この一連の流れは、全生物の基本原則として「分子生物学のセントラルドグマ」と呼ばれています。DNAには、その生物の全ての情報が書かれていて、この全遺伝情報を総称して「ゲノム」といいます。ゲノムは正確に複製され、次世代に受け継がれます。

一方で、生物は常に全ゲノムの情報を使っている訳ではなく、必要に応じて特定のDNA領域をRNAに転写し、タンパク質を合成しています。このように、生物を構成している全ての細胞は、全情報が書かれたDNAを常に持っていて、そこからRNAを一時的に転写（転写されたRNAは時間が経つと分解されていくため）することで、必要なタンパク質を合成しています。そして、このシステ

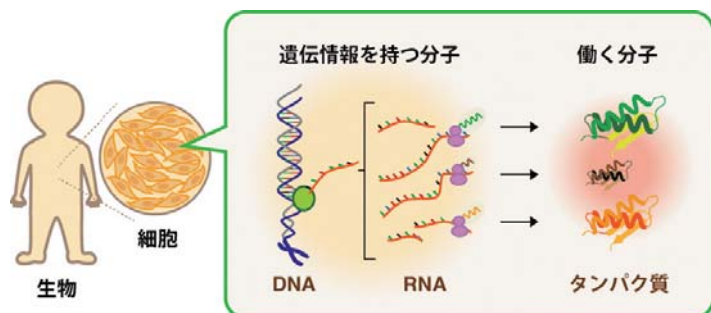


図1. 生物と遺伝情報の使い方

ムを使って作られたタンパク質が適切に働くことで、生物は生きているのです。

科学技術の進歩と生物

ここまで、生物が遺伝子をどのように使って生きているかについて概説しました。遺伝情報の書き換えが生物に及ぼす効果をよりイメージしやすくなったのではないのでしょうか。まとめると、遺伝子の書き換えは、細胞で作られるタンパク質の機能（もしくは量）を変化させ、生物の機能（能力や形など）を自在に操ることができるということです。

ゲノム編集技術は、その名のとおりに細胞のDNAを書き換える技術です。そして、この技術が今まさに社会のさまざまな分野に広がりつつあります。しかしながら、現時点では、ゲノムが持つ機能にはまだまだ不明な点がたくさん残っている（生物のDNAに書かれている意味を全て理解できていない）ことに加え、ゲノム編集技術が目的とは異なるDNA配列を書き換えてしまうリスクがあるという問題点があります。つまり、現段階でのゲノム編集には、今後解決すべき課題がまだまだ多く残っているというのが現状です。

では、その少し先を考えてみてください。今後、研究がさらに進展し、生物のゲノムの意味が全て明らかになり、ゲノム編集技術の書き換え精度が上がったとします。その時、この技術をどのように使うのでしょうか。また世界では、ゲノムDNAを人工的に合成しようとする研究も始まっています。次の時代、もしくはすぐその未来では、遺伝情報を書き換えたり、作ったりすることが当たり前になるでしょう。まさに、新しい人間やこれまでにない生物（遺伝情報から作られる有機分子の機械みみたいなもの）を生み出す科学技術がある世界

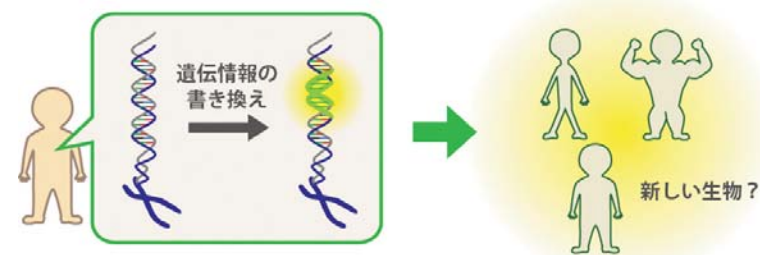


図2. 遺伝情報の書き換えにより、新しい生物？を作ることができる

です。その時、世界が豊かになる正しい方向へこれらの科学技術を使っていくには、生物をどのように捉えるかがとても重要です。生命科学に対する考え（リテラシー）が科学技術の進歩に追い越されている今だからこそ、「生物」や「遺伝子」、「生きる」ことを考え、理解しなくてはならないと思います。今はまだその答えは見つかりませんが、「生命科学を学ぶ」その先に必ず光があることを信じて、これからも研究室メンバーと共に研究を続けていきます。

最後に、このお話を読んでいただいた人が少しでも生命科学に興味を持ち、今後の生物について考えるきっかけになればと思います。



研究室風景

医療

再生医療の変容について

福岡大学医学部教授 小玉 正太

執筆者紹介

小玉 正太（こだま しょうた）

1963年生まれ。福岡大学医学部再生・移植医学講座主任教授、福岡大学病院再生医療センター長、福岡大学基盤研究機関再生医学研究所長。日本再生医療学会・日本移植学会（評議員）、日本組織移植学会（幹事）、日本膝・膝蓋移植研究会・日本異種移植研究会（理事）に所属。



はじめに

学部教育を受けていた当時、私が福岡大学医学部の学生であった頃、再生医学あるいは再生医療なる学問や医療が誕生するとは想像すらできなかった。それはまさに、1870年当時はサイエンス・フィクションであった、ジュール・ヴェルヌが発表した「海底二万マイル」が現実となり、潜水艦が誕生した変容に重なる。

2000年に大学院を卒業した私は、米国・Harvard Medical Schoolの関連施設であるMassachusetts General Hospitalの免疫生物学教室で研究に従事した。当時はガソリン・1ガロン（約3.8リットル）が90セント台（約100円）で、大排気量の米国車をあまり燃費を気にすることもなく運転できた。また政権はクリントンからブッシュに移行し、米国再生医療分野の受難期を迎えることとなる。キリスト教右派を支援母体とするブッシュ政権では、ヒトの受精卵を用いた胚研究は全面禁止となり、胚研究での公的競争研究資金の獲得を困難とした。しかし奇しくもこの政策が、成体と呼ばれる胎児でない成長が完結した個体で、幹細胞を探索するきっかけとなるのである。さらに不景気で先の見えぬ経済不安に突入した米

国では、世相とは対照的な科学成果を生み出していくのである。1990年代から、哺乳類以外での胚幹細胞研究から、マウス胚幹細胞での研究が進んだ。専攻する分野では分化発生に関わる研究が加速化し、胎生期を経てどのような転写因子の組み合わせで、幹細胞・前駆細胞から終末細胞へ細胞の分化が進んでいくかが、明らかとなっていった。

再生医学

再生とは、生物が一部を失ったときに、その失った部分を補うことで、損傷を受けた組織や器官、四肢などを復元する現象である。さらに再生医学とは、器官発生や組織再生などに見られる“生物学的プロセス”を、人為的に最大化あるいは最適化することにより、革新的な治療法を開発することを試みる新しい医学である。加えて、発生生物学や幹細胞生物学の新知見を、臨床医学へ応用することを目的としている。ここでいう“生物学的プロセス”とは細胞死や分化・増殖、あるいはそれらに関わるプログラミングであり、人為的に最大化あるいは最適化することとは制御あるいは促進し、誘導することを言っている。

特に私が専門とする領域である、血糖を降下させるインスリンホルモンの分泌を含むβ細胞の再生については、内胚葉から膵臓の前駆細胞を経て、血糖調整に関わる内分泌系統の前駆細胞や消化酵素の分泌に関わる外分泌系統の前駆細胞、そして膵管を含む管腔系統の前駆細胞に分化が進むことが知られている。さらに、それぞれの前駆細胞から終末細胞である膵島細胞や外分泌細胞そして膵管細胞が分化する¹⁾。ただしこれらの分化は経時的に一方通行であり、これを遡ることを細胞の“可塑”と表現する。言い換えれば経時的に組み込まれた情報はプログラミングと呼ばれ、逆に細胞を先祖返りさせる現象をリプログラミングと呼ぶ。リプログラミングにより、終末細胞は先祖返りし、細胞

再生医療研究の歴史

1990年代後半ごろ

β細胞や膵島細胞を再生する研究が始まる
胚性幹細胞(ES細胞)を用いて膵島を分化誘導する方法の研究や、その分化誘導因子を遺伝子的に解析することを行う

2000年代初めごろ

胚性幹細胞(ES細胞)以外から膵島細胞を誘導する研究が始まる
大人の体にある幹細胞から膵島細胞を誘導する試みが始まる

2010年前後

終末細胞が初期化されて幹細胞となる「リプログラミング」と呼ばれる現象の応用が進む
iPS細胞が誕生

現在

終末細胞が直接標的細胞に分化誘導されるといった「ダイレクトリプログラミング」といった手法を開発
しかし、膵島移植を超える成果を導き出したものは大動物実験でもなく、基礎研究の成果と現実の臨床の場には大きな隔りがある

※参考文献1)より

胞分化の出発点である幹細胞に帰着する。この代表がiPS(induced Pluripotent Stem cell)細胞と呼ばれる国力を挙げて支援する幹細胞であり、受精卵を壊すことから異端扱いを受けたES(Embryonic Stem cell)細胞である。全ての発生学の根幹は受精から出産までにあり、その間における遺伝子発現の消退は長く人知の及ぶ範疇になかった。しかしながら、近年その分化進展の素数に当たるものが、転写因子の組み合わせであることが明らかとなっていった。そして広くそのブラック・ボックスを解明し臨床応用に結び付けることが、私自身研究者としてのライフワークとなっていったのである。

再生医療

提供する再生医療は幹細胞治療のみでなく、広く終末細胞を含む組織・細胞治療が候補となっている。さらに再生医療等安全性確保法が制定され、法規的にも届出に遵守すべき制約を受ける治療となっている。

元来は移植医療とされていたが、インスリン分泌細胞を含む膵島を移植する膵島移植は、臓器移植とは異なり、現在では、再生医療の法律に包括されている¹⁾。我々のチームは長く先進医療として、この診療に従事している。幸いなことに、この膵島移植は福岡大学を含む先進医療6施設の成果として2020年には医療保険収載がなされ、一般診療に移行する可能性が高くなっている。



「膵島移植」とは、膵臓でインスリンを分泌している膵島細胞を肝臓の門脈に移植する治療のこと。

これに対し、膵臓全体を移植するのが「膵臓移植」。

イラスト提供 博多つばみの会事務局長 永原清香様
このイラストは2015年1月10日に開催された「第1回九州膵島移植フォーラム」のポスターでも使用されました。

移植医療は長年閉塞的な問題を抱えており、その代表的なものが臓器提供者であるドナー不足の問題である。世界一の提供患者数を示すスペインでは人口100

万人あたり日本に比べ35倍以上のドナーが存在する。日本は世界の中でドナー数が最も少ない国の一つであり、さまざまな対策がなされているものの、残念ながらその成果はまだまだ現れていない。その打開策として、再生医療が期待されているが、現実的な診療として行われる膵島再生は、いまだ遠く実用に及ばないのが現状である。その中で近年、注目をされているのが、バイオ人工膵島と呼ばれる医療用ブタ膵島を用いた異種移植である。元来異種移植では強い拒絶反応が引き起こされるが、ブタ膵島に免疫隔離膜を被覆し拒絶を防ぐ試みが海外でも行われている¹⁾。福岡大学病院は国立国際医療センターとともに、患者団体である日本IDDMネットワークから研究助成を受け、異種移植に向けて対応すべく整備を進めているところである。今後、日本初となる可能性のある治療を母校の福岡大学病院から、研究・臨床チームと連携し提供していきたいと考えている。

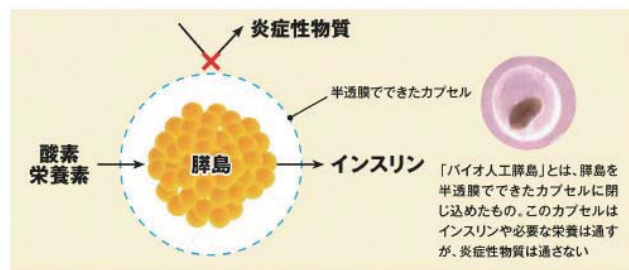
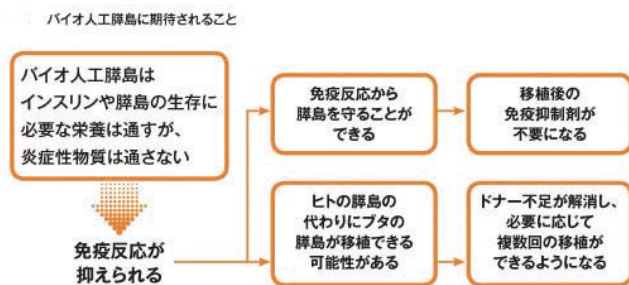


図2 バイオ人工膵島とは



再生医療とバイオ人工膵島の技術が融合すれば、より効果的な移植治療へとつながると考えられる

※参考文献1)より

<参考文献>

1) 小玉 正太「再生医療が切り開く未来」日本糖尿病協会月刊「さかえ」2015年7月号:10-17.

医療

福岡大学筑紫病院の歴史と共に歩んだ私の看護師人生、変わらぬ看護観

福岡大学筑紫病院看護部副看護部長 福本 洋美

執筆者紹介

福本 洋美 (ふくもと ひろみ)

福岡大学筑紫病院看護部副看護部長。平成元年3月に国立病院九州がんセンター附属看護学校を卒業後、同年4月に福岡大学筑紫病院に入職。内科・外科・整形外科混合病棟、小児科病棟、外科病棟に配属。平成11年に主任看護師、平成18年に看護部長、平成24年から副看護部長(総務担当)。



はじめに

福岡大学筑紫病院は、昭和60年に筑紫野市に開院し、平成の時と共に歴史を重ねてきました。現在、大学病院としての高度先進医療の提供と地域医療支援病院の2つの使命を掲げ、地域密着・地域完結型医療を行っています。

平成がスタートした年、私は看護師としての人生を福岡大学筑紫病院でスタートしました。この平成の30年間に、医療の現場では患者さんの平均在院日数が30日から10日になる等、目まぐるしく変化してきました。福岡大学筑紫病院の30年間の歴史と共に、私の看護師としての30年を振り返りたいと思います。

平成元年に就職、看護師人生をスタート

新人として就職した平成元年は、福岡大学筑紫病院が開院し3年目を迎え、5階病棟が開設した年でした。許可病床数が225床から345床に増床になり、看護師

医療



当時の福岡大学筑紫病院



新人の頃の筆者（右）

36人が増員になり、患者さんの平均在院日数は27.3日でした。5階病棟のオープニングスタッフとして同期5人で配属となり、消化器内科・外科・整形外科の混合病棟でのスタートでした。

そして、看護師2年目の平成2年12月に、筑紫病院に眼科・耳鼻いんこう科・泌尿器科が新設になりました。この時も、私はこの3科病棟のオープニングスタッフでした。現病院長の向野先生が眼科の部長として来られ、術後回診で緊張のあまり手が震え、点眼が眼に入らず怒られたことも、今では懐かしい思い出です。

平成5年に小児科病棟へ異動、看護師人生の転機に

私の看護師人生の中で一つの転機になったのが、小児科への異動です。就職して5年目、地元の宮崎に帰るか悩んでいた頃でした。小児科は就職時からの希望でした。小児科には、難治性の神経疾患の子どもたちが多く入院していました。その子どもたちのご家族はほぼ24時間付き添われていたので、多くの時間ご家族とも関わりました。特に印象に残っているのは、未熟児でダウン症の障がいがある1歳の〇〇ちゃんとの出会いです。発達の可能性を信じて一緒になってリハビリを一生懸命頑張る、愛情を注ぐご家族。母親は「未熟児でダウン症で生まれてきた時は、全然受け入れられなかった。何でこの子が自分の子どもなんだろうと思った。でも、必死に生きようとしているから、私たちも頑張らないとね。今はかわいくて仕方がないのよ」と愛情いっぱい関わっていました。神経専門医の小児科医師から、子供たちに後遺症が少しでも残らないように、痙攣は1分、1秒でも早く止めることを教育されました。その医師が、七夕の短冊に『子どもたちの止まらないけいれんが止まりますように』と書いた願いの言葉が、とても印象

に残っています。今思い返すと、そこには子どもたちの未来を救う現場がありました。子どもに、そして家族の思いに寄り添うことの大切さを学んだ13年間の小児看護は、私に命の輝きの感動を教えてくださいました。

平成18年に師長として外科病棟へ異動、マネジメントの大変さと楽しさを学ぶ

平成18年に、看護師長として外科病棟に異動になりました。管理者として自分が何をすべきか悩んだ時期でした。外科病棟は病院内でも1、2を争う忙しさで、退職者も多いところでした。着任当初、忙しいために業務に流され、看護の本質である“患者へ寄り添うこと”が失われている印象を受けました。全ての患者さん家族に、私が直接看護の手を差し伸べられるわけではない、私が願う看護を病棟スタッフと共に実現するためにはどうすればいいか、自分の看護観を改めて考えました。そして、私が大切にしている患者、家族に寄り添う看護を共に行い、共に看護を語り、共に感動できる病棟にしたいと思いました。看護を語り続け、スタッフ一人一人に向き合い、スタッフがどんな看護をしたいか話を聞き、スタッフの強みを生かすことを意識して関わりました。

外科病棟の師長として2年が過ぎた頃、10代の頃から筑紫病院で入退院を繰り返して治療していたIBD（炎症性腸疾患）の患者さん達が、「前と病棟変わったよね。看護師さんが話を聞いてくれるし、笑顔になったよ。良い病棟になったよ。師長さんありがとう」と言ってくれました。その時は、少しずつ理想の病棟に変わったことがうれしく、涙があふれ、スタッフに感謝の気持ちを伝えました。忙しい中でもスタッフが患者さんに何ができるかを考え、看護を語り、看護の感動を体感し、看護が楽しいと思える病棟への変化を感じていきました。苦労もしましたが、病棟の変化を体感し、マネジメントの楽しさを感じたのも、この頃です。

「やる気」を起こす要因として、アメリカの心理学者・マックレランド氏は感情喚起モデルを示し、『やる気』になるには、まず感情が揺さぶられることが必要だ』と述べています。感動の看護、感情が揺さぶられる看護の体験こそが、スタッフの「やる気」につながっていると感じる看護の場面がたくさんありました。

平成21年、感情が揺さぶられた患者との出会い

医師と共に、患者の思いをかなえたエピソードを紹介します。患者さんは60歳代後半で大腸がんのために、数年、闘病生活を送っていました。肺転移がある終

末期となり、酸素を投与し、ほとんどベッドの上で過ごされていました。タバコが大好きでしたが、数日前からタバコを吸うこともできなくなっていました。病室を訪ねると、申し訳なさそうな笑顔で「師長さんお願いがあるのだけど・・・」とタバコをくわえるしぐさをされました。私は、患者さんの最期のお願いだと感じました。主治医は手術中で、病院敷地内は禁煙です。最期に患者さんの願いをかなえたいと、スタッフと話しました。患者さんの病状は、その時は落ち着いていました。奥さま、娘さん、そしてお孫さんも面会中で、家族がそろっている「今」何とか散歩に行けないかと考えました。手術中の主治医に電話をし、患者さんを散歩に連れて行きたいことを相談すると、タイミングよく手術も終わる頃で、理解した医師と共に酸素ボンベを持ち、車イスで旧病院の裏口から病院の敷地ぎりぎりの所まで行きました。酸素ボンベを止めて、医師が「どうぞ」と一言話され、私達はゆっくりと患者さんと家族に背を向けました。患者さんは、1本のタバコを口にして、幸せそうにゆっくりと味わうように吸われました。奥さま、娘さんは、家での父の姿を思い出されたのかもかもしれません。涙を流しながら見つめていました。患者さん、ご家族から「(タバコの事を)分かってくれてありがとう」と感謝されました。患者さんは数日後に亡くなられ、これが最期のタバコとなりました。今でも、外科病棟と一緒に働いていたスタッフが、「患者さん、家族の思いをかなえるためにどうすればいいか、あの時は一緒に悩んで考えましたよね。あんなに忙しい病棟だったのに、師長さんとは本当に看護を語って楽しかったです」と言ってくれます。スタッフはやりがいを感じ、生き生きと看護をしています。

平成24年、新病院開院前に副看護部長へ

平成24年に副看護部長となり、新病院開院前で準備に奮闘しました。そして、念願の新病院が平成25年5月に完成し、病床数310床でスタートしました。患者さんの平均在院日数は11.5日と短くなり、現場はさらに忙しくなっていました。

新病院開院、病棟再編、112人の新人看護師を迎え、看護部にとって大きな変革の年でした。現場は大きく揺らぎましたが、副看護部長になっても、スタッフ一人一人に向き合うことを大切にしました。

看護部は『人間性豊かな患者中心の看護を実践する－誠実・創造・責任－』という理念を開院から変わらず掲げ、看護を行っています。在院日数が短縮される



より働きやすい職場を目指す看護部



患者さんへの思いを語る筆者（右）

中、医療の現場は煩雑で、多忙を極めます。中でも、看護の現場で看護師たちはこの理念を実現し、多くの感動の看護を実践しています。

平成29年、スタッフと共に感動した一つのエピソード

患者さんは70歳代の男性の終末期の患者さんで、50歳代の頃から食道がんで長い闘病生活を送っていました。今回の入院中は、娘さんと結婚式でバージンロードを歩くことを目標に、リハビリを頑張っていました。しかし残念なことに、患者さんの病状は日に日に悪化し、結婚式に出席するのは困難という判断で、主治医からその旨を本人と家族に伝えました。娘さんは「ウェディングドレス姿を父に見せたかった・・・」と寂しそうに話されました。担当看護師は、何とかしてこの思いをかなえたいと考え、病棟での結婚式を企画しました。式当日の患者さんは呼吸状態も思わしくない状態で、式を終えた娘さんの帰りが間に合うのだろうかと不安になるほど状態は厳しくなっていました。病室で私達が飾りつけをしてざわついていても、患者さんはずっと目を閉じたままでした。娘さんが来院され、ウェディングドレスに着替え、患者さんもベッドに横になったままタキシードに着替えて準備を整えました。私達看護師が見守る中、新郎新婦は患者さんの待つ病室までの廊下のバージンロードを歩き、ドアをノックしました。患者さんはずっと閉じていた目をしっかりと開け、手を差し伸ばしました。その後、新郎が患者さんの耳元に顔を近づけると、患者さんが「娘を頼む」と一言言われ、新郎はしっかりと患者さんの手を取り「任せてください。幸せにします」と話されました。娘の誕生から一家の大黒柱として家族を支えてきた父親の責任を果たすかのように見えました。ご家族も涙し、私達看護師も涙を流しながら過ごした幸せ

な時間でした。

30年の看護師人生を振り返って

今回、平成の30年間を振り返り、筑紫病院の節目に何かしら関わってきた自分がいました。しかし、いつの時も、『患者、家族の思いに寄り添う』看護にこだわり、患者、家族に向き合ってきた私の看護は変わらないし、新しい時代を迎えるこれからも変わらないと思います。



現在の福岡大学筑紫病院

医療の現場は、さらに目まぐるしく変化し、私たちはその変化に対応すべく変革が求められています。しかし今後も、看護部理念である『人間性豊かな患者中心の看護を实践する－誠実・創造・責任－』を实践することは変わることなく、理念に掲げる看護を实践し、看護を語る臨床の現場でありたいと思います。福岡大学筑紫病院の第3代病院長の朝永正道先生が「過去があって現在（いま）がある。現在（いま）があって未来がある」と筑紫病院30周年記念誌の中で述べられています。これまでの歴史があるからこそ、福岡大学筑紫病院の今があり、今後の発展と成長につながる未来があると思います。

〈参考文献〉

宮本美沙子『やる気の心理学』創元社

スポーツ

スポーツのコーチングが変わる

福岡大学スポーツ科学部教授 米沢 利広

執筆者紹介

米沢 利広（よねざわ としひろ）

1960年生まれ。福岡大学スポーツ科学部教授。専門はスポーツコーチングに関する研究、バレーボールの指導およびその研究。現在、福岡大学女子バレーボール部監督、日本バレーボール協会女子強化委員および全日本大学バレーボール連盟女子強化委員長で日本女子バレーボールチームの強化にも携わっている。



この頃の大学スポーツ界では、アメリカンフットボール部の悪質タックル問題をはじめ、監督の暴力的指導、セクハラ問題やパワハラ問題など、指導者の資質が問われる問題が多数起こっています。また、アジア大会におけるバスケットボール選手の行動規範の逸脱による大会辞退の問題など、指導者や選手が相次いでマスコミを騒がす問題を引き起こしています。

このような問題が起きる背景には、勝利至上主義による指導者の資質低下、スポーツ選手への行動規範教育の欠如といったことなどが挙げられるのではないのでしょうか。つまり、スポーツに関わる指導者、選手ともに、これまでの指導方法やスポーツ選手としての取り組み方、考え方を変える必要があるのではないのでしょうか。

どんなに過去に成功した指導者や選手であっても同じことを繰り返すだけでは、進歩や成長はありません。ロジェ・ルメール氏（元フランスサッカー代表監督）は、2001年日本でのフットボールカンファレンスで、指導者への戒めとして「学ぶことをやめたら、教えることをやめなければならない」と語っています。これは指導者にも選手にも、当てはまる言葉ではないのでしょうか。

「人間力なくして競技力の向上なし」

スピードスケートと自転車競技の選手として、夏季と冬季のオリンピックに7回出場し、現在は参議院議員として活躍している橋本聖子氏（JOC 日本オリンピック委員会 元選手強化部長）は、リオデジャネイロオリンピック後の国会答弁で、「人間力なくして競技力の向上なし」という考え方を全ての選手に徹底していきたいと述べ、2020年の東京オリンピック・パラリンピックまでこの標語でスポーツ強化を進めていくことを明言しています。

スポーツ選手として活躍し、国民の期待に応えてオリンピックでメダルを獲得するためには、「人間力」がベースになっているのだと思います。昨今のスポーツ界で起きている問題は、実は「人間力」が問われているのではないのでしょうか。

では、「人間力」とはどのようなことを指しているのでしょうか。

橋本氏は、自身の選手経験から次のように述べています。

「スポーツでも芸術でも、何かを極めた世界には、肉体的、あるいは技術的な闘いだけでなく、魂の戦いがあると思っています。それは、他人とではなく、自分との闘いです。（中略）武士道・柔道・剣道・茶道のように『道』といった場合、それは勝敗だけではなく、どう生きるかということを追求しています。技術錬磨の実践の中で、自分の生きる道を見出すことです。いろいろな『道』があり、あらゆる職業にも精神性を高める『道』の要素が含まれています」と述べており、スポーツだけでなく、あらゆる職業においても『道』を極め、魂を磨くことが大切であると指摘しています。そして、人間力を高めるには、「『道』の精神には勝敗だけでなく、生き方まで追求する考えがあります。それだけに礼儀礼節、利他、謙譲といった精神が欠かせません。特に、感謝の心は人間性を高めるもっとも大切な要素です」と述べています。

つまり、スポーツのコーチングとは、人間力を高めることにほかならないのです。そして、選手だけが人間力を高めるので



試合中に指示を出す筆者

はなく、コーチングする指導者自身も人間力を高める努力が必要なのです。ロジェ・ルメール氏の語った「学ぶこと」とは、単に技術や戦術の指導方法を学ぶだけではなく、「人間力を高める努力をすること」も含まれているのです。

「人間力を高める」とは？

では、スポーツの指導者や選手が人間力を高めるためには、具体的にどのようなことをすればよいのか考えてみましょう。

京セラの創業者で、破綻した日本航空（JAL）を3年で再建した稲盛和夫氏は、人間力を高めるために次の「六つの精進」を挙げています。

1. 誰にも負けない努力をする
2. 謙虚にして驕らず
3. 反省のある日々
4. 生きていることに感謝
5. 善行、利他行を積む
6. 感性的な悩みをしない

企業経営とスポーツのコーチングは多少違いますが、この「六つの精進」をスポーツのコーチングに当てはめて考えてみます。

1. 「誰にも負けない努力をする」とは、スポーツのコーチングにおいても当然のことと思います。しかし、この誰にも負けない努力を一日や二日はできますが、長期間継続していくことは大変難しいことです。誰にも負けない努力を続けていくためには、スポーツ選手それぞれが、ミッションとビジョンを持つことが必要ではないのでしょうか。

ミッションとは、使命、目的、夢、志、思いといった、個人やチームの理念のことです。ビジョンとは、ミッションを達成するための具体的な取り組み方、方法や計画などで、数量などによって表せるものです。スポーツ選手におけるミッションとは、自分の限界や可能性に挑戦することであったり、多くの人に自分の成長した姿を見せることであったり、感動を与えることであったり、元気や勇気、夢を与えることであったりします。このようなミッションを具体的に達成するためのビジョンを明らかにすることで、誰にも負けない努力を継続していくことができるようになるのではないのでしょうか。

2. 「謙虚にしておご驕らず」とは、橋本氏が述べているように、どんなに成功した指導者や選手であっても礼儀礼節、謙譲、倫理観、道德律を忘れない、ということでしょう。

3. 「反省のある日々」とは、日々の自分の行動や心のありようを点検して、努力を怠っていないか、自分のことだけを考えていないか、卑怯な振る舞いはないかなど、自制自戒して考え方や行動を改めるようにすることだと思います。

スポーツ選手には、日々の反省のために、日誌を書くことを勧めたいと思います。スポーツをしている中学生や高校生では、練習日誌を書くことがよくあります。また、中村俊輔選手（サッカー選手）などプロスポーツ選手でも、日誌を書く選手がいます。

日誌には、目標に対して、今日のプレーはどうだったのか、良かった点、悪かった点などを明らかにし、明日の練習でどう改善していくか、どう取り組んでいくかといった点を記入すると、日々の練習に対する反省ができ、次の練習に対するモチベーションも高まります。また、日誌ではスポーツのことだけではなく、勉強や仕事のこと、日常生活も振り返ることができます。日誌の中に“今日の感謝”という欄を設けると、日常の何気ないことに感謝する習慣も身に付くことでしょう。日誌を書く習慣を身に付けて有効に使うことができれば、人間力を高める素晴らしい道具になるのではないのでしょうか。

4. 「生きていることに感謝」とは、当たり前と思えることに対しても感謝の気持ちを持たないことだと思います。そして、感謝することは謙虚さにもつながります。

一流の木工職人を育てている秋山利輝氏は、職人の心得として「感謝の心を持つことは、職人としての基本であり、人間力も高まる」と述べています。これは、橋本氏や稲盛氏と同様に、感謝する心が人間力を高める上で重要であることを指摘しているものです。

まずは身近な両親に感謝、家族に感謝、いろいろ教えてくれる先生（指導者）や先輩、同僚に感謝、スポーツができることに感謝、そして、当たり前だと思っていたバスや電車の通学や通勤などで、便利な乗り物とそれに携わる会社の方々に感謝、今日のいい天気感謝することで、感謝の言葉「ありがとう」が口癖になることでしょう。

5. 「善行、利他行を積む」とは、人のために行動すること、人の役に立つこと

を行うこと、相手に見返りを求めない行動をすること、簡単に言えば、「ありがとう」とお礼を言われる行動をすることではないでしょうか。

認知神経科学者の中野信子氏は、利他行動をとることで、自分が良い評価を受け、さらに相手が喜んでくれたときには、脳が何重もの喜びを感じることを科学的に証明しています。

また、北京オリンピックで金メダルを獲得した女子ソフトボールチームの上野由岐子選手（九州女子高等学校、現福岡大学附属若葉高等学校 OG）は、大会終了後に次のようなコメントを残しています。「今回のオリンピックを通して思ったのは、自分が誰かのためと思って頑張ってきたことが最終的に自分に還ってくるんだということです」。

利他行は、自分の喜びを高めるだけではなく、人のために努力したこと、頑張ったことが最終的に自分に返ってくるということなのです。

6. 「感性的な悩みをしない」とは、不平・不満や愚痴を言って、余計な不安や心配をしてクヨクヨ悩まない、ということです。そのためには、言葉を変えということも一つではないでしょうか。自分が口にしていない言葉を、ポジティブな言葉（楽しい、うれしい、面白い、ツイているなど）や感謝（ありがとうなど）の言葉に変えてみると、ネガティブな言葉（不平・不満、愚痴、悪口など）が少なくなるでしょう。

日本には古くからことばま言霊という言葉があります、言葉には不思議な魂が宿っており、その力が働いて言葉通りの現象がもたらされるという意味です。このようなことからポジティブな言葉を使うように心掛けることが大切です。

これからのスポーツのコーチングとは、勝利を求めて単に技術や戦術だけを指導するのではなく、人間力を高める指導を心掛けるとともに、指導者自身が人間力を高める努力をすることが大切になります。そして、スポーツのコーチングを通して、選手が自らのミッション（使命、志、思いなど）を持ち、そのミッションを達成するためのビジョン（目標、計画など）を立案するとともに、そのビジョンを達成するために「六つの精進」を行えるようになることです。そして、スポーツの面だけでなく、学校や職場、家庭の中でも人間力を高める「六つの精進」を行える人になることで、スポーツで活躍するだけでなく、社会に出て活躍し貢献できる人材へと育っていくものと思います。

<参考文献>

- 橋本聖子『オリンピック魂 人間力を高める』大日本印刷
 稲盛和夫『生き方』サンマーク出版
 秋山利輝『一流を育てる 秋山木工の職人の心得』現代書林
 中野信子『科学がつきとめた「運のいい人」』サンマーク出版
 西田文郎『どん底はツキの始まり』角川書店

福奏プロジェクト

文部科学省「平成29年度私立大学研究ブランディング事業（世界展開型）」

福岡大学は、人間の出生前から老年期までに遭遇するさまざまな健康の課題を解決し、人々の福（ハッピー）を奏（な）でることにより、健康持続社会の実現を目指すプロジェクト、通称「福奏プロジェクト」に取り組んでいます。

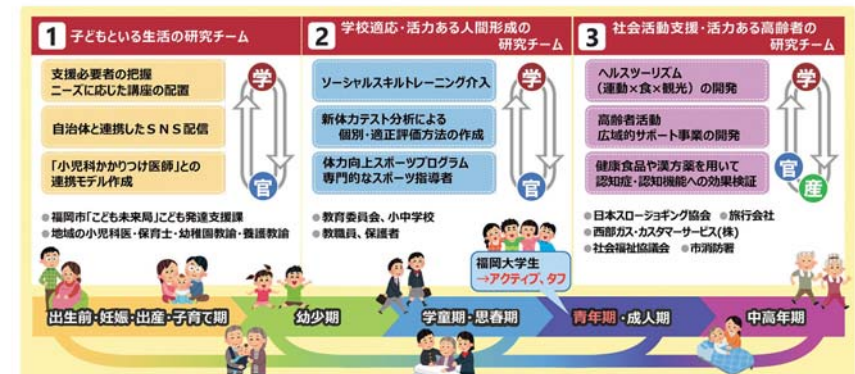
総合大学の特長を生かして、人文学部、医学部、薬学部、スポーツ科学部等が連携し、①妊娠・出産及び子育て期の子どもといる生活の研究、②学童期・思春期の学校適応支援・活力ある人間形成の研究、③中高年期の社会活動支援・活力ある高齢者の研究を行っています。

このプロジェクトは、文部科学省「平成29年度私立大学研究ブランディング事業（世界展開型）」に九州の大学で唯一採択されました。

<ウェブサイト>

<http://www.suisin.fukuoka-u.ac.jp/home1/branding/>

福奏プロジェクト



2018福岡大学大学院「学際シンポジウム」



2018年10月27日(土)、2号館222教室で「人工知能—その可能性」をテーマに「大学院学際シンポジウム」を開催しました。平成30年度福岡大学事業計画に掲げた「大学院教育の充実」に向けた取り組みで、今後の学際教育プログラム構築を目指して企画されたものです。

第一部では、4人の研究者がそれぞれの研究内容を報告。第二部では大学院学務委員長の廣澤孝之教授をコーディネーターに、来場者からの質問に各発表者が回答していきました。現在、最も注目を集めている科学技術であり、さまざまな分野への応用が期待される人工知能(AI)がテーマということで多くの質問が寄せられました。

本稿では各発表者の報告要旨と、寄せられた質問および回答の一部を紹介します。

【報告1】

「A.I.ではなく I.A.時代に向けて～基礎研究分野への影響」

理学研究科 田中 勝
教授



人工知能(AI)とは人間の知的活動を模倣したシステムですが、その行動選択には①報酬を期待している場合、②報酬を期待していない場合、の2つがあります。現在技術的に発達しているのは①であり、好奇心などの内発的動機付けに基づいた②のような行動選択ができるシステムは今のところ存在しません。

そこで現在は①の研究が進んでいるわけですが、私はこれをIA(Intelligence Augmentation=知能拡大)と呼んでいます。IAは人が効率的に物事の判断や創造的な仕事をするための支援技術であり、人に代わって何かをしたり、判断したりするものではありません。この技術は現在でも高度な段階まで進んでおり、今後さらに発展していくと思われます。実際にはこうした技術は、「知る」「作る」「治す」の各分野で総合的に発展していくことが望ましいのですが、今は「作る」部分が突出している状況で、「知る」「治す」という分野が活発になっていくと、より発展が見込めると思います。

基礎研究分野でのIA技術の成果を紹介すると、物理分野では制約付きボルツマンマシン(※)は、「MERA」と言われる計算アルゴリズムと等価であることが示され、AdS/CFT対応(※)の一例として考えられるようになっています。化学分野では溶解度予測や化合物の合成手順の導出などに応用可能なことが示されていますし、地球圏分野では、大気のリモートセンシング(人工衛星などのデータを情報処理する技術)などに活用できることが報告されています。

代表的なIA技術にニューラルネットワークがあります。その役割は、入力データに含まれる(識別に対して)重要な情報を、入力層から中間層(一層とは限らず複数層あることが普通)、出力層へと伝播させることで抽出し、「入力データの従う確率分布」を「出力として望ましい確率分布」へと変換することです。その際、教師信号(正解)を与える「教師あり学習」と教師信号を与えない「教師な

「学習」の二通りがあります。どちらの場合でも、期待される出力と実際の出力の違い（誤差関数または評価関数）を最小にするようネットワークを調節していきます。AIの「学習」とは、さまざまな可能性を試す多点探索を行いながら、「重み」（情報の重要性）を調節して誤差を最小化することを指しているわけです。

AIが人の仕事を奪うといった脅威論もありますが、むしろ私は、例えば掃除をする際、一般の人はレンタルロボットにやらせるところを富裕層は人を雇ってやってもらう、つまり人を雇うことがステータスになる、そんな時代が来るかもしれないと想像しています。

※制約付きボルツマンマシン：ユニット同士がすべて結合し、ボルツマン因子と呼ばれる確率に基づいて動作するようなネットワークをボルツマンマシンと呼びます。制約付きボルツマンマシンとは、ユニット同士の結合の仕方に制約を設けたボルツマンマシンのことです。

※AdS/CFT 対応：元々は超弦理論の分野で知られている対応ですが、特殊な状況では、考えている空間を「次元が一つだけ大きい空間（バルク）の境界」とみなし、バルクで考えると便利になるという境界とバルクの対応のことです。深層学習では、複数の中間層の並ぶ向きがこの追加された次元に対応します。

〔来場者からの質問〕

Q. データさえ十分にあれば、AIは感情も含めて人と同程度の思考を持てるのでしょうか。

A. データがあっても、ネットワークを構築して学習させる必要があります。人と同程度の思考を持たせようと考え、ネットワークをかなり複雑に設計する必要がありますし、感情をどのように数量化して取り扱うかという問題も生じます。そもそも「中間層をいくつ用意し、各中間層に含まれるユニットを何個にするか」といった設計は人が経験に基づいて決めており、確実に効果を出せる理論や指針があるわけではありません。そのためデータを学習させるネットワークの設計に大きな課題があるのですが、仮にそのようなものが設計できれば、感情を持っていると錯覚させることは技術的には可能でしょう。

【報告2】

「人工脳を作るための細胞レシピ

～構成論的に神経ネットワークを作る試み～

薬学研究科 准教授 桂林 秀太郎



脳の大きさは動物種によって違います。いろいろな動物の脳の重さと、そこに存在する神経細胞の数を調べた論文によると、マウスの脳重量は約0.4gで、そこには7,100万個の神経細胞があります。ラットは1.8gで2億個、ヒトは約1.5kgで860億個というように、高等動物になればなるほど、脳の重さも神経細胞の数も増えることが分かっています。また、高等動物ほど新皮質（前頭連合野）の割合が大きく処理能力も高くなるといわれ、ヒトの脳の30%が前頭連合野で構成

されています。

脳を作っているのは神経細胞だけではありません。その一つであるグリア細胞には、3種類の細胞があります。血管から神経細胞に栄養を供給する「オリゴデンドロサイト」。神経細胞が傷ついた時に修復しようとする「ミクログリア」。そして神経細胞同士が情報伝達を行う接合部であるシナプスの形成や神経回路の構築をサポートする「アストロサイト」です。

アストロサイトがなければシナプスは十分に形成されず、神経細胞の情報伝達はうまくできません。アストロサイトは場所さえあれば増殖し、広がっていく性質があります。高等動物ほど神経細胞1個当たりのアストロサイトが増えていくことや、その形も複雑で大きいことも分かっています。ヒトの脳内では1つの神経細胞に対し1.8個のアストロサイトがありますが、頭が良いとされるクジラは6個あるそうです。

そこで我々は神経細胞とアストロサイトの混成比に着目し、シナプス伝達の変化について東北大学電気通信研究所などの協力を得ながら4つの実験を行いました。その結果、「アストロサイトの占有面積が大きくなっても、シナプス伝達は変わらない（大きさは関係ない）」「アストロサイトの数（密度）が増えると、シ

ナプス伝達は良くなる（数が大事）」「細胞体付近にシナプスを作ると、伝達効率
は良くなる（場所と方向が大事）」であることが分かりました。

こうした基礎研究は、再生医療や精神疾患の治療などへの応用が期待されます。
今般は iPS 細胞の研究が盛んに行われていますし、iPS 細胞をアストロサイトに
分化させて脳に注入できれば、再生医療に役立つかもしれません。2018年にはパー
キンソン病の臨床研究で iPS 細胞を使った検証も始まりました。パーキンソン病
やアルツハイマー病などの精神疾患は、神経細胞だけでなく周辺にあるグリア細
胞の異常を修復する必要があるともいわれており、健全なアストロサイトを脳に
注入できれば、精神疾患の治療に活かせるかもしれません。このように、私の研
究が将来的に脳の修復や新たな脳機能の実装につながればよいと考えています。

【来場者からの質問】

Q. 脳を再生させる場合、これまでの学習記憶まで再生できるのでしょうか。

A. 記憶の再生は難しいと思いますが、暗記や計算といった学習機能は再生でき
ると思います。例えば私は今、英語を改めて勉強し直していますが、学生時代に
比べると単語をなかなか覚えられません。こうしたケースにおいて、iPS 細胞を
使ってアストロサイトに分化させることで若い神経細胞を脳の中に注入できれば、
学習能力は新しく実装できるのではと思います。

【報告 3】

「人工知能の応用と今後の展望」

工学研究科 教授 鶴田 直之

情報科学を研究している立場から見ると、人工知能 (AI) もコンピュータを
用いた情報処理の一つと言えます。コンピュータの使い方は「計算機活用の三段
階」に分類することができ、その視点から AI を考察してみます。まず初歩的な
使い方としては、人の手作業を自動化・効率化するもので、よく知られたものに
「計算機支援デザイン」、いわゆる CAD システムがあります。こうした「計算
機支援○○」は、従来の ICT 技術によって実現可能なレベルです。次の段階は
「Computational Chemistry」「Computational Biology」など「計算論的○○」と



言われるものです。研究対象をアルゴリズムとしてモ
デル化してシミュレーションや予測を行うもので、現
在 AI での研究が進められている分野に該当します。

最後の段階は「○○情報学」とでも呼ぶべきもので、
シミュレーションする技術を活用して、今まで見たこ
とがないものを作り、そこから発想を得て新たなもの
を創造する“道具”にしようというものです。将棋棋
士の羽生善治氏が「これまでの将棋の世界は膨大な宇
宙空間の一つの“銀河”でしかなかったが、AI は他

にも“銀河”があることを教えてくれた。人間がそこに踏み込むことで、また違
う世界が見えてくる」と語っていたのは正にこのことで、今後はこの分野で AI
の活用が進むと思います。

現在の AI は確率統計論の延長にあります。簡単な例として、アンケートを考
えましょう。回答の分布が完全にばらついていれば知り得ることは限られますが、
偏りがあれば一部の回答から全体を予測することもできます。では現実の問題の
データ分布には本当に偏りがあるのでしょうか。例えば画像認識の場合、人の視
覚が認識能力を持つためには現実の世界で膨大な画像データを学習する必要があ
りますが、それでも、それらの画像は存在しうる全体のごく一部に過ぎません。
囲碁でも、19×19のマス目に白と黒の石を交互に置く組合せは膨大にありますが、
定石などから「選択肢に入らない手」があり、やはり偏りが見られます。こうし
た偏りを学習によってモデル化することができれば、効果的に認識したり戦略を
立てたりできることとなります。

従来の確率統計的手法に比べて AI がうまく機能している理由は二つあります。
一つ目は、全事例ではなく「パーツ」と「組合せ」を覚えているからだとも言え
ます。画像のモンタージュをイメージしてもらおうと分かりやすいかもしれません。
「髪」「目」「鼻」のようにいくつかのパーツに分けて、その組合せを覚えるこ
とで、全事例を覚えるよりも少ない記憶量で多くの画像認識が可能になるわけ
です。二つ目は、先ほどの偏ったデータの分布が更には歪んでいることが多い
のですが、これに非線形な処理を加えて対処している点です。データの散布図
では、通常の正規分布と違って歪んだ分布になっているのを見かけることが
あるでしょう。

AI の活用に関しては、ビッグデータを集める時のプライバシーの問題や AI

が生み出した作品の著作権の問題、自動走行車が事故を起こした時の責任問題のほか、人の仕事を奪うのではないかといった懸念もあります。本学の共通教育科目「アカデミックスキルゼミ」では思考訓練の一つとして、こうした問題を取り上げてレポート作成に取り組んでいます。

〔来場者からの質問〕

Q. AIが概念や言葉を作り出し、関連性を認識することは可能でしょうか。

A. 例えば「温度」「熱」という概念を導き出すには、熱いという感覚を持つておくことが必要ですから、そういう感覚までAIに持たせる必要があります。言語を自然発生的に作り出せるかについては、学習によって似た事例をグループ化することはできますから、そのグループにネーミングすれば「言葉」となります。ただ、ネーミングに用いられた言葉に必然性があるかどうかは議論になるところです。言葉の関係性については、データがどういう時に、どういうデータと一緒に使われるかの組合せを学習していくことで認識できるようになると思います。

【報告4】

「犯罪行動の痕跡から犯人像を推定する

～犯罪心理学におけるデータマイニング的アプローチ～

人文科学研究科
准教授 大上 渉



私の扱うテーマは「犯罪捜査において活用されるデータマイニング」です。データから規則性を見出す「データマイニング」は、購買履歴を分析して次の販売につなげようとするマーケティング分野でも活用されており、ビッグデータを収集・学習する人工知能(AI)にも相通じるものがあります。

ここ20年ほど、犯罪捜査では従来通用していた伝統的な捜査手法が行き詰まりを見せています。遺留品の多くが大量生産品のため購入者の追跡が難しく、希薄な近所付き合いが聞き込みによる情報入手を困難にし、加害者と面識のない事件

が増加していることなどが背景としてあります。そのため警察庁は2003年、過去の犯罪データベースを活用して、犯人像を割り出す「犯罪者プロファイリング」の導入を提言し、近年では年間600件ほど実施されています。

犯罪者プロファイリングの前提は、①犯人の行動パターンが常に同じ、②同じような行動をする人は別人であっても同じような個人属性を持つ(その犯行パターンから個人属性が推定可能)の2点です。1970年代にFBI(米国連邦捜査局)で始まった研究は当初、犯行現場の状況をもとに「秩序型」と「無秩序型」に分類するものでした。ただ実際は、両者の特徴を含む「混合型」による犯行が多く、結局は捜査員の経験に依存せざるを得ませんでした。

こうしたFBI方式に対し、イギリスの心理学者カンターが提唱した統計的犯罪者プロファイリングは、データマイニングに基づくものでした。それによる米国の殺人事件の分析では、「鈍器で殴り殺す」と「軍隊経験がある」、「刃物で刺す」と「侵入盗の前科者」などは関連性が高いことが分かっています。

この手法を用いて、スーパーなどの食品や飲料に針類や洗剤、農薬などを混入する異物混入事件を分析しました。混入物によって「針類」「金属片」「薬品・向精神薬」「農薬・殺虫剤」「洗剤」の5つのタイプに類型化し、タイプごとに犯人の特徴を調べてみました。すると例えば、針類の場合は、「50歳以上」の「無職あるいは食品製造業者」が「不満の発散や店への嫌がらせ」を動機に、「スーパーやコンビニ」で「パンや菓子類など多岐にわたる食品」に混入している、といった傾向が得られ、異物ごとに特有の犯人像がみられることがわかりました。

過去に日本で発生したテロ・ゲリラについても、この手法で分析しました。テロ組織には固有の攻撃パターンがあることに注目し、犯行組織との関係性を調べました。その結果、例えば「対象に接近して発火装置を設置する」「攻撃対象が成田空港関係者」「犯行時間帯が午前0時から8時」であれば、ある思想グループの可能性が高い、など犯行特徴によって犯行組織が推定できるようになっています。

〔来場者からの質問〕

Q. AIを活用すれば、未解決事件も解決できるのでしょうか。

A. 犯罪予測や不審者発見などにおけるAIの活用も進んでいます。犯罪発生の確率の高い地域や時間帯を予測する犯罪予測システムは、日本の警察にも導入さ

れています。不審者発見システムには、肉眼では捕えられないような身体の振動を可視化し、そこから攻撃性・緊張度・ストレス度を評価、犯罪前にこれらの数値が高まる瞬間を捉えるものもあります。万引き防止 AI は、万引きをする直前に見られる不審な行動を検出します。こうしたシステムを組み合わせることで、未解決事件の解決につながることも期待されます。

プロフィール (報告順に掲載)

■理学研究科

教授 田中 勝

1963年生まれ。九州大学理学部物理学卒業、同大学院理学研究科物理学専攻修士課程修了、同博士課程修了、理学博士。

通商産業省工業技術院電子技術総合研究所情報科学部情報数値研究室主任研究官、大阪大学大学院理学研究科助教授(併任)、カナダ国立科学研究協議会(NRC)招聘研究員、埼玉大学工学部情報システム工学科助教授、独立行政法人産業技術総合研究所 脳神経情報研究部門 客員研究員、福岡大学理学部応用数学科准教授、2009年から同教授。

■薬学研究科

准教授 桂林 秀太郎

1973年生まれ。福岡大学薬学部卒業、同大学大学院薬学研究科修了、九州大学大学院医学研究科修了、博士(医学)。

九州大学大学院生理学第二講座ポスドク研究員。ドイツ Max-Planck 研究所 ポスドク研究員、アメリカ Baylor College of Medicine 日本学術振興会海外特別研究員、崇城大学薬学部専任講師、福岡大学薬学部助教、2014年から同准教授。

■工学研究科

教授 鶴田 直之

1964年生まれ。九州大学工学部情報工学科卒業、同大学院総合理工学研究科博士課程(前期)修了、博士(工学)。

九州大学大学院総合理工学研究科助手、福岡大学工学部講師・助教授を経て、2006年から同教授。画像認識、ニューラルネットワークに興味を持ち、現在は拡張現実感を含むコンピュータビジョン全般の研究に従事。人工知能学会、情報処理学会、電子情報通信学会、日本神経回路学会 各会員。

■人文科学研究科

准教授 大上 渉

1973年生まれ。佐賀大学理工学部生産機械工学科卒業、九州大学大学院文学研究科修士課程修了、修士(文学)。

佐賀県警科学捜査研究所研究員、福岡大学人文学部講師を経て、2012年から同准教授。日本犯罪心理学会理事。専門は認知心理学、犯罪心理学。

随筆

治療と仕事の両立を実現するために

福岡産業保健総合支援センター
労働衛生専門職（両立支援担当） 三谷 梨紗

執筆者紹介

三谷 梨紗（みににりさ）

大学病院の看護師、大学内健康管理室の保健師を経て、2017年より独立行政法人労働者健康安全機構 福岡産業保健総合支援センター 労働衛生専門職（両立支援担当）。



はじめに

現在、日本の労働人口の約3分の1に相当する約2,076万人が、何らかの病気を抱え、治療しながら仕事をしている現状にあります（図1）。

かつては「不治の病」とされていた「がん」においても、近年の医療技術の進歩により「長く付き合う病気」に変化しつつあり、31万人と多くの方が仕事をしながら通院治療を続けています。

また、労働安全衛生法に基づく一般健康診断の結果、脳・心疾患につながるリスクのある血圧や血中脂質などの異常を指摘される人も年々増加しており、平成29年には労働人口の54.1%に上りました。

「がん」は、高血圧、糖尿病など同様に生活習慣病の一つであり、とても身

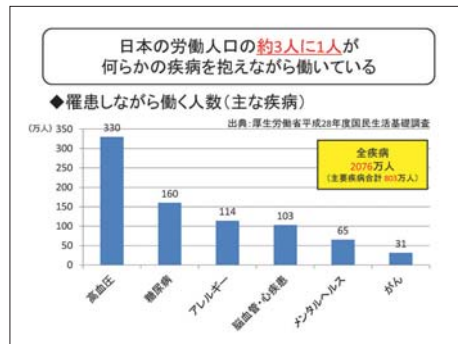


図1 罹患しながら働く人数（主な疾病）

な病気です（図2）。しかし一方で、がんと診断されたときに、34%の方が依願退職したり、解雇されている現状もあります。

また、がんに限らず、病気を治療しながら働く労働者の中には、仕事上の理由で適切な治療を受けることができない場合や、病気に対する労働者自身の不十分な理解、職場の理解・支援体制の不足により、治療の中断や、離職に至ってしまう場合も見られます。

平成25年の調査によれば、病気を理由として1カ月以上の休業者がいる企業の割合は、メンタルヘルスが38%、がんが21%、脳血管疾患が12%でした。また、平成26年の別の調査によれば、従業員が私傷病になった際の適正配置や雇用管理などについて、89.5%の企業が対応に苦慮したそうです。

今後は、高齢化の進行に伴い、労働人口も高齢化が進む中で、病気を抱える労働者はますます増えることが予想されます。そのため、職場や医療機関を含め、社会全体で「治療と仕事の両立支援対策」に取り組む必要があると言えます。

ガイドラインに基づく両立支援の進め方

このような状況を踏まえ、平成28年2月に厚生労働省から「事業場における治療と職業生活の両立支援のためのガイドライン」が公表されました（図3）。ガイドラインでは、関係者の役割、職場における環境整備、個別の労働者への支援の進め方を含めた、職場における必要な取り組みがまとめられています。これは治療が必要な病気を抱える労働者が業務によって疾病を増悪させることがないように、職場において適切な就業上の措置や、治療に対する配慮が行われるようになるためです。

また、平成30年4月には「企業・医療機関連携のためのマニュアル」が追加され、具体的な事例を通して、企業と医療機関が情報をやり取りする際の進め方のポイントが示されています。

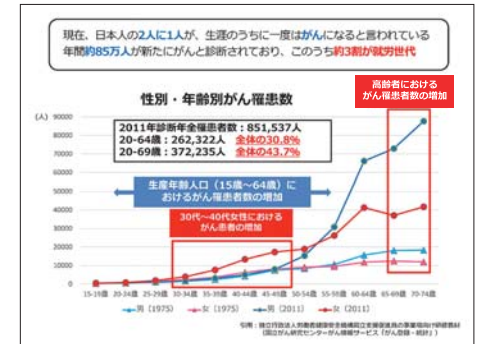


図2 性別・年齢別のがん罹患数



図3 事業場における治療と職業生活の両立支援のためのガイドライン、企業・医療機関連携マニュアルの概要

さらに、治療と仕事の両立支援は、平成29年3月に政府が決定した「働き方改革実行計画」の実施項目の一つとして挙げられ、会社の意識改革と受入体制の整備、トライアングル型支援などの推進、労働者の健康確保のための産業医・産業保健機能の強化を進めることとしています（図4）。

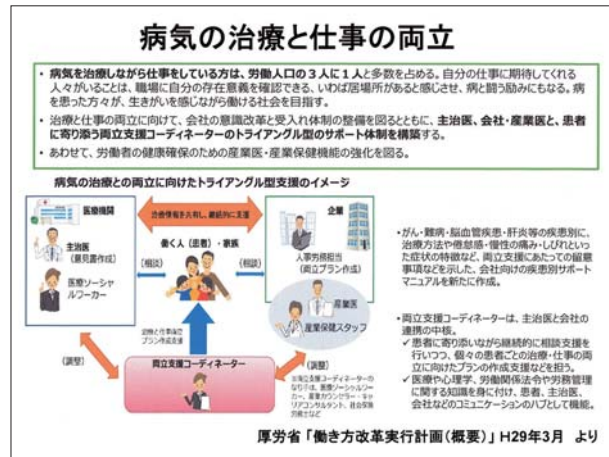


図4 働き方改革実行計画「病気の治療と仕事の両立」の概要

福岡産業保健総合支援センターの役割

福岡産業保健総合支援センター（以下、センター）は、働く人々の健康の保持増進を図るため、企業やそこで働く労働者、産業保健スタッフなどを支援するための機関として設置されています。主な業務は、窓口相談・実地相談、研修会・セミナー、情報提供、調査研究、メンタルヘルス対策支援、治療と仕事の両立支援、地域窓口（地域産業保健センター）の運営です（表1）。

窓口相談・実地相談	産業保健相談員による相談対応。
研修会・セミナー	産業保健に関する専門的・実践的な研修・セミナー。
情報提供	ホームページ、メールマガジン、情報誌などによる情報提供。産業保健に関する専門図書や機器等の貸出。
調査研究	地域の産業保健活動に役立つ調査研究の実施、成果の公表・活用。
メンタルヘルス対策支援	メンタルヘルス対策促進員による個別訪問、研修。
治療と仕事の両立支援	両立支援促進員による個別訪問、研修・セミナー。
地域窓口（地域産業保健センター）の運営	医師会の協力のもとに、従業員50人未満の小規模事業場に対する産業保健サービスの提供。

表1 産業保健総合支援センターの主な業務

センターと同じく独立行政法人労働者健康安全機構（以下、機構）に属する労災病院では、平成26年度から「がん」「糖尿病」「脳卒中（リハビリテーション）」「メンタルヘルス」の4分野における両立支援モデル事業を開始しました。その研究成果を生かして、平成28年度から全国の産業保健総合支援センターでも両立支援事業を開始し、現在、普及・啓発に努めているところです。



図5 両立支援モデル事業から作成した、治療と就労の両立支援マニュアル

センターが行っている治療と仕事の両立支援に関する取り組みは、啓発セミナー、相談対応・個別訪問支援、個別調整支援です。啓発セミナーでは、ガイドラインの説明や、職場での両立支援の進め方や事例などを取り上げています。相

談対応・個別訪問支援では、働き方や働かせ方、社会保険制度などの両立支援に関する全般的な相談の他、社内の体制づくりや規程等の整備、主治医との連携や、両立支援に関する意識啓発のための企業内研修などを支援しています。個別調整支援とは、労働者（患者）が治療を受けながら仕事を続けるための会社との調整を言います。具体的には、労働者本人の同意のもと、主治医と連携をとり、就業上の措置や両立支援プラン・復職支援プランの作成を支援しています。

これらの取り組みを進めるため、保健師や社会保険労務士、理学療法士などの有資格者に両立支援促進員（11人：平成30年10月現在）を委嘱しています。事業場からの相談内容は、労働者の健康管理や就業上の配慮事項、職場の環境整備、主治医との連携について等さまざまだため、その内容に合わせて対応するスタッフを調整しています。

また、センターでは、産業保健相談員（医師、保健師、衛生工学などの専門家）やメンタルヘルス対策促進員（臨床心理士、産業カウンセラーなど）も委嘱しており、より専門性の高い支援を提供できるようにしています。さらに、地域産業保健センターの登録産業医・登録保健師・コーディネーターや、労働局を主体とする「福岡県地域両立支援推進チーム」の関係者とも連携をとり、地域全体でサポートできる仕組みとなっています。

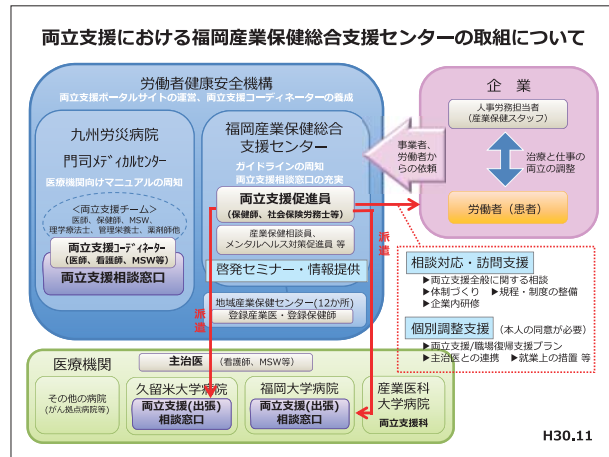


図6 両立支援における福岡産業保健総合支援センターの取り組み

医療機関との連携

平成29年度から、機構に属する九州労災病院と門司メディカルセンターに両立支援相談窓口を開設し、同病院職員に相談対応をお願いしています。両立支援相談窓口は、徐々に認知されてきており、通院のたびに相談に来られる患者さんもいるようです。また、同病院では、脳卒中分野での両立支援モデル事業を実施しており、患者さんの職場や家族、転院先等を含めた丁寧な支援を行っています。その中で、職場への支援が必要なケースは、センターと連携し、職場内の体制づくりなどを支援しています。

平成30年から、労災病院以外の医療機関との連携を開始し、両立支援（出張）相談窓口を開設しているところで、同年6月に県内で初めての両立支援（出張）相談窓口を福岡大学病院に開設しました（写真1～3、図7）。現在、毎月1回、両立支援促進員を派遣しています。同相談窓口では、相談対応と個別調整支援を行っていますが、必要があれば患者さんの職場へ出向くことも可能です。

両立支援（出張）相談窓口は、福岡大学病院の他に久留米大学病院にも開設しており（平成30年11月現在）、開設に向けて準備している医療機関もあります。その中の一つである産業医科大学病院では、復職支援を専門とした「両立支援科」を診療科として立ち上げていますが、そこで行われるミーティングにセンター職員が参加し、症例カンファレンスや両立支援を進めていく上での課題等を一緒に検討しています。

両立支援（出張）相談窓口は、今後、福岡県内のより多くの患者さんにご利用いただけるよう、がん拠点病院を中心に広めていく予定です。

支援を通して

はじめにも述べましたが、高血圧や糖尿病で定期的に通院しながら働いている人がいるように、がんや難病などの治療を続けながら働いている人も多くいます。その人の病気の症状・治療方針や生活環境、職場の風土などはさまざまです。

企業の担当者からは、「がん」や「難病」という疾患名を聞いただけで、どう対応したらいいかわからない、といった声をよく聞きます。しかし、当事者とお会いして話してみると、病気になる前と特に変わらず、就業への配慮が必要ない場合や、少しの配慮で働くことができる場合が多くあります。普段から職場内で

随筆



写真1 福岡大学病院との「治療と仕事の両立支援事業協定調印式」



写真2 左：両立支援促進員 大城悦徳先生（社会保険労務士）、右：福岡大学病院地域医療連携センターソーシャルワーカー 田村賢二氏



写真3 患者さんに説明する大城先生

コミュニケーションをとっておくこと、風通しの良い職場であることが、両立支援を進める上でのカギだと考えます。誰も、いつかは病気になるかもしれません。「何か困っていることはないですか？」とひと声掛けてもらうだけで、当事者は安心すると思いますし、その声掛けが両立支援の第一歩となります。両立支援は特別な取り組みではありません。まずはできることから始めてみませんか。

また、病名が独り歩きしないよう、病気に関する正しい理解を普及させることや、当事者を配慮する上で特別扱いにならないように制度や体制を整備しておく

治療と仕事の両立支援 相談窓口を開設いたしました

病気になったけれど働きたい。

治療のために仕事を休んでいたけど、復職したい。でも不安で...

病気のことを会社にうまく伝えられなくて。

病気を抱えた患者さんが適切な治療を受けながら働けることをサポートする相談窓口です。

院内相談窓口

場 所：新館1階 医療相談窓口
相談員：社会福祉士(ソーシャルワーカー)

福岡産業保健総合支援センター出張相談窓口

場 所：新館1階 医療相談窓口
相談員：福岡産業保健総合支援センターの両立支援促進員(社会保険労務士など)
開設日：毎月第2金曜日 13:00~16:00
※こちらは予約制です。医療相談窓口にお問い合わせください。

問い合わせ先
TEL 092-801-1011(代表)
医療相談窓口 内線:4638-4639

福岡大学病院

図7 福岡大学病院内両立支援（出張）相談窓口の案内

ことも大切です。企業においては、両立支援に関する制度を導入したり、両立支援に関する専門人材を社内に配置した際に受けられる助成金もあります。

一方で、元の業務を行うことで病状が悪化する可能性がある場合は、業務の調整や配置転換が必要な場合もあります。そのときにポイントとなるのが、ガイドラインにある「主治医意見書（医学的な所見をもとに働く上で配慮が必要なことをまとめたもの）」と「両立支援プラン・復職支援プラン（主治医意見書をもとに具体的な配慮内容やスケジュールをまとめたもの）」です。センターで支援したケースの中には、企業と医療機関の連携をサポートし、策定した両立支援プランをもとに治療と仕事の両立を続けている方もいます。

また、医療機関においては、平成30年に診療報酬の改定があり、「療養・就労両立支援指導料」が新設され、がん患者においては「治療と仕事を両立できる治療」を後押しする流れになっています。今後は、他の疾患にも拡大していくことが予想されます。

仕事は生きがいでもあります。病気になっても働き続けられるような環境が整備されてきて治療と仕事を両立している人がいる中、両立ができることを知らずに（知らされずに）離職してしまう人もいます。

センターとしては、今後もさらに普及啓発に努めて、企業、医療機関、支援機関、家庭など、それぞれの立場で両立支援のためのサポーターを増やし、「治療を受けながら安心して働き続けられる社会」の実現を目指したいと思います。

「治療と仕事の両立支援」の意義

【労働者にとっての意義】
疾病にかかったとしても、本人が希望する場合は、疾病を望まされることなく、適切な治療を受けながら、仕事を続けられる可能性が高まる。

【事業者にとっての意義】
疾病による従業員の離職を防ぐことで、人材資源の喪失を防ぐことが可能となる。従業員のモチベーション向上から、労働生産性の維持・向上にもつながる。

【医療関係者にとっての意義】
仕事を理由とする治療の中断や、仕事の過度な負担による疾病の増悪を防ぐことで、疾患の治療を効果的に進めることが可能となる。

【社会的な意義】
疾病を抱える労働者の方々も、それぞれの状況に応じた就業の機会を得ることが可能となり、全ての人が各々活躍できる社会の実現に寄与することが期待される。

図8 治療と仕事の両立支援の意義

＜お問い合わせ先＞
福岡産業保健総合支援センター
TEL：092-414-5264
Mail：sanpo40@fukuokas.johas.go.jp
HP：http://www.fukuokas.johas.go.jp

随筆

環境問題とともに振り返る

福岡大学同窓会有信会理事 辻 勝也

執筆者紹介

辻 勝也 (つじ かつや)

1958年生まれ。一般財団法人九州環境管理協会勤務。技術士（建設部門）、エコアクション21審査員。現在、一般社団法人福岡大学同窓会有信会理事、福岡大学工学部同窓会会長。



はじめに

私は、福岡大学工学部土木工学科・社会デザイン工学科同窓会「福陽会」の会長を拝命しており、併せて工学部同窓会事務局を現在福陽会が行っているため、工学部同窓会の会長も仰せつかっております。また、2007年から社会デザイン工学科が認定を受けているJABEE（日本技術者教育認定機構）の外部評価委員をさせていただいております。大学全体の同窓会「有信会」でも理事を務め、卒業生と大学をつなぐ役割を任めています。

さて、1981（昭和56）年、私は恩師である花嶋正孝工学部教授（現名誉教授）の推薦を受けて、財団法人九州環境管理協会（現在一般財団法人、以下、財団という）に就職しました。ここで無事に38年の勤務を経て、平成最後の今年3月で定年退職を迎えることになります。

私が勤務する財団は、主に環境に関わる調査分析、計画設計、予測解析、公益活動を行う福岡県の認可団体です。私はここでさまざまな環境関連の業務に従事してきました。

平成最後の年に退職を迎える、この人生の大きな節目の時期に、在職期間中ににおける環境問題の変化とともに、それに対応し従事してきた自らの業務を振り

返ってみたいと思います。

就職から昭和末まで

日本で環境問題が注目されるようになったのは1960年代の高度経済成長期で、水俣病、イタイイタイ病、四日市ぜんそく、新潟水俣病と、小学校の社会科では四大公害と習った記憶があります。いわゆる産業公害が深刻化したため、公害対策に関する法律が整備されました。

1970年代は高度経済成長が進み、大量消費、大量廃棄のライフスタイルへと変わり、自動車や生活排水、廃棄物による環境問題が顕在化し、いわゆる都市生活型公害へと変わっていきました。

私が就職した1980年代に入ると、地球温暖化やオゾン層破壊といった地球環境問題が注目されるようになりましたが、当時は今ほど深刻には捉えられておらず、私の中ではその用語が頭に残っている程度でした。

さて、私が最初に行った業務は食品工場排水処理の指導でした。当時、水質汚濁防止法の規制を受けていた事業所の中でも小規模なところは排水処理施設の運転管理のための要員や知識も十分ではありませんでした。また、未規制事業所では簡易な沈殿処理のみで、公共水域に排出される有機質の汚濁水が問題になっていました。排水処理の専門書を何度も読み返し、何とか技術的な指導ができるようになりましたが、机上の知識が現場で通用するのか最初の頃は不安でいっぱいでした。

水処理技術を生かして次に行ったのが、富栄養化して水質が悪化している公園池や城址の掘割水の浄化対策の実験、調査、そして浄化計画の立案でした。福岡で池がある公園といえば大濠公園が有名ですが、ここで区割池を設けて浄化実験を行ったり、池の底泥を固化して塩類の溶出実験を行ったり、現在の大濠公園の浄化システムの基礎的な調査・実験を行ったりしていました。

この他、都市高速道路建設や土地の造成による地下水への影響を監視する業務も行っていました。当時、地下水の流れを論理的に説明するために、山崎惟義工学部教授（現名誉教授）を訪ね、学生時代に戻って「井戸理論」について改めて教わったことを思い出します。

また、廃棄物の処理問題を抱える自治体から依頼を受け、花嶋教授ら学識経験者で構成する検討委員会を設置して、その指導のもとで調査、改善対策を行う業

務にも従事しました。

環境アセスメント

1987（昭和62）年にリゾート法が公布され、日本全国でリゾート開発が進みました。当時はまだバブル景気の中であって、その象徴的なものがゴルフ場の建設でした。山林や丘陵地の森林を切り開くこの開発事業は、自然環境への影響が大きく、また開設後は使用する農薬による汚染が危惧されるなど、事業実施前に環境影響評価（アセスメント）が求められました。

私が勤務する財団は、1974（昭和49）年に九州で初めて環境影響評価を実施した機関で、それ以降の実績も多かったことにより行政からの紹介もあって、数多くのゴルフ場アセスメントを実施することになりました。平成になって私はこのアセスメント業務を行う部署に配属され、担当したゴルフ場案件は十数件に及びました。しかし、バブル景気が崩壊してしまい、そのうち建設されたのはわずかだったと記憶しています。

平成の初め頃には大規模な港湾整備事業が博多湾、周防灘、下関沖の海域で計画されました。人工島整備計画です。それぞれ海面埋立事業の環境アセスメントが実施されることになり、私もその一つに関わりました。

多様な環境の要素を扱う環境アセスメントという仕事は、私にとっての環境の概念の幅を大きく広げることになりました。

環境関連法の制定

平成は環境関連法案が数多く制定された時代でもあります。環境基本法が1993（平成5）年に制定され、これに基づいて、各種リサイクル法（1995～2002年）、環境影響評価法（1997年）、地球温暖化対策推進法（1998年）、循環型社会形成推進基本法（2000年）、グリーン購入法（2000年）、土壌汚染対策法（2002年）等、次々と公布されました。

環境影響評価法の公布に合わせて、都道府県や政令市では環境アセスメント条例が制定されました。私は福岡県の条例アセス第1号となった工業団地造成事業を担当しました。

1994（平成6）年、環境基本法に基づいて国の環境基本計画が閣議決定されました。これを受けて、地方自治体でも環境基本計画を策定する動きが活発になり

ました。この環境基本計画の策定をはじめ、現在も国や自治体の環境行政をけん引して来られているのが浅野直人法学部教授（現名誉教授）です。浅野先生には今も業務上でご指導をいただいております。

2004（平成16）年、私は環境基本計画等自治体の計画策定を行う部署に異動することになりました。当時は計画更新の時期で、また「平成の大合併」の頃であったので、更新や合併後市町村からの依頼で環境基本計画を策定する業務が多く、私も幾つかこの業務に関わりました。

計画を策定するに当たっては、自治体側は“金太郎飴”を嫌う傾向にあり、いかに独自性、地域性を出していくかが求められ、これらに苦慮したことが思い出されます。

京都議定書の発効

1997（平成9）年、京都で国連気候変動枠組条約における第3回締約国会議（COP3）が開催され、「京都議定書」が採択されました。この時の印象は強く、多くの国民は地球温暖化を初めて意識し、家庭や職場の中で省エネルギーに取り組み始めたのではないのでしょうか。

当時の環境大臣（現東京都知事）が流行らせた「COOL BIZ」が流行語大賞になりました。現在、環境省では地球温暖化防止に資する取り組みの国民運動「COOL CHOICE」（賢い選択）を展開しています。

京都議定書の採択・発効を受けて、国はさまざまな事業を打ち出してきました。このうち、NEDO（国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構）「地域省エネルギービジョン策定」、環境省「主体間連携モデル推進事業」、内閣府「先駆的省資源・省エネルギー実践活動等推進事業」に関わりました。

こうした国等の公募事業の業務経験は、後の公益活動部門での業務に生かされることになりました。

未曾有の東日本大震災

2011（平成23）年3月11日、日本を揺るがす大災害が発生しました。東日本大



震災です。私はその日、新幹線の中で流れるニュースで知りました。家に帰ってテレビを見て、津波の恐ろしさに震えたことを覚えています。

私が初めて現地に赴いたのはその年の夏でした。津波で被害を受けた海岸一帯を見た時、また誰一人いない商店街、農村を通った時、大変なことが起きたのだと、現場でないと分からない何とも言えない気持ちになりました。

私が勤務する財団は、設立後間もなくして放射能分析を開始し、その体制を維持していましたので、今回の大震災に伴って発生した福島第一原発事故による緊急時における放射能分析が始まりました。



線量測定の様子

国（林野庁）から福島県内400カ所の森林土壌調査を受託し、初めて福島県郡山市に現地事務所を開設、私も所長として着任しました。当時、現地への進入許可を得るため、被災した市町村や営林署を奔走しました。現場の調査は、地震で崩れた道を回避しながらGPSで調査地点を探し回り、線量測定と土壌のサンプリングを繰り返す作業でした。現地スタッフが滑落する事故や暗くなった山林で道に迷って戻れない等のトラブルもあり、熊との遭遇の恐怖と戦いながら、何とか降雪前に現地調査を終えることができました。

この森林土壌調査の実績が評価され、スギ花粉や特用樹等の放射性物質調査を継続して受託しました。また、環境省からは現地の生活用水源である沢水のモニタリング調査や、公共用水域（河川、湖沼・ダム湖）の水・底質の放射性物質モニタリング調査（現在も継続中）を受託しました。

福島に滞在していた期間中、多くの作業員を動員した除染作業、荒らされた空き家、朽ちていく家屋を数多く見てきました。仮設住宅で暮らす土地の所有者に承諾を得るために幾度かお会いすることもありました。現在は、中間処理施設の建設が進み、汚染土壌の搬入が始まったようですが、被災された住民が一刻も早く帰還されることを願うばかりです。

SDGs とパリ協定

2015（平成27）年後期から、私は公益活動部門へ異動しました。当財団の中にある福岡県地球温暖化防止活動推進センターの運営管理、エコアクション21（環

境省環境マネジメントシステム）の審査、環境啓発イベント企画・運営が主な業務です。

異動したこの年（2015年）、国連持続可能な開発サミットが開催され、「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）」が採択されるとともに、国連気候変動枠組条約第21回締約国会議（COP21）において、2020年以降の地球温暖化対策の法的枠組みとなる「パリ協定」が採択されました。



SDGsは17のゴールのうち環境に関連するものが15ゴールあると言われており、2030年までに世界中が目標達成に向けてさまざまな取り組みを実施していくことになります。また、パリ協定は今世紀の後半には世界全体の温室効果ガス排出量を実質ゼロにすることを求めており、これから社会や経済に大きな影響を及ぼすことになるでしょう。

私は地球温暖化防止活動推進センター職員、エコアクション21審査員としての立場から、SDGsやパリ協定を踏まえ、低炭素社会の構築に向けて市民や事業者に対して指導・助言を行っていく役割を有しており、今、懸命に努めているところです。

おわりに

今や環境問題は地球規模で考えなくてはならない時代です。世界は気候変動と人口増加という大きな二つの問題を抱えています。

地球温暖化を止めるには、これから「脱炭素社会」に移行しなければなりません。そのためにはイノベーション（技術革新）が必要とされ、それと同時に私たちの意識を大きく変換し、それを受け入れる社会にしていかなければなりません。

一方、2050年には世界の人口は90億人を超えると見込まれており、人類が生存していくには地球2個以上の資源が必要といわれています。すでに世界では資源の争奪戦が始まっています。これまでの大量生産、大量消費（廃棄）という一方通行の流れから、資源を循環して再利用し、廃棄量を極限まで小さくするシステ

随筆

ムに移行しなければなりません。

こうした技術革新や社会システムを変える研究とその成果を期待されているのが大学だと考えます。大学には知的な人材と情報がありますし、産官学連携というネットワークがあります。母校である福岡大学がこうした地球環境問題の解決に貢献するリーダー的存在になってくれることを願ってやみません。

随筆

福岡大学指定寮 創立50周年を迎えて

福岡大学指定寮 寮主会会長 隅田 勇治
隅田寮

執筆者紹介

隅田 勇治 (すみた ゆうじ)

福岡大学指定寮の一つ「隅田寮」の寮主。現在、指定寮は男子寮12寮と女子寮5寮あり、合計17寮の寮主による寮主会で会長を務めている。



福岡大学指定寮とは、民間下宿のうち福岡大学の教育方針を理解し、学生さんが学業や課外活動に専念できる生活環境を維持している、大学が指定した寮のことです。2018年、福岡大学指定寮は創立50周年を迎え、同年8月には50周年記念式典および祝賀会を無事開催できました。多くの卒業生が出席してくれたことに感謝いたします。

45年前、私の母が指定寮を始めた頃、私はまだ小学生でした。指定寮全体では約2,000人の学生さんが生活しておりましたが、当時の部屋にはテレビもなく、もちろんエアコンもありませんでした。電話は赤電話が1台玄関に設置しており、電話が鳴れば1年次生が取り次ぎ役でした。お風呂も食事も4年次生から先にとという暗黙の了解があり、1年次生にとって、先輩は絶対的な存在でした。またその頃は苦学生も多く、今とは違いコンビニやカラオケがなかったため、アルバイト先を見つけるのも



指定寮 創立50周年記念式典



寮対抗スポーツ大会



昭和の七隈祭パレード

大変でした。ほとんどの学生は肉体労働のアルバイトで、博多湾の船着き場の荷下ろしの仕事や、国鉄・筑肥線の枕木の取り換え工事の仕事をして生活費に充てておりました。中には学費を稼ぐため、夏休みと春休みを利用して名古屋の自動車工場に季節労働者として出稼ぎに行く学生もおりました。

その時代の学生さんの多くは、親を尊敬し、親に感謝して、入学時には自身の就職先の目標を立てて勉学と部活に励んでいました。また寮生活においても、先輩は厳しさの中にも、後輩と部屋に集まり、将来の夢について酒を酌み交わしながら語り合っていました。情報が少ない時代でありましたので、後輩にとって先輩の経験こそが貴重な情報源でした。その後輩が先輩となり、また後輩に伝えていくことが、寮生において当たり前のことでした。寮生同士の団結力も強く、指定寮対抗の体育大会が行われる時期には、朝早くから寮生全員でマラソンをするなど体力づくりに励んでおりました。七隈祭には指定寮は必ず参加し、各寮の長を生かして企画から運営まで学生同士でコミュニケーションを取りながら楽しく行っていました。

それから時代は流れ、大きく変化を迎える時期がバブル期(1986年～1990年頃)です。学生が車やバイクを親から買ってもらい、仕送りが充分なものになっていきました。また、指定寮も変化の時期を迎え、指定寮はAタイプ(鉄筋コンクリート建て・8畳・ワンルーム型マンションタイプ)、Bタイプ(ベランダ付き・6畳・アパート型)、Cタイプ(木造・4畳～8畳)の全ての寮に、エアコン、電話機が設置されました。改装する寮や建て直す寮が出る中、どちらもできない寮もあり、半分の寮が辞めていきました。学生の趣味・嗜好にも大きな変化があり、趣味は多種多様に広がって多くのサークルができたのもこの頃です。女子学生も

増え、以前とは違った新しい形へと変化した時期でもありました。バブル期は就職がしやすく、ほとんどの学生さんは単位さえ取れば就職できる時代でした。

その後バブル時代が終わると、学生への仕送りが減り、アルバイト中心の生活を送る学生さんが多くなり、中には単位を落としてしまい厳しい学生生活を送る学生もおりました。また、就職においても大変厳しい状況となり、苦勞する学生さんを多く見てきました。

次に変化を迎える時期が、インターネット社会の到来です。2000年代に入ると学生さんもパソコンやスマートフォンを持つようになり、ネットの中でのコミュニケーションを重視するようになりました。情報が溢れバーチャルの世界に夢中になる学生さんが増え、一人の時間を大切にするようになりました。寮生活を送るにあたり、食事や入浴の時間を守り、挨拶をすることは当たり前と、寮主・寮母は思っておりました。しかしこの頃から、学生さんの意識も変化し、寮生活の決まりごとが合わなくなり、指定寮に入る学生さんも減りました。空室が出るようになることで辞める寮があり、指定寮で暮らす学生の数は500人ほどとなりました。私もこの頃から寮主会の役員を務めるようになり、どうしたら学生さんに指定寮に入ってもらえるかと考えるようになり、悩みました。

ある時、学生さんとの関わり方を変える出来事がありました。それは2008年に起きたリーマンショック後の、学生さんの就職活動の変化です。企業が学生に一番求めるものはコミュニケーション能力であり、また協調性やリーダーシップも大事な要素になりました。寮は、人と人との関係の大切さを普段の生活を通じて学べる環境がもともと整っており、挨拶や時間を守ることの大切さを重視してきました。また、近年就職に対する意識が薄れ、学生さんが4年次生になって慌てて就職活動を始めることが多く、なかなかうまくいかないことで諦めてしまうケースも見てきました。真面目で成績が良い学生さんでも就職活動に悩み、エントリーシートに書く内容について相談を受けたこともありました。そのような状況から、人事業務に携わった経験のある寮母、会社を経営している私は、どうしたら学生さんをサポートできるかを考えました。そして、指定寮独自の取り組みとして、就職支援を行うようになったのです。

1年次生には、コミュニケーションの大切さを意識させ、挨拶の徹底、協調性を身に付ける大切さを伝えました。そうすることで、来る就職活動に向けて、企業への自己PR文、志望動機を書くための心構えができると考えました。そして

2・3年次生を中心に、寮で就職の勉強会を定期的に開くようにしました。特に寮母が学生さんに寄り添い、積極的に教えることで、就職意識が高まり、希望する会社から内定をもらう学生さんが増えて感謝されています。さらに、本年度から大学の就職・進路支援センターと寮主会が協力し、指定寮の学生のための就職セミナーを開くことになりました。さまざまな方向からご支援いただけることに、寮主・寮母も心から感謝している次第です。

これまでは、時代とともに変化してきたことを書かせていただきましたが、今も昔も変わらない学生の姿もあります。それは、相手の立場に立って物事を理解できる学生はいつの時代にもいて、そのような学生は寮生活や大学での学びを通して大きく成長していきます。そして大学に感謝し、就職していきます。全員が自分の力でそうなるわけではありませんので、私たち指定寮の寮主、寮母は困難を抱える学生さんを少しでも後押しできるように努力してまいります。

最後に、寮主も世代交代の時期にあり、若い人に引き継がれていっております。50周年記念の際に寮主会として発信した言葉にあったように、福岡大学指定寮は、半世紀を振り返って、福岡大学関係者、諸先輩方が積み重ねてきた伝統を継承しつつ、今後も新たな発想、新たな取り組みにチャレンジしていきます。学生さんにとって心地よい生活環境を整え、学生さんが勉学に努められるよう、福岡大学の「全人教育」の精神を支えに前進してまいります。



一泊研修



講師を迎え、就職のためのガイダンス

随筆

東日本復興夏期セミナーを通じての成長

福岡大学法学部経営法学科2年次生 小森 友暉

執筆者紹介

小森 友暉 (こもり ゆうき)

1999年生まれ。熊本県宇土市出身。福岡大学法学部経営法学科2年次生。
東日本復興夏期セミナーに2回参加。学生ボランティア団体「災害復興架け橋隊」で副代表を務める。



大学に入学して2年、新しいことに積極的に挑戦するチャレンジ精神と物事を多面的な視点から捉える力が身に付きました。大学での授業やさまざまな課外教育プログラムを通じてたくさんの人と出会い、大きく成長できました。

私自身の成長に大きくつながったのは「東日本復興夏期セミナー」です。セミナーに参加した理由は、熊本地震での経験があったからです。

2016年4月14日、最大震度7の熊本地震が発生しました。当時高校3年生だった私は、熊本県宇土市の実家にいました。夜中に地震が発生したこともあり、暗くて何も見えない状況の中、何とか近くの保健所に避難しましたが、たびたび続く余震から不安な気持ちが募り、朝までほとんど眠ることができませんでした。夜が明けても電気やガス、水道が止まっており、いつ元の生活に戻れるのか分からず、不安な日々を過ごしました。そのような状況の中、東北の方から「東日本大震災の時に助けてもらったから」と、たくさんの支援物資や手紙が避難所に届きました。それに元気をいただき、とても救われました。東日本大震災が起きた時、私は小学6年生でした。東北で大きな地震があり、津波が起きて甚大な被害があった事実をテレビでただ呆然と見つめていたことを記憶しています。熊本地震が起きて元の生活に戻れたのは、東北を始め全国からの支援によるものだと思

います。そこで、東日本大震災のことを学び、ボランティアを通じて恩返しをしたいと思い、東日本復興夏期セミナーに参加しました。

【東日本復興夏期セミナーとは】

東北の復興へ向けた支援を行うとともに、防災および災害支援について学習する福岡大学の課外教育プログラムです。このセミナーでは、学部・学年を超えて防災に関する知識や現地の復興状況を調査・学習するとともに、事前研修ではグループワークを重ねて行動力や統率力、協調性を身に付けます。また、現地での活動を通じて、東日本大震災の当時の状況や復興の様子を学びます。現地での活動スケジュールは班員で話し合い、宿泊場所も自分たちで決める等、学生が主体的に活動します。そして、現地で学んだことをまとめ、12月に学内で行われる報告会で発表します。

セミナーに初めて参加したのは、1年次の時です。5回にわたる事前研修では、東北の現状、私たちに何ができるのかを話し合いました。ボランティアをする上で心掛けること等も学習して、5日間の現地研修に行きました。

1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
福岡空港出発	ミガキハウス出発	ミガキハウス出発	ミガキハウス出発	仙台空港出発
仙台空港到着	GRA 到着	GRA 到着	旧山下駅到着	福岡空港到着
旧山下駅到着	GRA で農作業	GRA で農作業	山元町花釜地区清掃	
語り部ツアー	GRA での講話	GRA で農作業 つばめの杜夏祭り準備の手伝い	地元の方の講話	
ミガキハウス到着	ミガキハウス到着	二班が合流して夏祭りの手伝い	GRA で農作業	
ミガキハウスでの講話	BBQで山元町の方と交流	ミガキハウス到着	GRA 出発	
			A班と合流して食事	

2017年東日本復興夏期セミナー 現地でのスケジュール

活動の拠点は、宮城県の東南部に位置する山元町でした。そこで、震災当時のことを、語り部の方にお話しいただきました。また、イチゴを育てている農業生産法人 GRA での農作業、地域のお祭りの手伝いをさせていただきました。最初に語り部の方と合流するために、山元町の旧山下駅に行きました。そこには山元町で亡くなった方の名前と年齢が刻まれた慰霊碑があり、住民に避難を呼び掛け

て亡くなった消防士や警察の方等、多くの方が命を落とされたことを知りました。また、活動4日目の午前中、旧山下駅周辺の山元町花釜地区で清掃活動を行いました。その時、石が丸いことに気が付きました。内陸では角張った石を見掛けることが多いのですが、ここには海や川の近くにあるはずの丸い石があり、津波がここまで来たことを改めて認識しました。



山元町にある慰霊碑

5日間の現地研修のうち3日間、「ミガキハウス」というゲストハウスに泊まりました。そこは山元町にある宿泊施設で、古民家をリフォームしてできたところです。夜はミガキハウスの職員の方と一緒に、山元町で栽培されたイチゴを使った料理のアイデアやミガキハウスがより良くなるために何をすべきか等について話し合いました。このセミナーに参加した学生は、リーダーを始め班員も常に先を見据えた行動や考えを持っていることを肌で感じ、1年次生だった私は先輩方のようになりたいと強く思いました。



ミガキハウスで職員の方から講話を聞く

福岡に戻ると、年末の報告会に向けて発表の準備を行い、報告会を無事に終えて全ての活動を終了しました。

しかし、宮城県に5日間行って東日本大震災について学んだことをここで終わらせたくないという思いが募り、被災地の支援を行うボランティア団体「災害復興架け橋隊」に入りました。

【災害復興架け橋隊とは】

約5年前に東日本復興夏期セミナー（当時：東日本災害ボランティア派遣隊）に参加した学生が、福岡でも継続して支援活動をしたという思いから立ち上げた団体です。主に、地震や台風等の自然災害により被害にあった地域でボランティア活動をしたり、その地域の食べ物の販売会を行ったり、加工して学食のメニューとして出したりなど、直接的・間接的な被災地支援を行っています。

2017年7月に起きた九州北部豪雨。翌年4月、架け橋隊のメンバー3人で被害のあった朝倉市杷木町に行き、家に堆積した土砂をかき出す作業を行いました。土砂は床下から天井まで堆積しており、その光景に言葉を失いました。テレビや新聞等のメディアを通じて、豪雨で被害にあった事実は知っていました。しかし、豪雨から1年経った段階でも、山の土砂が崩れて数多くの民家に土砂が堆積しており、至る所で重機やトラックが動いているという現状は知りませんでした。住民のほとんどの方は新しい家を建てて暮らしていますが、写真や洋服など思い出が詰まった大切なものが今も土砂の中にあります。当日ボランティアに来ていた地域の方と3時間活動して、玄関の土砂を何とかかき出せたという状況でした。活動内容は、かき出した土砂を一輪車に入れて運ぶという作業でした。



作業した家（外観）



作業した家（内観）

その日は暑かったこともあり、作業はきついものでした。しかし、土砂をかき出す過程で自転車を出すことができ、それを見た子供のうれしそうな笑顔を見て、

一気に疲れが吹き飛びました。日本各地で自然災害により被害が起きて、年月が経つとともに少しずつ忘れられてしまう現状があります。架け橋隊でのボランティア活動を通じて、大学生だからこそできることはないかと考えました。そのため、もう一度東日本復興夏期セミナーに参加し震災の理解を深めて、東北の復興の様子を学びたいと思いました。そして、東北の震災当時の状況や現在の状況を始め、全国の被災地の現状を発信することで、学生の防災意識の向上に貢献できるのではと考えたのです。その後、学生たちが関心を持ちボランティアに行くことになれば、間接的ではありますが、九州北部豪雨の被災地・朝倉市の復興の力にもなれるのではないかと思います、2回目の参加を決めました。

1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目
福岡空港出発	石巻市の小学校での語り部	東松島市での嵯峨溪の遊覧船	全体ミーティング	山元町地域交流まつり手伝い	GRAでの農作業	最終ミーティング
仙台空港到着	大学生との意見交流					東北学院大学生による語り部
女川町での語り部	さんさん商店街での語り部	大高森での登山語り部	山元町での語り部バスツアー			仙台空港出発
女川町でさんまこぶ巻き作り体験	ホテル観洋の方による語り部	車窓語り部	地域の方・大学生とBBQ			福岡空港到着

2018年東日本復興夏期セミナー 現地でのスケジュール

活動場所は宮城県南三陸町、女川町、石巻市、東松島市、山元町でした。東日本大震災を経験された語り部の方のお話は、どれも印象に残るものでした。その中でも、特に印象に残った話があります。それは、宮城県石巻市立の小学校で聞いた、宮城教育大学の千田先生の話です。

その小学校は宮城県の東側に位置しており、釜谷地区にあります。1873年に開校した同校は横長の校舎が特徴的で、地域の方にもとても愛されていましたが、現在は閉校して被災した校舎は震災遺構として残されています。

小学校では東日本大震災により、84名の方が命を落とされました。地震が発生した当時、児童と教職員は校庭に避難しました。その後、30分後に津波が来るとい連絡が入り、「小学校の裏山にすぐに避難するべき」という意見が出ました。しかし、小学校は河口から約5km離れており、「今まで津波がここまで来たこ

とがないから避難をする必要はない」という意見との対立で避難が進まず、結局地震発生から50分後に小学校の近くにある高さ7mの小高い地形に避難を始めました。その直後、川を伝ってきた10m弱の津波が、避難している最中の児童の列を襲いました。その周辺にいたほとんどの人が津波に飲み込まれ、児童4名と教職員1名だけが津波で山に押し上げられたことにより奇跡的に助かったと聞きました。なぜ裏山への避難がためらわれたのかというと、山は急斜面で当時雪が降っていたこともあり、けがをする恐れがあると懸念する意見が上がっていたからだそうです。

私は現地研修が終わり、福岡に戻ってからさまざまな資料に目を通しました。結果として最初から山に登っていたら助かった命もあったという意見があります。実際、私はその場にいなかったため判断の是非は分かりません。しかし、地震や津波を想定した訓練をもっとしておけば、結果は変わったのではないかと感じました。また、非常時は精神的な余裕がなくなり、正常な判断は困難だと言われます。日頃から災害に関する知識を身に付けて、住んでいる地域の避難場所を確認しておく必要があると感じました。



被災した小学校（教室の様子）



被災した小学校（校舎の外観）

2回目の東日本復興夏期セミナー。現地研修の7日間で、東日本大震災についてより一層理解を深めることができました。震災から7年が経ち、復興が少しずつ進んでいる様子も見ました。それらを通して、震災の事実を後生に伝えていくことが、今を生きている私たちにできることだと改めて感じました。

また、2年次生となった私は、初めて班のリーダーとなり、メンバーをまとめること、自分の意見を理解してもらうことの難しさを経験しました。しかし、リー

ダーを経験したことで、人前に立ち、話すことの苦手意識がなくなりました。私はメンバーの前に立って皆を引っ張るリーダーはできませんでしたが、メンバーと協力しながらメンバー全員で作る東日本復興夏期セミナーにできたのではないかと感じています。貴重な経験をさせてもらったことに感謝しています。

大学での2年間、人生で初めての経験や多くの人との出会いがありました。大学入学前は新しいことに興味を持って、やる前からどうせできないと勝手に思い込んでしまう、消極的な自分がいました。しかし、大学1年次の春、学内の掲示を見て応募した東日本復興夏期セミナー。学内や現地での研修を通じて尊敬できるメンバーと出会い、刺激を受け、自分なりに一歩前に進むことができました。卒業まであと2年、色々な経験や人との出会いを大切に、後悔のない日々を過ごしていきたいと思います。

随筆

自分の思いを行動に

～イギリスで出汁文化を広めることに挑戦～

福岡大学人文学部英語学科4年次生 荒井 智子

執筆者紹介

荒井 智子（あらい ともこ）

福岡大学人文学部英語学科4年次生。熊本県出身。1年次から学内外のさまざまな国際交流プログラムに参加。アメリカへの海外研修、フィリピンへの短期留学を経て、2018年8月から1年間イギリス・リーズ大学に留学中。



不可能だと周りに思われていることでも、本当に不可能であるかは行動に移すまで分からない。厳しい状況の中であっても自分の思いを行動に移せるか否かで、身近なところでの小さな変化も、さらには社会を変えるような大きな変化も、起こせるかどうかが決まる。このことを、私はイギリスで実感しました。

私は現在、交換留学生として福岡大学の協定校であるイギリス・リーズ大学で、現地の学生と一緒にビジネスを学んでいます。海外に長期滞在することは幼い頃からの夢で、外国で日本の文化を広めたい、ビジネスを学んでみたいと思い、留学することを決めました。

イギリスといえば、どのようなイメージを抱くでしょうか。食事があまりおいしくないと聞いたことがある人もいないでしょうか。私もその一人で、持って行く荷物が限られる中、日本食を大量にスーツケースに詰めてイギリスに来ました。こちらに来て半年ほどが経ちましたが、実際にはイギリスの食事もお金を出せばおいしいものが食べられるように感じています。このようなイギリスの食の背景もあって、私の留学の目的の一つに「日本の出汁文化をイギリスに広

め、食を豊かにする」がありました。なぜ出汁なのかというと、これまで海外から帰国して久しぶりに日本食を食べるたびに、出汁の効いた味噌汁に感動していたからです。また、私の父が、地元である熊本県南小国町の町おこしのために地域の椎茸を使った出汁を商品化し、私は特にその出汁が大好きでした。

しかし、日本人の知人などに「海外の人は魚の匂いが嫌いだから出汁を広めるのは難しいよ」と、何度も言われました。それでも、自分の“やってみよう”という思いを大切にしながら出汁文化をイギリスで広めることに挑戦しようと思い、イギリスに到着後、まずは出汁を最も使うであろう味噌汁を飲むことによって、イギリスでの出汁の市場調査を始めました。リーズで有名な寿司屋に行き味噌汁を注文したり、イギリスで購入できるインスタント味噌汁も何種類か試してみたりしました。結果は、どの味噌汁も日本とは全く異なる味でした。外国にある日本食レストランの料理は現地の味覚に合わせているから本来の味とは異なる、と以前聞いたことがあったため、やはり知人が言うように、イギリス人は魚などの匂いがする出汁が苦手だから、味噌汁の味が日本とは異なる、出汁の効いていない薄味になったのかと想像し、出汁文化がイギリスで広がる可能性の小ささを感じました。しかし、以前私が日本でアルバイトをしていた飲食店や旅館で、外国人のお客さまが出汁の効いた味噌汁を飲んで「delicious」「deep taste」「I like miso soup」などと喜んでくれたことを思い出しました。知人に“イギリス人にとって、出汁は魚の匂いが強いから嫌いだよ”と言われたことを頭の片隅におきながらも、この訪日観光客の反応に期待を持ち、父の協力もあって南小国町で販売している商品を使い、出汁文化を広めていくことを決意しました。

ちょうどその頃、リーズ大学に来ている他の日本人学生から、日本文化を紹介するイベントを開催するから運営委員として参加してくれないかと誘われ、迷わず引き受けました。結果的にそのイベントが、出汁をアピールする最大のチャンスになりました。このイベント「Japanese Sakura Festival in Leeds (リーズ桜フェスティバル)」はクラウドファンディングで資金を調達し、リーズの人々に日本文化を体験してもらい、もっと日本のことを知って好きになってもらおうと、日本人学生11人による運営委員会で企画・準備し、40人のボランティアスタッフを集めて開催しました。イベント開催の4カ月前から準備を進めていましたが、その間は大学の勉強、現地の友人との交流、そして就職活動もしていたためマル



多くの来場者で賑わった会場
収益の全額を日本赤十字社に寄付する予定



運営委員の仲間と一緒に



出汁を説明する筆者

チタスクに追われ、毎日時間が足りない状況でした。しかしこれを何とか乗り越え、当日を迎えることができました。

2018年12月8日に開催したこのイベントでは、日本食や日本酒の提供、日本から取り寄せた商品の販売、日本のお祭り体験（射的・ヨーヨーの出店）、茶道や書道の体験、着物・浴衣の着付けを行い、さらに太鼓や民謡、三味線、空手のパフォーマーの方をお招きして演奏・演舞を披露することができました。来場者は1,000人を超え、地域の方はもちろんのこと、電車で2時間かけて来てくださった人もいました。日本文化を体験して満面の笑みを浮かべたり、目を輝かせたり、日本についての質問をスタッフにしたりと、とても楽しまれているようでした。

そして、会場の一角に、出汁を試飲・販売するブースを設けました。日本への留学経験のある人でさえ出汁について知らない状況であったため、当日は出汁の説明を私が自ら行いました。例えば、日本食には出汁が欠かせないこと、出汁は鰹や椎茸、うるめ鰯などを使っているため体に良いこと、さらに出汁パックを使った料理や調理方法などを一から説明しました。これまで日本でも自分の言葉でお客様に商品の説明をしたり、販売促進を行ったりなど一切したことがなかったため、それを英語でするとなるとなおさら私にできるのだろうか、興味をなくしてブースから離れていってしまうのではないかと、最初は心配していました。しかし、南小国町の出汁商品を製造する会社の方にも多くのアドバイスをいただき、一生懸命、笑顔を忘れずに多くの人に話そうと決意して取り組みました。決して流暢とは言えない英語での説明でしたが、多くの人がブースに集まってくれて、列の後方からも話を聞く人がいるほどでした。また、「試飲がおいしかったからもう一杯ほしい」という人、「日本に旅行して食べた味だ!」「やっと見つけれられた!この味!」という人もいて、イギリスでも日本の出汁の良さに共感してくれる人がいるのだと確信できました。さらに「うまみ」について逆に私に熱弁してくださる人や、「家で昆布などを使って自ら出汁を作っているよ」という出汁の大ファンの人もいました。イギリス人をはじめ、中国人、タイ人など、出汁パックを煮出したものを試飲した多くの人が、出汁の味、日本の出汁文化に感動していました。そして、準備していた出汁パックも完売することができました。このように、出汁はイギリス人の口には合わないのではと言われてながらも、自ら現地で確かめたからこそ、実は好かれる味であることが判明しました。実際に確かめてみなければ分からないことは、このこと以外にも多くあると思います。日本の出汁一つをとっても、イギリスでこんなにも需要がある。きっと日本には、イギリス人をはじめ多くの外国人が好むものがまだまだあると、強く思うようになりました。

2020年には東京オリンピックが開催されます。この機会を生かすためには皆がもう一度日本の良さを振り返り、それを発信していくことが大切だと思います。日本人にとって当たり前のことでも、外国人の感動を生み出すことができる。私たちが外国人にウケないと思っていることでも、彼らにとっては興味深く関心を集めるものがまだまだあるはずです。世界中が注目するオリンピックは、日本の

まだ知られていない部分をアピールする絶好の場になると思います。私も英語を話せることを生かし、福岡や地元・熊本のアピールにつながることを何かできないか、これから探していきたいと思っています。

私のイギリスでの留学生活は、まだあと半年あります。イギリス人に出汁文化が受け入れられると実感できた今だからこそ、これからもっとイギリスで出汁を広めたいと思っています。個人でも中心街にマーケットを一週間ほど出店できるシステムを使って出汁を試飲販売したり、試飲した人から集めた声を日本食レストランやアジアフードのお店に紹介したりしたいと考えています。また、リーズ桜フェスティバルで出会ったイギリス人料理家の人と一緒に、出汁を使ったイギリス料理のレシピを考案することも目指しています。

外国で出汁文化を浸透させるにはとても時間がかかると思いますが、将来的にスーパーで出汁が普通に売られるようになること、そして出汁が家庭で使われるようになることを信じています。また、イギリスの日本食レストランでもイギリス人が感動するような、日本ならではの出汁の効いた味噌汁の味が今後再現されるようになったらという期待も持っています。出汁文化を広めることでイギリスの食に変化を起し、イギリスの料理はおいしいと世界中の人々が思うようになる。これが、私の今の夢です。

最後に、私は福岡大学で英語を専攻しています。これまでコミュニケーションの道具である英語を学び、それをどう使っていくか悩んでいましたが、今はこれまで学んできた英語を最高の道具として、自分のやりたいことに取り組むことができている。たとえ流暢でない英語であっても、一生懸命に話せば、多くの人が耳を傾けてくれる。英語を話せることで、可能性は大きく広がる。当たり前のことですが、それを実感し、再確認することができました。

イギリスに来る前に、海外研修や短期留学でアメリカ・フィリピンなどにそれぞれ1カ月ほど滞在しました。その際、海外では日本は“アジア”という括りでしか見られていないと感じました。しかし今回、リーズ桜フェスティバルでの経験を通して、アジアの中でも「日本が好き」という人が多くいることを知りました。日本好きの人から逆に日本の良さを学ぶこともありました。私はイギリスにいるからこそ、これまで気付いていなかった日本の良さをもっと発見していき

たいと思います。このことが観光立国を目指す日本の魅力を、海外の人に発信していくことにもつながると思います。



友人たちとハロウィンパーティ



福岡大学に留学していた友人とリーズ大学で再会

随筆

日本での生活を通して成長した自分

福岡大学法学部法律学科2年次生 レ デイン チョン

執筆者紹介

Le Dinh Trong (レ デイン チョン)

1990年生まれ。2013年7月に来日。現在、福岡大学法学部法律学科2年次生。法学部では「法律特修プログラム」を受講。日本語・英語以外に、韓国語にも関心を持ち、履修している。



私は1990年にベトナムの北部に位置するタインホア省に生まれました。首都・ハノイからバスで3時間かかるところにあります。ベトナムの短期大学に進学して、土木を専攻しました。学費は全額両親から出してもらい、勉強だけに集中して3年間の学生生活を過ごしました。アルバイトはせず、社会活動にもあまり参加せず、内向的な人間でした。卒業して社会的スキルがほぼゼロの状態就職しました。一年ほど土木関係の仕事をしていましたが、職場では人間関係がうまくいかず、実際の仕事と学校で学んだことが直結してなくて難しかったです。ベトナムには多くの日系企業があり、テレビ等で見ていて私も日本人と働いてみたいと思いました。2012年に日本語を学び始め、2013年7月に福岡に来て日本語学校に入学しました。初めて日本に来ましたが、景色や道がきれいの人々が優しく、本当に暮らしやすい国だと感じました。



今、アルバイトは3つ掛け持ちしている

来日して2週間後、荷物の仕分けのアルバイトを始めました。初めの頃は、周りの人がする通り、真似することしかできませんでした。また、ベトナムでは、“おはようございます”“すみません”“ありがとうございます”など挨拶する習慣がなかったので、それができるまでには結構時間がかかりました。日本で暮らすからには必要最低限の日本語を理解する必要があるということが分かってきました。それをきっかけに、学校や日本人の友達から一生懸命日本語を学びました。給料が徐々に上がってくると、もっとできるようになってもっと給料がほしいという意欲が湧きました。

日本語学校では1年9カ月勉強しました。初めて接する日本人は先生方でした。先生方を通じて、日本人のイメージを刻んでいきました。法律やルール、マナーを全く知らうとせず頑固だった私は、先生方からしっかりと指導を受けました。それまでの困難な生活から、徐々に順調に進むことができました。本当にありがたいです。勉強やアルバイトの仕方が分かるようになって、一層努力するようになりました。

その後、日本語とベトナム語の通訳を学ぶ専門学校に入学しました。通学時間が長くなり、アルバイト先も変わって、世界がもっと広がりました。日本事情や経済学、ビジネスマナーなどの本を読むようになり、主体的に勉強することは、日本語学校と違う点でした。知識をたくさん身に付けて、人と話したり相談したりして、会社の運営方法や人事システムもある程度分かってきて、やる気満々の日々を過ごしていました。学校ではグループワークやプレゼンテーションなどもどんどん経験し、コミュニケーション力が上がっていきました。他にも、課外活動や学習旅行などを体験できました。学習旅行では都市を離れて田舎生活を体験し、日本でも会社勤めしていない、自由に過ごすような生活もあるのかと驚きました。日本の田舎を見て、故郷・ベトナムのことを思い出しました。

2015年の年末、初めてベトナムに一時帰国することになりました。久しぶりに会った両親が「成長したね」と言ってくれました。ちょっとうれしかったです。ベトナムに帰っていた間、どうやって日本はあんなに発展できたのだろうか

ずっと考えていました。自国もそういう発展をするためには何をすればいいのだろうかという思いが頭にありました。将来、ベトナムの皆を何とか助けられるようになりたいと、日本に戻ってから思い切り頑張ろうと思いました。

その頃、バイクを買って、移動手段を自転車からバイクにしました。通学時間を短縮でき、時間をコントロールできるようになりました。勉強とアルバイトの時間のバランスがとれ、両方とも良い状態が続きました。

2016年は、進路決定でとても大切な一年になりました。日本で進学するか就職するか、ベトナムに帰国するかという、3つの選択肢がありました。日本で暮らせばもっと自分の能力を伸ばせるかなと思い、進学することにしました。福岡大学にチャレンジしたいと思った時、少し難しいのではと皆から言われました。でも、私自身は将来のためにどうしても進学したいと考えたので、2016年5月から説明会に参加したり願書を準備したり、先生方に面接の練習をしてもらったりしました。当時は、人生で一番不安な期間でした。そして受験の結果、二つの大学から合格通知書ももらいました。人生がもうワンステップ上がると思いました。学生や卒業生が多くて人脈が広がると思って福岡大学を選び、2017年4月に入学しました。



日本のお母さん代わりの方と入学式にて

新生生の留学生66人のうち、法学部の留学生は私一人でした。日本人学生についていけるか、どういう勉強をすればいいか、日本語力は大丈夫かと不安が続いていました。今までより何倍も頑張らないといけないという意識で過ごしていました。1年次生の時、法学部の基礎ゼミに入りました。話し方や資料の集め方は、クラスメートや先生に詳しく教えてもらいました。段々と学生生活に慣れてきて、前期と後期の単位は全て取ることができました。1年次の前期は、アルバイトをほとんどしませんでした。生活費はギリギリでしたが、勉強に集中できたので成績も良く、うれしかったです。時間が経った今は、勉強とアルバイトを両立できるようになりました。

2018年は、さまざまな目標を達成できました。一つは、博多祇園山笠に参加できたことです。団体規律やチームワークなどを学びました。ベトナムでは先輩後

輩といった概念はあまりなかったので、社会人になる前に年齢を問わずいろいろな先輩方から学ぶことは大事なことだと分かりました。また、山笠では若いうちから精神力や体力をしっかりと鍛えておかなければなりません。本当に役に立つ体験ができました。

今、大学やアルバイト以外の活動として、在福岡ベトナム総領事館の青年部の活動もしています。日本人との交流イベントを企画したり、在福岡ベトナム人のお世話をしたりしています。今年は、法律に関する試験や資格などにも挑戦したいと思っています。その後、日本で働くために就職活動を始めることを予定しています。学んだ法律の知識を生かして、福岡に住む外国人たちを支援したいという目標を持っています。

日本に来て、もうすぐ6年になります。日本人とかベトナム人とかに関係なく、勉強もアルバイトも頑張っていて、自分を磨くことができています。先輩後輩の概念を知って、今はベトナムに帰った時にも年齢に関係なく、周りの人は私に色々なことを教えてくれる先輩だと思って接するようになりました。また、日本人にベトナムの文化を紹介したり、ベトナム人



日本人の友達と登山



福大生ステップアッププログラムの一環で山笠に参加



九州に住むベトナム人のイベントに参加

の後輩たちの成長を支援したりしています。今後は文化交流だけでなく、技術面についても、日本とベトナムの架け橋になりたいです。2019年、平成の時代が終わり、新しい時代を迎えると、さまざまな新しいことが動き始めると思います。若者である私達は、活気ある社会にするために、もっと力を出していくべきでしょう。

随筆

「考え」のその先へ

福岡大学附属大濠高等学校 3年生 矢嶋 優奈

執筆者紹介

矢嶋 優奈 (やじま ゆうな)

2000年生まれ。福岡大学附属大濠高等学校 3年生。「NPO 法人アジア太平洋子ども会議・イン福岡」にて、2017年11月～2018年 8月まで活動。

「どんな世界を創り上げたいか」

小学生の頃から、このような質問をされるといつも決まり文句のように「平和な世界にしたい」と答えていました。何が自分にできるのか考えることもなく、私にとって「平和」とは漠然としたイメージでしかなかったにもかかわらず。

私は「アジア太平洋子ども会議」という国際的な人材の育成を目的としたプログラムに参加し、その活動の一環として2018年春にネパールへ行ってきました。世界情勢に興味を持っていた私は、自分の目で世界を見てみたいと思ったのです。このプログラムの主な活動は「高校生がネパールの問題に対して、どのような活動ができるかを考え、企画したことを実際に現地で行ってみる」というもので、それを私達は「現地プロジェクト」と呼んでいます。私はこのプログラムの11人のメンバーと共に、ネパールの子どもの栄養不足が低身長・低体重をもたらしているという現状に着目し、栄養素に関心を持つことが栄養状態の改善につながると考えました。そこで私達はネパールの子ども村で、事前に準備していた栄養素



ネパールのカトマンズにある子ども村

に関するクイズや替え歌を楽しみ、ジャガイモの種芋植え活動を行うことで、子ども達と一緒に栄養素に関する知識を深めていきました。反省点は数多くありましたが、帰り際、現地の子どもが栄養素の替え歌を口ずさんでいるのを耳にしたことから、「栄養素について関心を持ってもらう」という本来の目的が達成できたと感じ、ひとまず満足しました。この時、私はまだ自分の考えの甘さに気付いていませんでした。

現地プロジェクトを終え、後日、私はお菓子を買いにお店が立ち並ぶ商店街のような通りに行きました。お菓子を買って店を出ると、ネパール人の親子と目が合いました。すると、父親に何か言われた男の子がこちらに来て、私に対してあるジェスチャーをしました。

「お腹が空いているからそのお菓子が欲しい」

お腹を手でこすり困った表情をしながら、私のお菓子を指さす男の子。私はただただ、自分の目の前で起きている出来事を理解できず、また、こちらを見ている男の子の父親の視線が恐ろしく、気が付くと首を横に振っていました。

「I'm sorry.」

私がそう言うと、男の子は冷たい視線で私をにらんで行ってしまいました。日本に帰国してからも、その男の子の顔が頭から離れませんでした。そして、色々なことを考えました。

「私は一体ネパールに何をしに行ったのだろう」「目の前にお腹を空かせている男の子がいたにもかかわらず、なぜお菓子をあげなかったのか」「いや、以前『物を与えると子どもがお金を稼いで生活する術が身に付かなくなる』という話を聞いたことがあった」「自分には親が子どもにやらせているようにも見えた」「お菓子をあげなくてよかったのではないか」「いや、それでもあげるべきだったのではないか…」

私は多くの人に「あなたならどうするか」という意見を求め、何度も考えました。しかし、いまだに答えは出ていません。考えれば考えるほど分からなくなります。ただ一つははっきりしたことは、私は「平和な世界にしたい」と言っていた小学生の頃の自分とほとんど変わっていなかったということです。

確かに、このようなプログラムに参加し、何か行動を起こしたという点では口先だけの小学生の頃とは違います。しかし、世界情勢に対する興味からプログラムに参加しながらも、常に自分が世界情勢について考える姿勢でいたかと問われ

ると、そうではありませんでした。ある程度定められた活動を、定められた場所で、定められた時間内で行う。それで満足している自分がいました。発展途上国で物乞いがあるというのは、よくある話です。なぜそのことについて調べておかなかったのか。考えておかなかったのか。

思いがけない時に思いがけない出来事が起こると…。首を横に振ることしかできない自分がいました。もちろんそこには明確な「あげることができない理由」などありませんでした。ただ、考えが乏しいために何も思いつかなかったのです。

私は、ネパールで一人の男の子に出会い、自分の考えの甘さに気付かされました。いくら行動を起こしたところであらかじめ定められた範囲の行動だけで満足し、それ以上のことを考えなければ、その行動もその後につながらない、無意味なものになってしまいます。

そのことに気付いた私は帰国後、学校の文化祭でこの体験を基に「自分ならどうするか」について考えてもらうプレゼンテーションを行いました。これは、私自身が自分の体験を考え直す良い機会となりました。このように、「自ら調べ、考え、次につなげる」という行動を起こしたことが、このプログラムの中で自分が一番成長できたことだったと思います。

「どんな世界を創り上げたいか」

今でも私はこの質問に対して、「平和な世界」と答えます。しかし、ただ漠然と答えるだけでなく、これからは「平和な世界」を創るために自分がどのような方法で貢献できるかを常に考え、行動したいと思います。



ネパールのボカラで見た朝日

随筆

世界への憧れと現実、夢と希望

福岡大学附属若葉高等学校 1年生 梶原 葵

執筆者紹介

梶原 葵 (かじはら あおい)

2002年生まれ。福岡大学附属若葉高等学校スーパー特進コース1年生。中学時代から海外での活動に興味を抱き、2018年7月、「青少年アンビシャスの翼」団員としてベトナムへ派遣され、ボランティア活動に従事。

はじめに

私は幼い頃から、テレビや本で見る「外国」という世界に大きな憧れを持ち、自分の知らない「外国」を自分の目で見てみたいと強く思っていました。そんな憧れから、私は漠然と、将来、海外で活躍できる日本人になりたいと思うようになりました。しかし、そのような思いを抱きながらも、将来外国で何がしたいのか、夢を叶えるために今の自分にできることは何なのか、ずっと分からないままでした。そんな時に出会ったのが、福岡県が主催している「青少年アンビシャスの翼」事業¹でした。このプログラムは、福岡県内の高校生のみが応募でき、国内での事前研修後に、ベトナムで10日間のボランティア活動を実施し、現地ボランティアとの共同生活を通して、国際力や自己解決力を身に付けることを目的とした事業です。私はこの事業を初めて知った時、その内容に強く惹かれ、大きな魅力を感じました。しかし、私のような高校生が誰かのためにできることなんて、ちっぽけでたかが知れているのではないかとも思っていました。このプロ

¹ 海外で実施される国際ワークキャンプに福岡県内の青少年を派遣し、海外の青少年と寝食を共にしながら海外で起きている課題に対し多様な国の人々と協働し、自ら考え、乗り越えていくことで、国際力を身に付けた、21世紀を担うたくましい青少年を育成することを目的として毎年実施されている。

ラムに参加することで、自分の生き方や考えに何かしらの変化を与えてくれるのではないかと思い参加を決意し、2018年7月20日から30日までの10日間、ベトナムの首都・ハノイで活動を行いました。

国内事前研修

アンビシャスの団員に選ばれると、まず、三度にわたる事前宿泊研修がありました。この研修では、英会話やベトナム語、海外での危機管理などについて学びました。私は今まで「ボランティア」とは、現地の人たちのために私たちの価値観の下に行くものだと考えていました。しかし、メンバーの中には「現地の方と一緒にいることこそがボランティアだ」と考える人や、「私たちが“してあげる”というのは上から目線じゃないか」と考える人もいて、同じ目的を持った仲間の間でもさまざまな考え方があることに驚きました。私と同じ高校生なのに、相手の立場や気持ちになって物事を考え、自分の意見を明確に伝えることができる人がいることに衝撃を受けました。このようにメンバーとの意見交換や研修を通して、今まで私が抱いていた「ボランティア」は、行う側の自己満足ばかりが先行する一方的なもので、その考え方ではボランティアを必要とする人々のニーズには応えられない不十分なものであることに気付かされました。

Fisher Island でのボランティア活動

4時間のフライトを経てハノイに到着すると、目に入る全ての光景が今まで見たことのないものばかりでドキドキしました。本当に10日間ここでやっていけるのか不安でたまりませんでした。ベトナム人ボランティアが温かく迎えてくれたので、その不安は一瞬で吹き飛びました。公用語はベトナム語ですが、英語を話すことのできる人が日本よりも多く、私たちは英語でコミュニケーションを取りました。また、ベトナムは人口よりもバイクの数の多いといわれるほどで、街中には常にクラクションの音が鳴



水上スラム (Fisher Island)

り響いていました。ベトナム料理も日本人の口に合うものばかりで、フランスの植民地だった影響からか、特にパンがおいしかったです。赤道に近い東南アジア特有の暑さを覚悟していたのですが、それほど暑いと感じることはなく、気候にもすぐに順応できました（記録的酷暑に見舞われた日本の方が暑かったです）。

私たちがボランティアを行った場所は、Fisher Island（以下、FI）といわれる水上スラムでした。ここでは、さまざまな理由で住む場所をなくした人たちが川にいかだを組み、その上に家を建て、その日暮らしの生活を送っています。大人だけでなく、小さな子どもたちもたくさん住んでいます（貧困に苦しむ地域の子どもたちですが、これまでのボランティア活動の成果によって、学校へ通うことができているそうです）。水道が通っていないFIでは、茶色に濁った川の水をそのまま飲み水にしているという現状を目の当たりにし、この状況を少しでも変えたいと強く思いました。私たちはここで、安心して水を飲むことができるための「浄水器」作りとFI内の清掃活動を行いました。

「浄水器」といっても、私たちの家庭にあるようなものではなく、大きなポリ容器の底面に砂や泥、炭などを重ねてろ過の原理を用いて作ります。浄水器作りは、まず、材料となる砂の汚れを洗浄することからスタートしました。汚れた砂をバケツの中に入れ、きれいな水を注ぎ、米を研ぐのと同じ要領で何度も繰り返し洗いました。この作業は地道で重労働でしたが、made in Vietnamの浄水器で透明な水が出てきた時には大きな達成感がありました。

次に行ったFI内の清掃活動では、ここで暮らす人々の現実を見せつけられま



とても簡素な作りで、台風が来るとすぐに壊れてしまいます

した。それは、片づけたゴミの中に「注射器」を見つけたからです。FIにはアルコール中毒や薬物中毒の人々がいることを事前に聞かされていました。しかし、明らかに医療目的として使われていないと分かる注射器を見た時、言葉で言い表すことのできない強い衝撃を受けました。ところが、その現実の裏側でFIの人たちはとても楽しそうに暮らしていました。厳しい今の生活の中にも

幸せを見出し、力強く生きているように見えました。経済的な貧しさはあっても、人々は笑顔に満ちていて、私たちの活動に対して「Cam on（ありがとう）」と声を掛けてくれた姿が印象的でした。

おわりに プログラムを終えての変化

このプログラムに参加するまで、ボランティアとは何かしら困っている人の現状を改善するために行うものだと思っていました。FIの人たちは、町の中に家を持ち安定した仕事に就くという夢を持っているに違いない、その夢に少しでも近づくためにボランティアが必要とされていると考えていました。しかし、活動を共にしたベトナム人ボランティアから「FIの環境を改善するだけでは何の解決にもならない。ここで暮らしている子どもたちが薬物やアルコール中毒の危険を感じることなく生きていけるように、子どもたちの将来を見据えて活動することが大切だ」と聞き、私の抱いていたボランティアへの考え方はさらに広がりました。一人一人の小さな力でも多くの人たちの命を守る活動につながっていることを実感するとともに、今行っているボランティア活動は、現在だけでなく未来につながっているのだと学びました。

FIでは現在、「Eco Sponge Action（以下、ESA）」という活動に取り組んでいます。これはFIに暮らす女性が作った手編みの食器洗い用スポンジを300円で販売し、売上の1/3ずつを材料費、FIの環境保全活動等の運営資金、そして女性の収入に充てるという活動です。ここで作られるスポンジは、洗剤のいらぬ環境にやさしいもので、FIに暮らす人々の経済的自立につながる活動として始まりました。私は、この事業をサポートしていくと同時に、FIやESAのことをより多くの人に伝えていきたいと思っています。それはFIの支援という理由だけでなく、多くの人に自分の力が誰かの役に立つことを知ってもらいたいからです。私もこのプログラムに参加するまで、自分の力はとてもちっぽけで誰かのためになれるなんて思ってもみませんでした



FIの女性が手編みのスポンジを作っています

した。しかし、このプログラムに参加してその考えは大きく変わりました。自分自身で思っている以上に、一人一人には誰かのために使える力があることをたくさんの人に知ってほしいのです。そして、その力を困っている人のために使い、将来、どんな場所でも、子どもたちが安全に笑顔で過ごせる世の中にしていきたいです。

〈関連サイト〉

国際ボランティア NGO NICE 「Eco Sponge Action アクリルたわし販売」
http://www.nice1.gr.jp/ESA_store/

福岡大学附属若葉高等学校 男女共学・新3コース制スタート

多様性のある学びの環境を実現するため、2019年度から3コース制の男女共学校として新たにスタートします。

グローバル化する社会で求められる人材は、単に国の垣根を越えて活躍するだけではありません。自己を知り他者を理解し、受け入れ、ともに歩むことのできる「心の垣根」を持たない人材です。留学生や地域、大学との交流など多くの教育プログラムに加え、男女共学によって今まで以上にさまざまな価値観を持つ人との交流を促し、生徒自らの人間的成長につなげます。



福岡大学新室内プール（仮称）

本学では、「建学の精神」に基づいた「全人教育」の実現に向け、キャンパス内の建物、グラウンド、通路などを整備する事業を積極的に推進しています。

このキャンパス整備事業の一環として、現在、福岡大学新室内プール（仮称）*の建設を進め、2020年度の完成を目指しています。環境に配慮し太陽光パネルを設置した施設で、学生の授業や課外教育活動のほか、幅広い年齢層を対象とした教室、スポーツイベント開催などにより、地域や社会に貢献する場として後世の人々に永く愛される魅力的な施設とすることを基本理念としています。また、周辺地域と一体となった大地を創出し、キャンパスと地域を積極的につなぐことによって、人の流れが交わる交流・賑わいの場を創出する施設を目指します。

※公益財団法人日本水泳連盟に公認を受ける予定です。



外観



内観

完成予想図

福岡大学医療施設のご案内

福岡大学病院



〒814-0180 福岡市城南区七隈七丁目45番1号
TEL 092-801-1011(代)

外来診療案内

■受付時間 月～金曜 初診 8時30分～12時
再診 8時30分～15時
■休診日 土曜・日曜・祝日(振替休日を含む)
盆休(8月15日)
年末年始(12月29日～1月3日)

福岡大学筑紫病院



〒818-8502 福岡県筑紫野市俗明院一丁目1番1号
TEL 092-921-1011(代)

外来診療案内

■受付時間 月～金曜 8時40分～11時
土曜(予約のみ) 8時40分～10時30分
■休診日 日曜・祝日(振替休日を含む)
盆休(8月15日)
年末年始(12月29日～1月3日)

福岡大学西新病院



〒814-8522 福岡市早良区祖原15番7号
TEL 092-831-1211(代)

外来診療案内

■診療時間 月～金曜 9時～17時
土曜 9時～13時
■受付時間 月～土曜 8時30分～11時
■休診日 日曜・祝日(振替休日を含む)

福岡大学博多駅クリニック



〒812-0012 福岡市博多区博多駅中央街9番1号 KITTE博多8階
TEL 092-435-1011

外来診療案内

■診療時間 月～金曜 10時～18時
土曜 10時～17時
■休診日 日曜・祝日(振替休日を含む)
盆休(8月15日)
年末年始(12月29日～1月3日)



第14回(平成30年度) 全国高校生川柳コンクール入選作品

福岡大学主催の第14回(平成30年度)全国高校生川柳コンクールには、全国270校の17,906人から43,585作品の応募がありました。

入選作品は次のとおりです。

- 金賞**〔福岡大学長賞〕 散歩道 祖母を何度も ふりかえる
石川県 金沢大学附属高等学校 2年 西村 颯
- 銀賞** 十八歳 子供と大人 使いわけ
千葉県 あずさ第一高等学校(渋谷キャンパス) 3年 千葉 春希
- 銅賞** ほほ忍者 日陰に沿って 歩く女子
岡山県 清心女子高等学校 3年 菊地 環
- 特別賞**〔全日本川柳協会賞〕 寡黙だが 多くを語る 親父の背
兵庫県 神戸市立神港橋高等学校 2年 山口 拳弥
- 特別賞**〔西日本新聞社賞〕 なにげない 日常がいい ときもある
山口県 柳井学園高等学校 3年 宮脇 佳音
- 特別賞**〔NHK福岡放送局長賞〕 千年の 時超え「いいね!」 恋の和歌
茨城県 茨城県立水戸第一高等学校 3年 田所 瑞希
- 特別賞**〔紀伊國屋書店賞〕 卒業式 明日から大海 知る蛙
愛知県 名古屋市立緑高等学校 3年 山村 愛音
- 特別賞**〔福大生が選ぶ賞〕
体温計 出ろ!出ろ!出ない。行ってきます。 兵庫県 姫路市立琴丘高等学校 2年 沖中 真琴
性別で 縛ってはならぬ 愛友情 東京都 東京都立府中東高等学校 2年 齊藤 猛
晴れ舞台 背中 で伝わる その思い 長崎県 聖和女子学院高等学校 1年 朝長 澄香
盛れるよう コンプレックス 隠 snow 栃木県 栃木県立さくら清修高等学校 3年 古川 想真
- 入賞**
告白も 送信取り消し する時代 鹿児島県 鹿屋市立鹿屋女子高等学校 1年 出水沢理夢
運動会 子より本気の 母の顔 福岡県 福岡大学附属若葉高等学校 1年 江頭香緒子
監督が 見てる時だけ 絶不調 熊本県 熊本県立第一高等学校 3年 大島 優海
おかえりの 声に包まれ 増える靴 東京都 宝仙学園高等学校 1年 大村 真凜
出来るはず 鏡に映る 我に問う 神奈川県 清心女子高等学校 2年 桶本 莉菜
ライフライン 止まって気づく ありがたさ 広島県 呉港高等学校 2年 梶本 七瀬
お弁当 母から子への ラブレター 新潟県 新潟県立津南中等教育学校 4年 加藤 有彩
合唱部 男一人で モテもせず 千葉県 千葉県立天羽高等学校 1年 金子 智規
つぶやきを 口で言わずに 文字で打つ 広島県 広島県立呉工業高等学校 2年 北川 司

落ちてくれ 君の消しゴム 拾いたい
 国会は 日本を担う 幼稚園
 きずついた 君の心に ばんそうこう
 君からの「おやすみ」のLINE 眠気飛ぶ
 母弁当 インスタ映える 僕遅刻
 あと一步 平成の夏 ここで散る
 18の 思いと願い 票に込め
 家族LINE 入ってないのは 親父だけ
 相合傘 見ちゃった今日は 涙雨
 平成が 終われば私も 古い人
 困ったら 教師よりも 知恵袋
 セミの声 負けじと歌う 応援歌
 居残りし 団結感じた 文化祭
 カランコロン 一步步けば 恋の音
 大丈夫 裏にかくれた SOS
 新盆の 馬の背中に 祖父思う
 猛暑日の 三者面談 こおりつく
 解けないや キミの気持ちの 方程式
 ボランティア 心と力 被災者へ
 とおり雨 遅れて虹が 追いついた
 いつの日か わかりあいたい 歴史観
 黒板が 芸術作品 化学基礎
 青色が 押し寄せてくる 夏の空
 切りたての 前髪揺らす 夏の風
 AIに 宿題やらせる 夏休み
 蚊も飛ばぬ 夏の暑さの すさまじさ
 届かない 僕の気持ちは 未送信
 好きな子を 探して廻る 夏祭り
 スマホ置き 数秒後には 手の上に
 テストの日「ノー勉」言う奴 やってる説
 父の背を 越したか分からぬ 遺影では
 この時代 AI進化 ヒト退化
 嫉妬して 知らないうちに 恋を知る
 汚れると 安心できる 参考書
 借金を 子供にはらわす 社会かな
 雨の中 かけてゆくのは ランドセル

愛知県	愛知啓成高等学校	2年	木村 真依
神奈川県	神奈川県立厚木西高等学校	3年	久世 康雅
滋賀県	近江高等学校	2年	藏本 竜輝
愛媛県	愛媛県立新居浜南高等学校	3年	鴻上 菜月
石川県	石川県立工業高等学校	2年	古來 羽汰
福岡県	福岡県立小倉東高等学校	2年	佐伯 亮汰
京都府	大谷高等学校	3年	佐々木 浩太
兵庫県	姫路市立琴丘高等学校	2年	佐藤 充
佐賀県	早稲田佐賀高等学校	2年	椎山 摩耶
埼玉県	栄東高等学校	1年	新本 瑞樹
福岡県	福岡県立三池高等学校	2年	園田 広明
大阪府	大阪府立摂津高等学校	1年	高井 佑絃
静岡県	加藤学園高等学校	1年	高田 彩海
福岡県	福岡大学附属大濠高等学校	2年	高村 彩友
群馬県	群馬県立伊勢崎興陽高等学校	1年	田中 緑
東京都	武蔵野女子学院高等学校	1年	中嶋 彩乃
熊本県	熊本市立必由館高等学校	2年	並川 玲奈
福岡県	つくば開成福岡高等学校	3年	西川 彩音
山口県	山口県立小野田高等学校	2年	野村 慶尚
宮城県	聖ウルスラ学院英智高等学校	3年	蓮沼 杏珠
山口県	山口県立小野田高等学校	2年	濱野 将也
群馬県	高崎商科大学附属高等学校	3年	廣神 絢己
富山県	富山県立富山北部高等学校	1年	堀端 莉穂
福岡県	福岡大学附属若葉高等学校	1年	松尾 万美
熊本県	熊本市立必由館高等学校	2年	松下 慶彦
福岡県	福岡県立久留米高等学校	1年	丸山 大毅
京都府	大谷高等学校	3年	三島 亘貴
愛知県	愛知県立東郷高等学校	2年	水谷 翔
熊本県	熊本県立第一高等学校	3年	宮本 雅也
愛知県	愛知県立東郷高等学校	2年	山田 耕大
東京都	足立学園高等学校	1年	山田 大夢
石川県	石川県立工業高等学校	3年	山本 篤志
香川県	香川県立小豆島中央高等学校	3年	山本 歩果
福岡県	つくば開成福岡高等学校	3年	山本 知佳
愛知県	愛知県立東郷高等学校	2年	山本 義晶
大阪府	近畿大学附属高等学校	1年	吉村 有加

※受賞者氏名の五十音順に記載

学校賞 (多数の優秀な作品を創作した学校を表彰)

- 愛知県立東郷高等学校(愛知県) つくば開成福岡高等学校(福岡県)
- 石川県立工業高等学校(石川県) 姫路市立琴丘高等学校(兵庫県)
- 大谷高等学校(京都府) 福岡大学附属若葉高等学校(福岡県)
- 熊本市立必由館高等学校(熊本県) 山口県立小野田高等学校(山口県)
- 熊本県立第一高等学校(熊本県)

福岡大学校歌

作詞/狩野 満 作曲/飯田 信夫 編曲/平井 哲三郎

ちくしのーはーげーんかいのしお ざいはるか せ ぶりね
 とぅときーはーもーゆるひのあつ きいのちかけ いせい
 ゆかしきーはーじー ゆうなるがく のほこりか ゆうじょう

をーゆび さすこ ろーう つくーしー きーわれ
 のーはた かざしつ つーた くーまーしー きーわれ
 のーわか くさもえ てーた とーうーべー きーわれ

ら がぼこーう われ ら がりそーう みちこそは け
 ら がぼこーう われ ら がほう ふい ゆめこそは お
 ら がぼこーう われ ら がしめ ときこそは や

わしかれ ひ と らし きーひ と に ある べ くーか
 おい なれ あ と らし きーひ と に ある べ くーか
 がて ゆけ う つ ろわ ぬーまこ とをむね てーつ

が や け る あ す を のぞみて わ かーきーひーのーきよ
 な い な ら う は る に は よ わ じ ゆ たーかーなーのーあ
 ど い あ う きょう を う た わ ん ひ らーけーゆーくーあ

うをまなば ん
 すきをうたわ ん

三、ゆかしきは 二、とうときは 一、筑紫野は

自由なる学のほこりか
 友情の若草もえて
 讃うべきわれらが母校
 時こそはやがて逝け
 うつろあぬ誠を胸に
 つどいあう今日を歌わん
 ひらけゆく明日を歌わん

もゆる火の熱きいのちか
 経世の旗かざしつ
 たくましきわれらが母校
 夢こそは大いなる
 あたらしき土ふみしめて
 花散らう春には酔わじ
 ゆたかなる秋を祈らん

二、とうときは
 輝ける明日を望みば
 若き日の今日を学ばん

一、筑紫野は
 玄海の汐ざいはるか
 背振ねを指さすところ
 うつくしきわれらが母校
 道こそはけわしけれ
 人らしき人にあるべく
 われらが理想
 輝ける明日を望みば
 若き日の今日を学ばん



情報発信

公式ウェブサイト



福岡大学の最新情報やトピックス等さまざまな情報を発信しています。サイトには新着情報収集機能（RSS）を備えており、情報をリアルタイムで確認することができます。また、公式Facebook、Twitter、Instagram等でも情報発信しています。
<https://www.fukuoka-u.ac.jp/>

大学案内



主に高校生やその保護者、高校教員等を対象にした広報誌です。学部学科の紹介をはじめ、卒業生の活躍や在学生の学びの様子等について紹介しています。入試情報等も一部掲載しています。
 (A 4判184ページ)

学園通信



大学の現況や取り組み、卒業生や在学生の活躍、教員の研究、医療活動等を掲載した広報誌です。年4回（4月、6月、10月、1月）発行しています。公式ウェブサイトではバックナンバーも読むことができます。(A 4判44ページ)

大学要覧



福岡大学の概要や取り組みを紹介している学外向けの広報誌です。本学の教育研究活動等の基本情報や各種データ（学生数や財務状況等）を分かりやすく掲載しています。
 (A 5判96ページ)

『七隈の杜』 2019／第15号

2019（平成31）年2月15日発行
 編集 福岡大学広報課
 発行 福岡大学
 福岡市城南区七隈八丁目19番1号
 TEL 092-871-6631（代）
fupr@adm.fukuoka-u.ac.jp
<https://www.fukuoka-u.ac.jp>

『七隈の杜』に対するご感想、ご意見をお寄せください。
 バックナンバーに関するお問い合わせもこちらにお電話ください。